

日本書籍株式會社編纂

國語書方教法及教授案

日本書籍株式會社

緒言
小學校各教科の教授法研鑽精緻を極め殆んど餘す處なきに於いて獨り書き方の教授法のみは未だ詳ならず其由來處は他教科の多くは之を歐米に探ぬる便あれども我が國の書體は之を泰西のと異にするが爲めに従つて其教法までも遺棄せられたるにはあらずや然らば是を我が國の古來及び支那に索むるも傳へられし書道甚だ多しと雖何れも舊法迂遠にして一も學級教授に適せざるのみならず窮竟の目的たる實用に遠ざかり今日の時世に適せず本書は此缺漏を補はんが爲めに國

定要字帖に準據して其教法及び教授案を述べたり然れども不備の點尠しとせず更に訂正の期あるべし希くは是正の榮を賜

國語書方教法及教授案緒言

明治廿九年五月十八日
交内

尋常小學第一學年

二

はんことを。

明治三十七年三月

編者識

緒

言

目次

上篇 理論の部

書き方教授概論

..... 一

下篇 實際の部

尋常科第一學年書き方教授

..... 三五

一、書き方用具取扱に關する教授

..... 三六

二、姿勢の整へ方

..... 四四

三、書き方の豫備としての繪畫教授

..... 四五

四、第一學年用手本の教授法

..... 六九

タロ

..... 七三

オチヨ

..... 八〇

ニハママハシ

..... 八四

イネコメムギ

..... 八九

國語書方教法及教授案目次

一

モミヂノエダ	九五
ツキシソラヨル	九九
テッポーユミヤ	一〇三
シージビョーア	一〇七
キョースチャワン	一〇九
アガレエドコ	一一三
チンドリヘイ	一一六
イヌノセナカ	一二〇
サカナノカゲ	一二三
ウマヤマグサ	一二五
トリガキマス	一二七
一二三四五六七八九十	一二八
第一學年用手中の新出文字一覽表	一四一

目次終

國語書方教法及教授案 尋常小學第一學年

上篇 理論の部

書き方教授概論

國語の教授要旨と書き方練習の必要 國語の要旨は今更改めていふ必要もなければ、順序上之を畧述せんに、音聲又は文字によりて、他人が發表せる思想感情を正當に理解し、及び自己の思想感情をも、正しく且つ美はしく他に發表せしむる能を養ひつゝ、兒童の心情を養育し、且つ智識を啓發するにあり、而して此内、文字を用ひて、他人の思想感情を理解する場合と、自己の思想感情を發表する場合とは、必ずや正確ならざるべからず、且つ之れが美的なるをよしとするのみならず、更に迅速に書

寫する能を養ふを要とす、是れ即ち書き方の必要ある所以にして、書き方教授の目的も亦此内に包含せらるべく、書き方の領域も此内に索むべきなり。

書き方の意義 書き方は本來國語の一要素にして、融合せるものなれば、之を一分科として、取り出すべきものにはあらざれども、美的に發表せしめんとする要求に應ぜんが爲め、將た毛筆を用ふる爲めに、複雑なる器具の準備を要し、之れが爲めに時間を別立せしむるなど、特殊の方法を行ふ必要よりして、書き方の意義を、廣狹兩様の場合に用ふることあり、其廣義に用ふる場合とは、読み方綴り方の際課する書取筆記綴字までも、皆書き方の内に包含せしめたるものなれど、其狹義の書き方は日本古來の習字と同様に見たる意義にして、一種の美書練習を指せるものなり、然れどもかくの如く、其意義にこそ廣狹二様あれ、其實施上に於いては、狹義

論者とても、読み方綴り方に從屬する書き方を顧慮せざるにはあらず、同じく字畫・字形を正して誤字なからしめんとするのみならず、可成美的に記述せしめんとに外ならざれば、解釋の如何により、其實際に相違あるにあらず、單に美書の練習につとめたりとて、字畫・字形の正しからざるものは、既に之を美的とは認め難きを以ても知らるべし、かゝれば其解釋は寧ろ狹義ならむよりは、廣義になし置くを可なりとす、然れども本書編纂の要とする處は、如何にせば最も美的に書かしむるを得るかを、研究せんとする所謂方法論なるを以て、其読み方綴り方に從屬する場合の書き方に就いては、多くいはず、唯書き取り及綴字の際書き方方面の注意として、なすべき要領を述ぶるに留め、一種の技能科として見たる方面に就いて詳述すべし。

書き方の目的 日用普通文字の字畫・連筆の順序を知らしめ、且つ字

形・字行を正しく、精細に、明瞭に、快速に、而かも審美的に、書き得る能を養ひ、之を實用上に裨益あらしめ、且つ之によりて、審美心を養成せしむるは、主要の目的なり、また之を課して、眼及び手指を練り、筋肉と精神とを連絡せしめ、清潔・整頓・靜肅・周密等の良習慣を興へ、兼ねて智徳の脩養・感情意志の陶冶等に資するは、其副貳的にあらはるゝ目的なり。

書き方と読み方及び綴り方との連絡 國語統一の呼び聲の爲めに、從來孤立せし読み方・綴り方・書き方は、相互に従屬して關係せしめ、其教科書の如きも、大に體面を新にし、教授上の便益を増し將た兒童の受納を容易ならしめしは、一般の認むる處なりしが、其教科書が、未だ兒童の年齢學力に適應せず、且つ分量の多かりし爲めに、読み方の進捗と、書き方等と一致せざりし事など多く、事實上不便を感じたり、今や新教科書の制定せらるゝや、殊に其連絡體を得、大に見るべきものなれば、今後の書き

方は一層教授上の便を感じることも多からん。

さて読み・書き・綴りの三要目の關係は、其各が相互に従屬關係を保つものなれば、假りに読み方を授くる場合としても、目之を見口之を誦する外に、手之を書かば、一層明確なる觀念となるべく、又思想として收得せし事も、更に之を綴り方として、發表し文字に表はさば、格段明確となるべきは論なき事なり、此の理由のもとに、書取及び應用的綴り方は、綴り方の授業にもあらず、將た書き方の時間にあらざる、読み方教授の際に課する必要がある所以なり、而して此際は、いふまでもなく、字畫を分解し、字形を正しくして、誤字なからしむるのみならず、能ふべくは結構法に合ひ、運筆も輕妙ならば更に佳なり、かくの如く読み方に於いては、書き方を顧み、書き方に於いては他を顧みるが如く、相互に補佐融通して、國語本來の目的を完うせんことを要とす、今試みに読み方・綴り方授業の際、書き方に

對してなすべき重なる注意要項を摘載して、参考に資すべし。

一 読み方を授くる場合には、常に文字を分解して之れが結構を明示するを要す。

二 授けたる文字は、屢々其結構を問答するを利とす、假令ば「持」は手扁寺旁といふが如し。

三 既習文字の書取は、成るべく趣味を添へ、旺盛なる注意のもとに書寫せしむるを要す。

四 書寫の姿勢は、特に注意すべし、單に習字の際注意したりとて、他の時間に不注意なるときは、何の効果もなかるべし。

五 時に速寫を課し、或は聞書をなさしむべし、この場合には後に書物と對照せしめ、或は板上にて誤の有無を檢查すべし。

六 畧字の普通なるもの、及び活字體と普通書體と（入、入、益、益）の關

係は、便宜知らしめ置くべし。

七 書取文字は、多く小字に偏し易し、學年に應じ適當なるべく注意すべし。

八 通常鉛筆又は石筆を用ふれども、時としては毛筆を用ひて書取らしむべし。

九 鉛筆・石筆は共に其長さに注意すべし、其持ち方も、毛筆とは自ら異なれば、示例して適當に導くべし。

十 綴り方清書帳、及び書取練習帳、日記帳等の檢閲は、之を周到にし兒童の勞力を満足せしむべし。

十一 書寫に熟れしむるときは、一般教科の授業に時間を利用すること多し、常に充分の獎勵をなすべし。

十二 新教科書は、其分量少く記事簡易なれば、從來の教科書に比し割合

多く應用的書取を課して可なり、殊に書き取りとして課したるために、知識を確實にし、教授に變化あらしむる二大利益を收むべければ、勵行して可なり、左に書取方法の種類を擧ぐべし。

- 一 讀本より寫し取る書取、全部又は某部分を教科書の儘を書取らしむる方法なり。
- 二 教師の口授による書取、……教師の口唱を其儘書取るものにして、既習の個所を復習する場合等に多く用ひらるゝ普通の方法なり。
- 三 讀本の文體を改むる書取、……文語體を談話體に翻譯せしめつゝ、教科書を書取らしむる方法の類を云ふ。
- 四 教師の口唱を翻譯する書取、……是は談話體を文語體に變改しつゝ書取る方法にして、上級生に課して有効なり。
- 五 綴り方に類する書取、某問題により、其意見を書き取る方法にして、

て、書物を持つ場合と、否らざる場合とあり。

- 六 漢字のみの書取、……此は多く扁旁によりて彙類せしむる方法にして、假令ば彼・破・波の如く集めしむるか、同扁同冠等の文字を字書風に書き集めしむるの類なり。

書き方の時間數及び字數、書き方の一週間授業時數は、尋常第一學年より尋常第四學年に至るまで三時間、高等科は通じて二時間を以て普通とすれども、中には尋常第三四學年は國語の總時數多き割合より、書き方に更らに一二時を多く分配せるもあり、かくの如き場合には、之を大字の練習にのみ充つることなく、一二時間又は隔週一時間は、綴り方又は讀本中の應用的書き取等を材料として、細字の練習に充つるを可とす。

次に一回に練習せしむべき字數は、從來大に議論ありたる處にして、大字説を採る人は、其字數を減少せんとし、小字説を主張するものは、多きを

望みたれど、新教科書により、殆んど其字數は一定せられたるが如し、新教科書は是を従來のに比較すれば、其字數は較多きが如し、而して上級學年に進むに従ひ、細字を多く加へ、高等三四學年に進みては、殆んど全く細字になしたり、教育上期する處は、實用に重きを置くべきなれば、書き方の最終は、細字・速寫にあれど、初めより細字を用ふるときは、字形・筆勢・筆意等を味はしめ難く、且つ訂正に不便にして、加ふるに筋肉の練習ともならず、故に初學年に於いては、可成其字數を減じて大書せしめ、迷に上級に進むに従ひて細字となすは、理の正に然るべき處なり。

書き方教授上常に注意すべき要則

一 書き方は圖畫・手工の類と同じく、一種の技能に屬するを以て、筋肉の發達に適應するを度とすべし、身心の調和運用よろしきを得れば、従ひて其技能も進歩すべし、されば疎より密に進むべしといへる原則は、此

教授にも必要の條件なり。

二 技能的教科に必要な條件は、練磨の一事なり、されば一度其方法を示さば、適當の手段によりて、反覆練習するをよしとす。

三 兒童は未だ如何なるが正しきか、將た美なるかを觀別し得ざれば、常に善良なる模範を示すを要す、而して之を精密に觀察せしむべし。

以上の三則は、書き方教授の根本的原則にして、すべての計畫方法は、悉く此基本より出發し活用するものなれば、教授者たるものは常に注意すべき要件なり。

用具 書き方教授に於いて、先づ最初に注意すべきは用具なり、若し、この用具にして整頓せざれば、硯に精疎あり、墨に濃淡あり、筆に大小ありて、到底統一ある學級の教授をなすべからず。而して、この用具の出納の作法、及び排列の位置に於いて、相當の制定なく、亂雜ならんには、毎

時、是等の雜事に逐はれ、貴重の時間を徒費するのみならず、延いて又全時間の管理を亂し、準備の整へる熱心なる教授を、無益に過すことあるべし。故に本科にありては、最初十分なる注意によりて、學用品の一定にとむることを要す。

されば、その地方生活の度を考へ、適當の用具を一纏に購入し、同一の品質たらしむるを可とす、若し能はざるまでも、ある模範品を學校に備へ置き、可成類似の品を携帯せしむるをよしとす。從來地方に於いての經驗に徴するに、寧ろ生活の程度が、器物と一定せしめ難きに非ずして、教師の用意不十分なりしたために、既に個々の物品を購入せしめし類多しとす。勿論稀には、兄弟の不用品を携帯するものなきにしもあらざれど、是等は、極めて、少數者に過ぎず、且つ、多くは、教育上器物の不統一は、非常なる損失なることを、辨へざる父兄多きに居れば。入學式又は、父兄懇

談會等舉行の際に、懇切にその趣旨を説明せば、何人か之れに賛同せざるものあらんや。況んや、その購入物品として。敢て贅澤品を備へんとはならず、只同一模品にてさへあれば、足れるに於ておや。然らば、その準備すべきは、如何なる種類にして、如何なる形式のものを最可とするか、左に大要を記述すべし。

一 硯箱は、机面の右端に置きても、又机中に納めても、大に過ぎざるを度とすべし。三島博士案の机には、普通に、八寸と稱ふる大さの硯箱は、相當せり。

二 硯は、精疎宜しきに適ひ、その大さは、凡そ五寸以上の物をよしとす、その理由とする所は、可成磨面を長からしむるを利とするを以て、四寸以下に下らざるを擇ぶべきなり。

三 墨は、佳良なるをよしとすれども、實用上差支なきを度とすべきは、

論なしとす。近來の發明にかゝる開明墨は、數次の改良を経て、大に見るべき物となり、一ポンド入りの一塊を、熱湯三升許に溶かし貯藏するに腐敗沈澱の虞なく、墨色も相應にして、磨墨の煩なきのみならず、經濟上よりも損失を見ざるが如し、かく磨墨の時間を削ぐ所を積算せば、實に莫大の利益なるべし。特に、初學年生の如きは、磨墨のために、多くの時間を消費するのみならず、ために、衣袖その他を汚損すること少なからずして、管理上の利益亦多大ならん。希くば、此種の精品の益々世に顯はれんことを望んで止まざる所なり。

四 筆は、學年により、その大小を異にするが故に、今茲に一樣に述べがたけれども、文字の大小と、年齢の多少とにより、大に筆管の加減を要す。穂は、剛柔適當なるべきは、論なけれども、柔にすぎんよりは、寧ろ剛なるをよしとす。穂は、緊く筆管に夾まり、數次の洗淨にも、脱毛せざるものを選択すべし。

五 墨拭は、筆及び墨を拭ふために、硯箱中に備ふべき布にして、方一尺以内の綿布にて可なり。

六 草紙は、可成白紙(半紙大)を可とすれど、古新聞紙を綴れるものにて可なり、要するに、筆痕の歴然たることは、巧拙異同の判斷に便なり。

七 下敷紙は、所謂厚紙表紙をよしとすれど、馬糞紙を用ふるも妨げなし。最初は、縦横線及斜線の入り渡れるものを用ひしめ、學年の進むに従ひ、漸次其線を減少し、終に、全く用ひざるに至るべし。

次に、注意すべきは、用具の出納及排列の仕方なり。前に述べたるが如く、出納及排列の作法は、秩序的習慣を養ふの要あれば、最初は、嚴密にこれを行ひ、終に迅速に且つ靜肅にして、更に教師の煩勞を要せざるに至らん

ことを望む。されば、初は、分解的に、一々ある號令の下に出入を命ずるも、徐々に獨行的に、簡單なる指令のもとに、動作せしむべし、従つて、机上及机内の整頓に至るまで、常に秩序正しく、一定なるをよしとす。此の如きは、單に書き方に於てのみ、顧慮するのみならず、修身作法教授の際等にも、その必要を説きて、勵行せしめんことを要す。

教室用の用具 前節には、兒童各自の備品につきて述べたればこゝに教師用として、教室に備ふべき用具につき述ぶる所あらんとす。教室用具は、兒童の物と同形同質の品種を備ふる外に、又遺失者に貸與すべき豫備品として、數點の用意をなさざるべからず。

教室用の備品として大切なるは、大要左の如し。

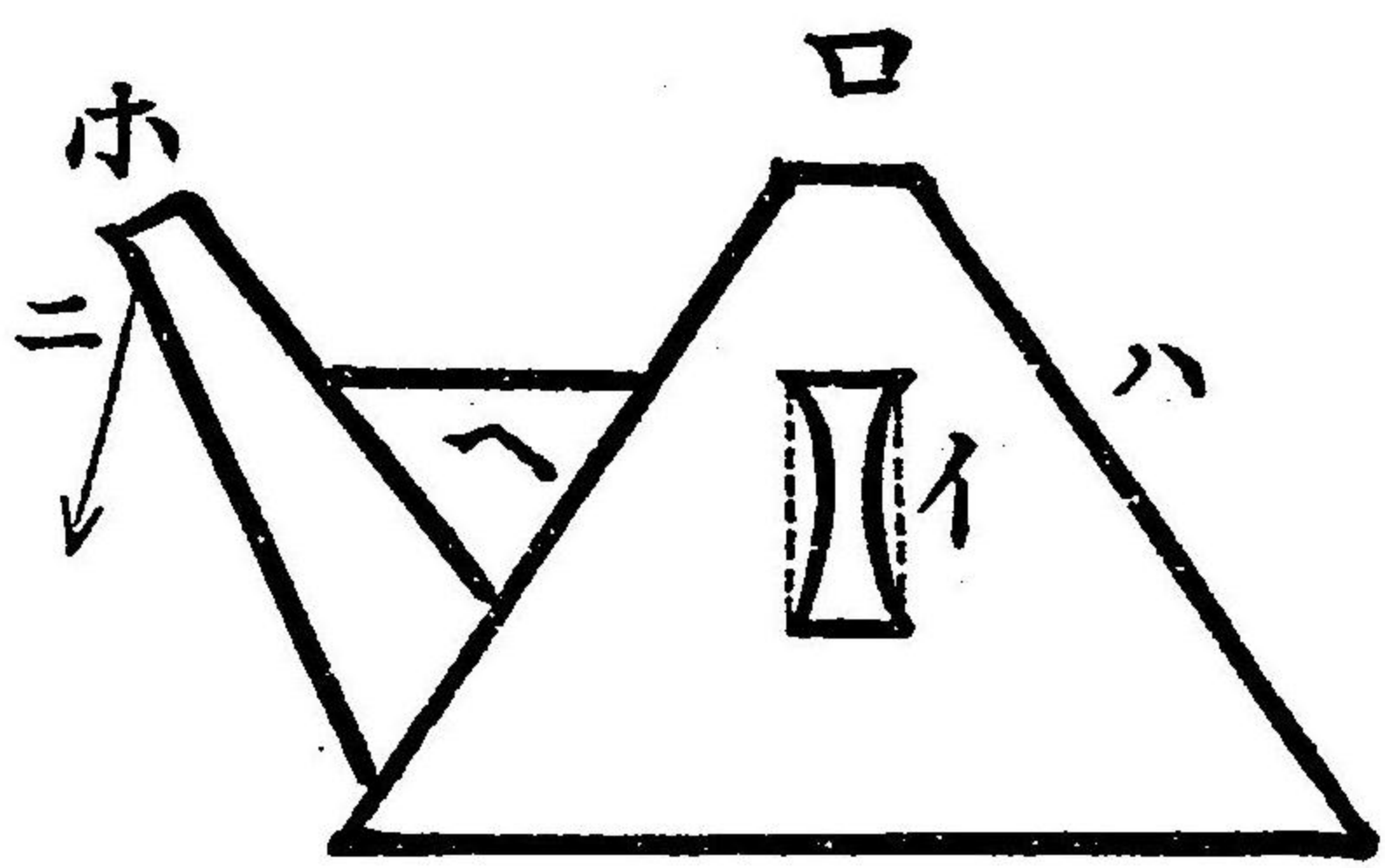
一 水入 陶器、竹製、又は亞鉛製等、數種あれども、要は、水の程よく配給し得られんことを望むにあれば、特にその製作に注意せざるべから

ず。今其最も適當と認むる物一種を左に述べべし。

そは、亞鉛製にして、高さ凡二寸五分底部の直徑凡三寸許の圓錐形をなせるものなり。而して、底部の擴大なるは、大に安全位置を保つの便ありとす。(イ)に四指を挿み、(ロ)の小口に拇指をあつるに都合よからしむ、(そのイ)の柄を(ハ)に置かざるは、手指を多く傾けざるも、よく給水し得しめんがためなり。(ホ)部は密閉して、(ニ)に小口を穿つ、(コ)は、水を硯池に垂直に注がしめんがためなり。(ヘ)は、堅牢ならしめんがために、兩者の間を連絡せしめたるに過ぎず。

本器は、二十五人一日分の給水に足るを以て、五十人を容るゝ教室に、二個を備ふれば足れり。

二 習字板 漆紙板 又はブリキ板等を用ふべし。その大きさは、可成大なる



らんを要す。その適當ならんと思はるゝ大さは、凡幅二尺長さ二尺七寸許とす。

三 墨コボシ 殘墨を集むるために、用意すべきものなり。品質は、何れによるも可なれども、時々、清潔になし得べきものを選ぶべし。

四 以上の外訂正用朱硯朱筆及板書用大筆等の用意は、決して怠るべからず。

姿勢 書き方について、注意すべき要項中、特に大切なるを姿勢とす。而して、姿勢は、一度悪習慣に感染せば、容易に矯正し難きを以て、その無垢なるうちに好範例を示して、整正ならしめんことは、教授上管理に、必要缺くべからざるものなり、然らば、その姿勢を、如何に保たしむべきかは、凡そ左の如くにて可なりとす。

机と腰掛とを莫距離となし、是に十分深く腰を掛けしめ、上體を少しく前方に傾け、下腹部は、僅に力を入れ、兩下肢は、自然に垂れて、床上に安置すべし、而して、左手の掌は、身邊に近き机面に置くも、特にこれに力を加ふことあるべからず。所謂書法に、通常の大字には、懸腕法によるべく、稍、小字には、提腕、枕腕によるをよしとす。されど、右臂も、左臂と同じく、特に力を入るゝことなく、兩肩を水平に支へしむべし、勿論、右臂を以て、机面を壓する如きことあるべからず。

兒童は、較もすれば、眼を机面に近接し易ければ、始めより注意すべし。通常の視距離は、凡そ一尺二寸とすれば、これより接近せしむることあるべからず。特に、女子は、多く頭を傾くる癖を生じ易く、その他、柔弱なる兒童は、腹部を机邊に接すること多ければ、教授者は、未發に之を防がんことに留意すべし。

古き書法には、息法など稱へ、一字を一呼吸間に書すべしとさへ言へるも

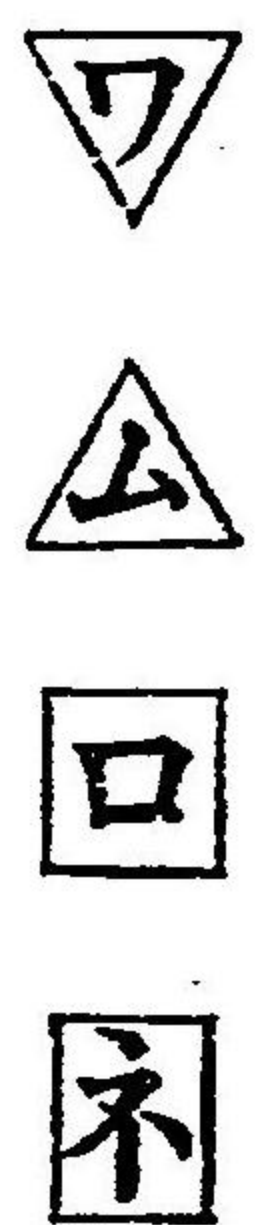
あれど、今は、これに泥むの要なし。されど、書寫に氣合の必要はあるものなれば、畢竟精神をこめて、潜心之に注意し、一點一畫も忽にせざらんことは必要の事なり。

執筆法　こは、實際部に於て、詳説したれば、こゝに、大要を記述すべし。筆の持ち方は、大字は、必ず雙鉤によらしむべく、小字には、單鉤によるを可とす。執筆法を教授するに當り、注意すべきは、各指の働き様を教へ、各指の間を接合せしめ、且つ掌中を圓虚になさしむべし。古き書法に、掌虚指實とありて、更に之れを説明して曰く、掌虚とは、掌中圓虚にて、鶏卵を挿みて、落不落の間に置くべし、指實とは、四指共に實にして密著せしめ、相伍し、相結びて、その用をなさしめよ、と、執筆法の忽にすべからざる、これによりても、悟り得らるべし。

執筆上注意すべきは、筆は、常に垂直の位置に置き、手頸を以て、上下左右に回轉するが如きことあるべからず。又鉛筆、石筆、ペン等とは、自らその用方に異なる所あるものなれば、此れと彼れとの混同なき様、丁寧に教示すべし。

文字の形體　字形につきては、古來間架結構と稱し、詳説するものあり。要するに、その間とは、文字の縦畫(假令ば川に)つきて吟味し、架とは、文字の横畫(假令ば三)につきて、調査するものにして、結構とは、所謂全體の構造にして、長短、大小、廣狹、粗密、正斜等につきて判斷するものなり。古人は、この點につき、詳説して、殆んど餘す所なきが如くなれども、小學校に於ては、多く拘泥するの要を見ず、唯教師は手本を熟視して、大體よるべき處を定め、某文字につきては、間の關係を明にし、又は、架を説明し、或は、結構即ち外形によりて、その字形を悟らしむべし、されば、教授の際、著色チークを用ひて、その字形の如何を知らしめ、扁旁

の關係、粗密の鈞合等を知らしむべし。假令ば。



字形及び長短廣狹を知らしむ例

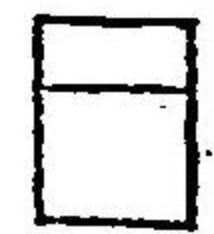
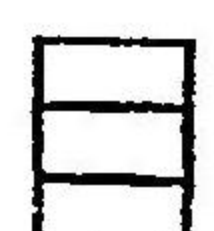

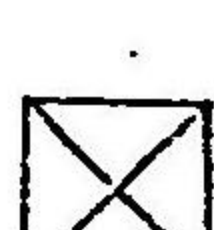
目 之 日 日

和 咳 劍 減

扁旁の關係を知らしむる例

太 細

内に大小の差を附する例

此の他、    等文字の組合せを考へ、明瞭に、その輪廓を

示す時は、兒童は、忽ち其様子を悟り、模擬せんことを心掛くべし。されど、甚だ繁雜なるは、却て害あるものなれば、程よくその割合を示すことは、小學校の書き方教授に於て、必要の事件なりとす。

運筆　こは、先づ著筆の順序を正し、筆意、筆勢を知らしむるを要す。

所謂、俯仰、向背等その種類も數多かれど、小學校に於ては、餘り多きを望むべからず。素より、筆意の巧妙、筆力の暢達せるは、虎踞龍奔の觀を

添へ、美書たるに相違なきも、實用上よりせば、先づ字形を正し、普通に知らしむべきを教授し、模倣し得べきまでのものに留め置くべし。而して、此れを明瞭にせんには、教師が黑板上に大書する瞬間に、その意氣・身振によつて知らしむるを最も便利なりとす。而して、尙足らざる所は、二重文字によりて、説明を與ふるをよしとす。

この二重文字は、大に筆勢を窺ふに便利なるものなれば、教授者が拙筆にして、板上の文字は、終に兒童の模範たる資格なき場合にも巧にチークを利用して、二重文字によりて、その部分の大勢を指示するに熟練ならんには、大に兒童の成績を上げ得るの例少なからずとす。世間往々、おのれ拙筆なれば、到底習字科教師たるの價值なしなど云ふものあれど、一度此種の良案に思ひ至らんには、未だ七を抛つべきの要を見ざるなり、彼の技術は未熟たるも、尙教へ上手と稱せらるゝ技術家あるを見るは、全くこれと例を同

らするものと云ふべし。教授者研究の餘地豈に夫れ眼前寸尺の間に限らんや。

元來筆勢の事は、眼に視せしめ難く、口に説き難く、手に授け難く、所謂以心傳心的に授くるの外、良法なしとすれども、その最も形に表はし易きは、音聲をかりて、「トン」、「ズーウ」或は、「スラーリ」等と、形容しつつ、書記する時は、くどくどしく詳述せんよりは、却て無言の間に、筆勢を現實ならしめて、効果多きを認む、實際部に、是等掛け聲の定あり、其種類は少くして、幾百千の文字にも通用すべく、且つ兒童は、之れによりて教授せられたる曉には、他文字の説明を受くる際に、再びその局所を掛聲により、類推するを以て、教授上極めて簡便なりとす。

字配 これ亦實用上及美術上に大切なることなれば、決して忽にすべからず。彼の世慣れし人が、一字一畫は、不束なるにも拘はらず、よく全

體の美を表はすが如きは、全く熟練の結果、字配の當を得たるによらざるはなし。故に、小學校に於ては、最初下敷紙を設け、これに縦横斜の諸線を劃して、専らそれに準據せしめ、大に文字の配當に注意すべし。その幼童ほど細密なる線を用ひ、學年の進むに従て、簡單とすべきは、既に前に述べたるが如し。

細字にありても、最初は罫紙、又は下敷紙を用ひしめ、徐々に白紙に認めしむべし、手紙の文等の細字に至つては、寧ろ一字一畫の訂正をなす必要なく、全體の體裁上、字配の如何を批評すること最も肝要なりとす。

書き方の初步教授に繪畫を利用すべし 繪畫と文字とは、其何れがおもしろきかを兒童に問はゞ、其十人は十人まで、百人は百人までが、繪畫のおもしろきことを唱ふるならん、本來兒童は文字に就いて、何處が其美なるか、將た正しきかを理解せざれば、夫れに向つて、殆んど無意味

なる形態、假令ば「タ」「ロ」「ー」といふが如き文字を巧みに書記せしめんとするは、兎角に没趣味に陥り易き通弊を免かれざるべし、此時に當り、兒童の趣味に投じたる繪畫の利用によつて、其運筆を始めとし、執筆法、姿勢法等一切の諸準備的演習までも、習熟せしめつゝ、文字の形狀・醜美・正否の判斷を養はば、單に文字の練習を課するに比し、遙かに感興を増し、變化を添へ、單調なる習字に光彩を添ふべし、殊に既に繪畫の演習によりて、豫習せられたる筆意・運筆の心得あり、故に某文字を書記する前に當り、豫習の基礎により、其の筆遣の氣心も加はるべし、此理由により書き方教授開始前、相當の時日間、(凡そ三四週間)基礎的演習としての繪畫を課するを以て、利多き事を認む、而して事少しく餘論に入るが如けれど、從來尋常小學校の課程に、多く圖畫科を設けざりし結果として、思想發表の一事は、單に作文即ち綴り方にのみ委したるが如き傾向ありたれど、其教

課時間なきを以て、繪畫の發表を無視することの謂れなきや明なり、殊に繪畫は文字の表出の尙ほ及ばざる處を、明に發表する効多きのみならず、繪畫によりて發表するに際し、其形態部分の觀察を明にする効多しとす、而して更に前陳の如き、文字の醜美・正否の判斷力を養ひ、筋肉と手との練習上にも裨益ありとす、如此各方面より利益の多大なるを認め、本書は之れが實施方法を實際部に詳説せり、教授者就いて参考の資とすべし。

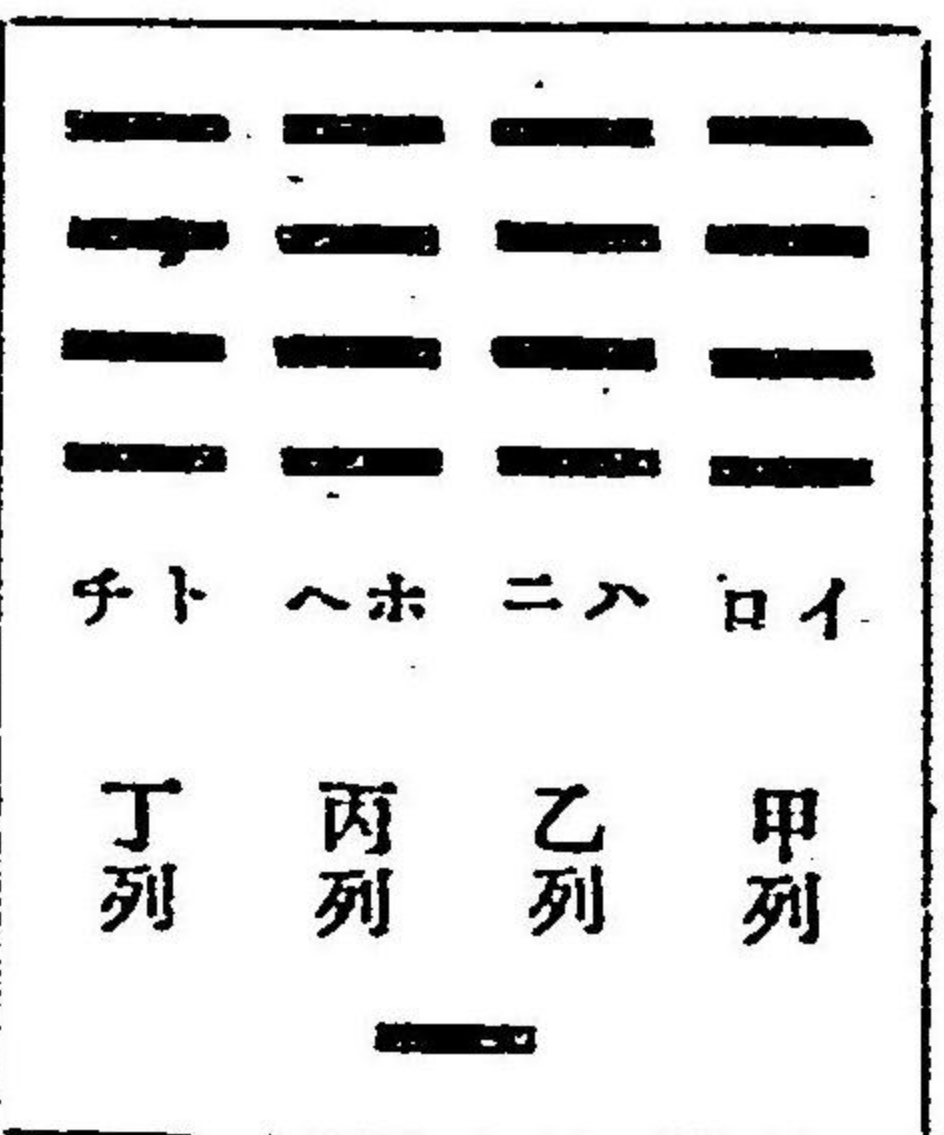
教授の手續き、書き方教授の一般形式は、大要左の如し。

一 準備

イ、用具の整頓。

ロ、配水。

イ行の兒童の硯石を、ロ行の方に、ニ行の兒童の硯石を、ハ行の方に持ち出さしめ、ロハの通路を、↑↓矢の方向に配



水せば、一人一回轉によりて、甲乙二列に給水し終るべし、此法によらば、一教室に二人の配水當番を定め、他の一人をして、丙丁列を給水せしむるを以て、時間の經濟を得べし。

又給水分量は、約一時間を支へ得べき量を各自に實驗せしめ置くべし、然らざれば時間の中業に不足を感じ、或は最後に墨コボシに捨つる世話を増すのみならず、不用の墨汁を磨せしむる等、時間の損失も生ずる理なり。

ハ、磨墨。

中途にて墨を反對の方面に持ちかへしむるときは、墨の斜面となる患なし、且つ注意して硯の同一個所を磨らしむべからず。

二 示範及び説明。

イ、文字の讀方意義の復習。

ロ、書き方を理解するに足るべき、既知の事項及び文字の書き方に就き

問答。

ハ、面前に於いて示範すること。

執筆の模様筆力の緩急速遅等、一切の態度を見習はしむべし。

ニ、手本を熟視せしむること。

場合により、面前の示範に先き立ちて、手本を熟視せしむべし。

ホ、其文字に就きて、間架結構筆勢等を簡明に分解説明すること。

ヘ、字配法の注意をなすこと。

三 練習。(一時間に費す紙数は凡四枚内外なり)

イ、字配に注意しつゝ、一點一畫をも忽にせざる様、丁寧に練習せしむ

べし、一回若くは二回。

ロ、此の間机間巡視をなすこと。

此際墨の濃淡、及び説明の缺けたる個所、示範の不十分なりし點等を見出し置くを要す、而して一旦筆を置かしめて、更に板上に於いて注意し後練習せしむ。

ハ、批評訂正。

板上アキ板上等に於いて、一般につき批評し、或は某兒童の成績物につき訂正す。訂正の度は、兒童の進歩の度を標準とし、某部分の訂正をなし、甚しき非點を指摘し、感興を呼び起すことに注意すべし。

批評の材料として、重なるものは、字形の正否、字配の當否、誤謬補筆の有無、墨色の濃淡、筆勢の強弱、筆痕の肥瘠、全體の體裁等なり。

備考一時間の教授字數、二字若くは三字の場合には、以上三段の形式は同じく、二回若くは三回踏むを通例とす、かくして最後に通じて、一二回練習せしむるものとす、練習中は清潔・整頓・靜肅等、副貳目的にも注意すべし。

四 收具。

凡そ振鈴三分前とす、收筆は軽く穂先を布片にて拭はしめ、時に洗淨すべし、残汁あらば、墨コボシに遺棄せしむべし、すべて此種の動作は迅速を貴べども、粗雑ならしむべからず、一回の不注意は、多年の訓練習慣を破壊することなしとせず、教具の出納に關する注意の忽にすべからざるを知るべし。

清書と練習 以上の方法によりて教授し、凡そ一週三時間を経ば、清書を課すべし、清書は可成獎勵に有効ならしむる様工夫すべきものと

す、去れば清書は練習既に熟して、児童が進んで美書せんとする意氣込のある時なるべし、故に清書文字の全部が訂正せらるべき理由はなき筈なり、前陳の如く四時間に一回の清書を課するとするも、習熟の度を考へ是を前後するは差支なき事なり、從來練習中には左まで力を注ぐことなく、清書としいへば大に重んじ之に加筆し來りたれども、一旦清書し終りたるものを再び参考し、注意せんとするが如きは、児童に求めがたき處なれば、寧ろ清書の際は、甚だしく手本に合はざる個所若くは特に訂正を要する點を指摘するの外は、許可を與へ、相當の評語を與ふるをよしとす、是に反し、練習の際は、机間を巡視し、將た板上に於いて、其不良の點を指示すべく、且つ児童にも練習中は、氣到り神熟し、教室内咳嗽の聲だに發せざる時もありしむべし、されど如斯一心不亂に練習せし後は、或は起立を命じ、又は呼吸法を課し、其他能書家の美談を授けなどして、心

氣を新ならしむべし、書き方も茲に至りて、始めて其技能を進め得べきなり。

書體書風に いて 人は其面の異なるが如く、書風を異にするを以て、教師たるものは、教授に先き立ちて、十分に手本を熟視し、可成は練習して、其文字の結構・筆法を討究し置くを要す、世には此時間を以て、教師の骨休めの如く心得、或は自働的教科の如く見做し、一に兒童の演習に委せて、顧みざるが如き觀なきにあらざれど、目にも形にも名狀し難き技術なるを以て、事物教授に要する準備に倍して、一段の工夫を待つべきものなり、假令能筆の教師なりとも、既に手本を用ふる以上は、其書風を異にせるを以て、悪筆の人と大差なきが如し、要は教師の熱心如何により、周到なる用意の有無に歸著すべし。

細字の練習 尋常二四學年に入らば、書き方時間の外に、細字の練習

に注意すべし、即ち綴り方の清書を主として、諸帳簿の記帳によりて演習すべし、読み方に於いて、日用文を課するときには、半切紙を用ひて實習を命じ、上下天地等の明け方宛名の位置等まで、明に指示するをよしとす如此細字演習に注意するときは、一切の教科時間の筆寫等も、快速にして、且つ正確ならしむることを得べく、高等科に入りても教授上の便益を得ること尠しとせず、進んで高等科に入り手本文字の細字となりたるときは、一層周密に之れが注意をなし、正確にして且つ美に叶ひ、實用上の便を得ることにつとむべきなり。

餘説 習慣を作るべき一切の事件は、皆最初の用意の周到ならんことを要す、殊に書き方の如く、複雑なる教具を要し、秩序的に練磨すべきものに於いては、其然るを認む、一旦不注意なりしたために、永久回復すべからざる不良の習慣をつくり、終始繁鎖なる手数を要せんよりも、寧ろ最初

に面倒なる階段を経とも、他日に比較的手数を省畧し得るの勝れるに如かず、是を以て最初の繁は、却て全體の繁にあらざることを考ふべし、本書實際部第一學年の如きは、殊に繁冗一見其複雑なるに勝へざるが如くなれども、若し夫れ實施に際し、之を翫味せば大に眞價のあるを知らん、而して第一學年の教授は、其初步にして、而かも終始注意せざるべからざる基礎的なるを思はゞ、假令他學年の教授に従事するものと雖も、一回は之を精讀せんことを要す。

下篇 實際の部

尋常科第一學年書き方教授法

第一學年の書き方教授は、まだ毛筆の持ち方及使用して、文字を書かしむる上に必要なる、各種の用具の取扱ひ方も知らぬ兒童に對し、初めて書き方を教授するのであるから、實際文字を教授する前に、先づ其準備となるべきもの、即ち筆の持ち方、筆の遣ひ方、姿勢の整へ方及其他用具の取扱ひ方等につき、大體豫め心得置かしむるの必要がある。尤も是等の心得の教授は、實際文字を書き習はしむる時、關聯してなすも可なりとする人もあれど、幼稚なる兒童に、然も複雑なる是等總てを、同時に教授するは、反て混雜を來すの恐れあれば、出來得る限り、前以て教授し置く方、利益多きを認めるのである。故に左に順次是等の教授方法につきて述べや

う。

一 書き方用具取扱ひに關する教授

書き方教授の初年級に困難なるは、一つには用具の取扱ひに慣れしむることの、容易ならぬためである。故に此の取扱の教授に際しては、餘程丁寧親切なる教示をなし、最初の無垢のところへ好範例を與へ、以て先入主となるの良習慣をつけるやう、手段を盡すが必要である。

筆の持ち方 筆の持ち方の教授は、實際に墨汁を浸して書寫せしむる

前凡二週間位より、適當の場合を見計らひ、時々これをなすがよからう。

假へば國語教授の或る場合に於て、數分を割きて筆の持ち方を教授する等である。然しこれをなすには、無意味の動作に陥らしめぬ爲め、持ち方にさへ熟せば直ちに毛筆を使用して文字を習はしむべしと、約束するなど、兒童のはづみをつけをくことが必要である。さてこれより、其教授の順序

方法を説かう。

甲 先づ五指の名稱を明かにすること。

拇指(オヤ) 食指(ヒトサ) 中指(ナカ) 無名指(クスリ) 小指(コユ)

乙 筆の各部分の名稱を明かにすること。

軸 穂(穂先き、ネ)

丙 持ち方。

イ、先づ各兒をして、食指以下の四指を、揃へて軽く曲げしめ、次に拇指を曲げて其端を食指の端に僅に接せしむるやうにし、手首を少し上方に傾かせる。

ロ、左手にて筆を取り、穂を下にし、軸の中央部を右手拇指先きの腹に斜に當て、反對の側には、食指を其第一關節より腹へかけて當て、兩指にて筆を垂直に摘み持たせる。此の時拇指端は斜に上方に向き、食

指の端は斜に下方に向いて、拇指は食指より僅に上にあるを可とする。但最初、拇指を當つべき筆管の位置は、豫め教師が符しを附けやり置くがよいのである。

右の如く數回なさしめたる後は、其儘、肩臂の關節の運動によりて、手を前後左右に動かさしめ、或は筆の穂を軽く机面に當てさせたるまゝ、縦横線を引かしめなどし、以て筆を保持する力は、此の二本の指の作用なることを知らせる。

ハ、次に中指を食指に添へ、其指先の腹を斜に軽く筆管に當てさせる。
ニ、次に無名指を中指に添へ、其先きを曲げ、爪際を斜に筆管の内側に軽く當てさせ、又小指を無名指に添へて軽く曲げさせる。かくして持ちたる形は、掌中に雞卵一個を握れるが如き様となるのである。

筆の遣ひ方 前の如くにして筆の持ち方を教授したら、次に左の如くにして筆の遣ひ方を教へる。

イ、完全に筆の持ち方の出来たる時は筆端を軽く机面に當て左手を机面の左方に軽くもたせ、姿勢を正して、横に、縦に、斜に等、種々の方向に筆を遣はせ、或は主として中指にて筆を手前へ引きつけ、又無名指にて筆管を先きへ押し遣らしめなどし、以て臂及指を働かする手心を覺らしむ。(横線をかくには、主として拇指の力にて押し進め、縦線及斜線を、上方よりかくには、中指にて引き、同、下方より上方に向ひて書く時は、無名指にて押しやる手心あること等)又筆管を保持すには、あまり力を入るゝことなく、常に軸を眞直に保たしめ、如何なる筆遣ひをなすも、これが傾かざること慣れさせる。

書き方用具の取り扱ひ これは便宜習はせる前と後との二に分けて説くこととしやう。

甲 習はせる迄の取り扱ひ方。

- イ、硯箱を出し、自分の前に置かせ、蓋をとり裏返しにし、其中に身を入れこにし、右手の前方に置かせる。
- ロ、硯、筆、墨、墨拭の布等の位置を正させる。
- ハ、硯石の海と岡とに就きて話す。
- ニ、墨の持ち方、磨り方を教示す、墨は上より確と摘み持つをよしとするれども、墨の大小により、多少斟酌するを要す。さて適當に持たせたる後、これを稍、手前へ斜にし、磨墨の形をさせて見る、此の時の姿勢は、勿論正しき有様に保たしめ、眼を硯の中に注がせるのである。(實際の磨墨の場合には、時々墨を裏返して持ちかへ其の一方へのみ減らぬやうにし、或は海より少しづつ水を出し岡にて磨り、更に海へこき落すなどのことを教ふるを要する。)

ホ、次に水を受くる爲めに、机の一端へ硯を出さしめて、(置くべき場所は豫め指定す)配水する、配水終らば、硯を前に置きし位置に戻させる。

ヘ、次に筆を執り、穂先きを僅に海の水に侵させ、後に筆に墨を含ませる時、穂先きのあまりに固まり居らぬ様準備し、其儘硯箱の向ふ縁を枕にして置かせる。

ト、次に墨を磨らせる、磨墨大概になれば、教師の見計らひにてこれを切り上げさせる。其時には、硯の岡の墨汁は、必ず海にこき落させ、墨は磨りたる端を墨拭に當て置かせるがよい。磨り終りたる硯箱は、成るべく机の前方に出させ、筆を遣ふ時の邪魔にならぬよゝにする。チ、次に筆を執り墨を含ませる、墨を含ませるには、先ず穂先きを少し海に入れ、次に手首を左に曲げ筆をねかし、岡にて除々に穂先を揃へ

るよゝにこきて、墨の含む度合を加減することを教へる。適度に墨を含ませたら、前の通り硯箱の向ふ縁を枕に筆を置かせる。初めて筆を下すことは、最初の児童には困難故、豫め教師が各兒の筆を集め、穂先凡三分の二をおろし、一旦墨汁を含ませ、よく拭ひてこれを各兒に渡し置くがよい。但し其おろし工合は、筆によりて斟酌すべきは勿論である。

リ、次に草紙を出さず、草紙を出したら、先づ表紙をはね、折り返して前に置かせる。

又、次に下敷紙を草紙の間に入れさせる。下敷紙は（二枚へ書かしむる字數に應じて縦横線を引きたるもの）豫め各兒の机中に配布し置くか、然らずんば磨墨の際各児童に配布し置くがよい。

児童各自に手本を持たしめて練習せしむる時期に達せば、下敷を入れ

たる後手本を出させ、これを適當の場所に置かせる。

右にて用具全く整ひし故、これより書き方實地の教授に入るのであるが先づ其の前に後のことを述べよ。

乙 習ひ終りたる後の取り扱ひ。

イ、習ひ終りたる筆を筆拭布にて拭はせる。これは筆をねかし、穂先きを揃へながら墨汁を布にて拭はせ、尙多少の残りは、草紙の一端にて軽く拭はせ、後硯箱の中に納めさせる。

ロ、墨にて硯石の岡の墨汁をこき落し、墨拭にて墨の端を拭ひ納めさせる。

ハ、次に草紙、手本、下敷等を納めさせる。

ニ、次に墨汁の殘餘を捨てさせる。此の時には各兒に硯を箱より取り出させ教師或はある児童の持ち廻る墨こぼし中に其殘汁を棄てさせる。

ホ、次に硯の蓋をさせ、蓋を開きたる時の動作に反對に、これを机中に納めさせる。

注意。墨を磨り、筆を扱ひ、残りの墨を棄つる場合等、特に手指其他を汚さぬよゝ注意せしめ、教授の中間若くは終り等に於て、時々兒童の手指を検し、以て兒童に清潔を好むの習慣を養ふことは大事である。

二 姿勢の整へ方

用具取扱ひ方と相關聯して、最初より最も注意を要すべきことは、姿勢の整へ方である。姿勢先づ整はずんば、如何に綿密丁寧な教授をなすとも、到底よき文字は書けるものでないから、教授者は餘程よく此の點に就ては、研究注意しなければならぬ、尤も此の事に關しては、一般教授法の所に於ても述べ置きし故此には詳細に述ぶることは略し、只實際に臨んで、特に必要なる二三に就き、重ねて記すこととした。

身體の保ち方 机と腰掛けとの位置を減距離とし、十分に深く腰を掛けさせ、上體を僅に前方に傾け、下腹部に多少力を入れ、兩下肢を少し開き、足趾を正しく床面につけさせる。

手腕の整へ方 左の掌を身體の稍、左方机面の手前へ軽くあて、臂は體に添ひ自然に保ち、右手即ち筆を持つ手は、手首を上方に傾けて、前臂は机面より稍離して保ち目を筆先きに注がせる。

左臂が左に下り、又は其掌を、體の直前に或は机面の先きの方へ當つる時は、勢ひ上體部が、左方或は前方に傾くに至るもの故、よく注意すべきである。又筆管を保持する右手首が上に傾かぬ時は、筆管の垂直は期し難く、強て垂直ならしめんとする時は、必ず五指共に下方に向ふに至り、最も忌むべき筆の持ち様となる、故に餘程心して教授すべきである。

三 書方の豫備としての繪畫教授

繪畫の種類及運筆法 文字の書き方(毛筆にて)を教授する前に、其豫備として、繪畫を教授すべしとのことは、上篇に於て詳述して置いたから、今此の實際教授法に入るに際しては、只其方法上に關する、必要な部分だけを、説くこととした。

先づこゝにて、繪畫を教授するのは、もとゞ繪畫其のものを目的として習はせるのでなく、全く書き方教授の大切の基礎、即執筆、姿勢、運筆法等につき、良き習慣を得しむる一の方便として課するのである。再言すれば、幼兒には殆ど無意味に近い形態、即「タ」とか「ロ」とかいふ文字より教授を始めては、自然其教授が無趣味に陥り易き故、寧ろ兒童の知る所の繪畫によりて始むる方、彼等に、其形狀の判斷も出來、從つて練習上の興味も深かるべく、又かゝる形態に書きあらはさんとの豫期をなしつゝ、筆を遣ふ故、運筆の氣心も、加はるべく、かたがた基礎教授には、繪畫を課するがよいと云ふのである。

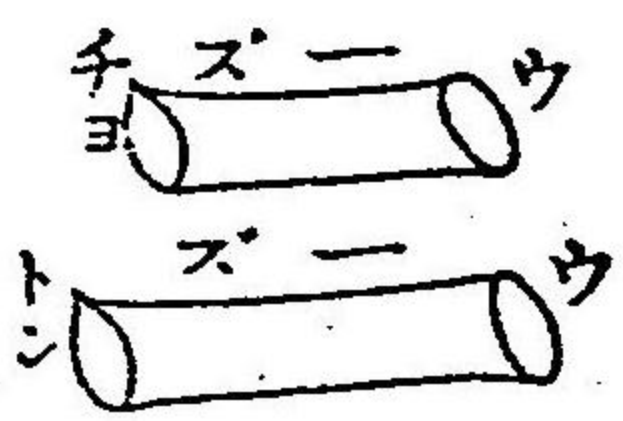
此の故に、次に教材として擧げたる繪畫の種類及教授法要領中に述べたる運筆法は、全く文字教授の直接の豫備として考へたるものなれば、繪畫の順序、運筆法等、繪畫其のものを目的として考へたるものとは、多少の差異あることは、豫め斷り置く所である。

教材及教授方法

イ、次に擧げたる教材は、文字教授に入る前、凡四週間、教授する豫定にて撰みたるものである。然し若し、教授者の都合により、教授期間を伸縮する時は、これに準じて、其材料を増減するがよからう、又繪畫の形狀、大小等は、練習せしむる草紙の形に従ひ、或は教授の應用として、或は縦長に、或は平たく、或は大きく、或は小さく、適宜に畫かしむるは、もとより教授者の隨意でよい。

ロ、運筆の教授には、筆の遣ひ方を、音聲に結合して説くこととした。元來筆遣ひの手心は、一つには自然に發する氣合ひから來るもの故。中々言葉の上の説明位では、習ひ初めの兒童に、會得の出來るものではない。そこでこれ等の困難を補ふ爲め、本書には、著者の經驗上、有益と信じたる所の方法即ち音聲により氣合をはかりて書かしむるやう、説明の方法を定めたのである。尤も時に臨んで、筆遣を掛け聲に結び附けて教示することは、誰人も多少は行ひつゝあることではあらうが、本書に説く所のものは、それを一層擴張して、種々の點線の筆遣ひに對し、夫れく掛聲的の音聲を定め、常に此の音聲を用ひて教授をなすと共に、兒童にも此掛聲的音聲を唱ふる心にて、運筆せしめんとするのである。教授法要領中、運筆の説明に「トン」、「ズー」、「スラー」等述べてあるは即ちこれである。なほ主なるものに就き、前以て

ここに二三の例を擧げて示すこととしやう。



ニの字の一畫の如く、短くして筆仰ぐものは、「チ」と軽く筆を當り、「ズー」と引き「ウ」と止む。

同一畫の如く、下に覆ふ筆は、「トン」とやゝ強くあたる。

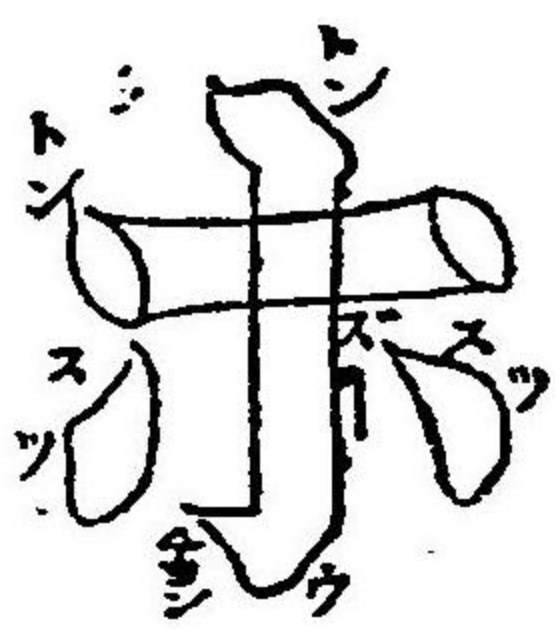
ウの字の一畫の如く、縦に短く引き筆末を止め又畫は、「トン」とあたり、一氣に「ズン」と下にぬく。

同字の三畫の如きはらひ、即多少彎形の心を持たしてはらひぬくものは、「スラー」と次第に力をぬきて、筆の穂先きにて、紙面をはらふやうにはね出す。

ンの字の一畫の如く、確に打つ點は、「トン」と當る。

又其二畫の如く、長く上にはねるものは、「トン」とあたり、「ズー」と一氣に書く。





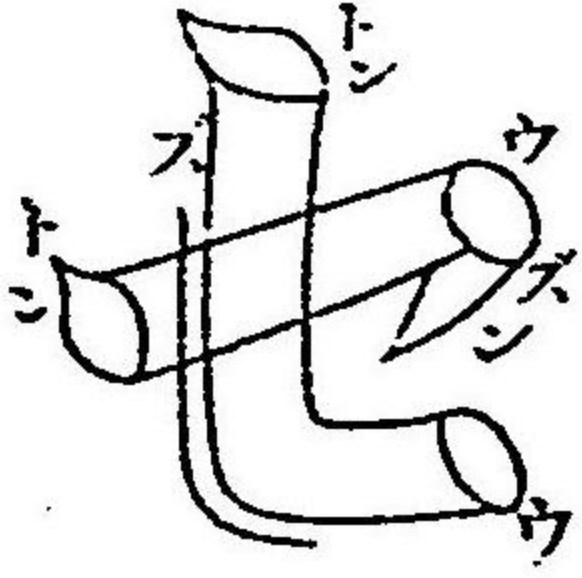
ホの字二畫の如き、はねある縦線は、「トン」、「ズー」と引き、「ウ」と止め、直ちに「チョン」とはねる。

ホの三畫の如き筆は、これを便宜左の「ス」^ツと名づけ、四畫の

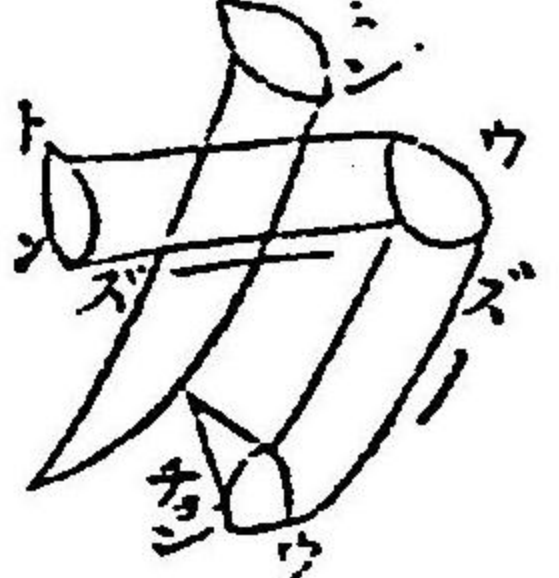
如き筆は單に「ス」^ツと名づけた。共に次第に力を加へて止むる心にか



イの字の二畫の如き縦の棒は、「トン」、「ズー」と引き「ウ」と確に止め、穂先きを立て直す心にて上にぬく。



セの字の一畫の如きはねは、「ズン」と一氣にはねる、其二畫の如き、たるまず引き曲げる筆は「トン」、「ズーウ」と唱へて書かせる。



カ^カの字の一畫の如き、姿をなすものは、「トン」、「ズー」、「ウ」、「ズー」、「ウ」、「チョン」と、それぞれに音聲を用ひて書かせる。



ハの字の二畫の如き縦の波形をなす筆は、筆頭を極めて軽く「ト」と當り、筆末を「ズラリ」と一氣にぬく。

ハ、連絡文字の欄を設けたるは、教材としたる繪畫の形状或は點線が、

其欄中に列記せる文字を書寫する豫備となることを示したのである。

ニ、説明の用語は、成るべく簡單ならしむる爲め、左の如く定めた。

第一畫、第二畫等は、單にこれを「一畫、二畫」とし、畫の數を表はすものは、これを二つの畫、三つの畫等として用ひた。

又一畫にて「」の如く、二部分に分るゝものは、これを一部、二部と云ふ名稱にて、其名を示すやうにした。

一畫の書き初めは、筆頭と云ふ筆の終りの部分を筆末と云ふ語を用ひた。

教材

ニエテヲトイモル

連絡文字

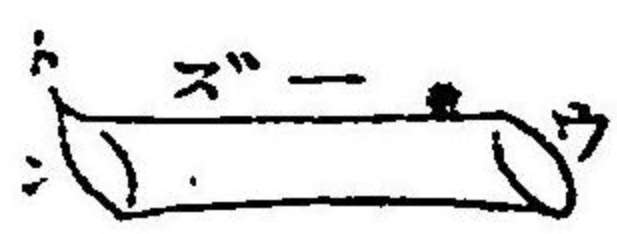
教授要領

要點

水平線、垂直線の書き方、筆の當り、止め、引き方の練習。

運筆

1、一畫即横線は、次の如く筆遣ひを三部に分けて、教授するがよからう。



筆頭は各指に力を入れ、の如き點を打つ心にて「トン」と筆先きを當て、次に「ズー」と唱へつゝ主として拇指にて筆を右へ押しやり、同じ

度合に力を入れながら程よき長さに横線を引き、此處にて「ウ」と唱へ筆を止む「ウ」の時はの如き點をつくる心しておさへ、靜かに穂

先きを立て直し、更に戻す心して終に筆をぬく。指の力は各指を用ふること略「トン」と等しい。



2、二畫即縦線は、其運筆略一畫に等しけれど、縦に引く線故自然其心して、「トン」と當り、次に「ズー」と唱へつゝ主として中指にて筆を手前に引き、「ウ」と止むるのである。

3、三畫は全く二畫と等しい。

要點

運筆

前同

共に前の應用として課するものである。

教授上の注意

児童は大概筆を下し、或は止むるに當り、何等の注意をなさぬものである。然しながら、これを児童の普通として放任し置く時は、運筆法の進歩の容易に望むべからざるは勿論、終には亂筆の惡癖に陥

り易き故、是等を補ふ爲めに、運筆を「トン」、「ズー」、「ウ」と音聲に結合して書かしめ、以て筆遣ひの手心を自得せしめんとするのであるから、教授者は常に其心して音聲と共に態度氣合に氣をつけ、兒童に無意味の音聲を唱ふるに至らしめぬ様注意するが肝要である。

筆の持ち方、姿勢の整へ方は、前に述べし所なれど、いざ書き習ふ時となると、兒童は其書かんとする、目的物に向つて拂ふ所の注意の爲めに、自然此の方をおろそかにする傾向あれば、教授者は時々足、腹、筆などと唱へて、其注意を新にすることを要する。殊に教授者の不斷注意すべき點は、運筆の際兒童が其臂或は手首を適當に曲ぐることに、筆管をねかさぬこと、一筆毎に必ず筆の穂先を立つること等である。

是等の注意は、何れの場合にも必要なれど、習ひ初めの兒童には、特に必要であるから、改めて此に述ぶることとした。



ハタ(一)

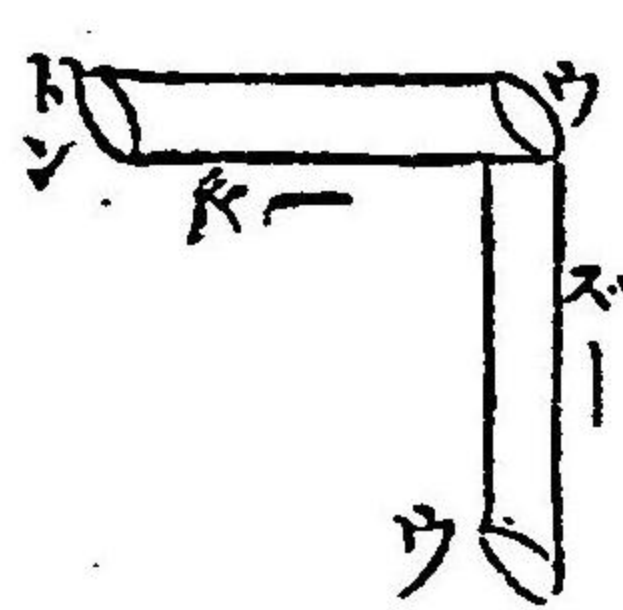
要點

線の書き方。

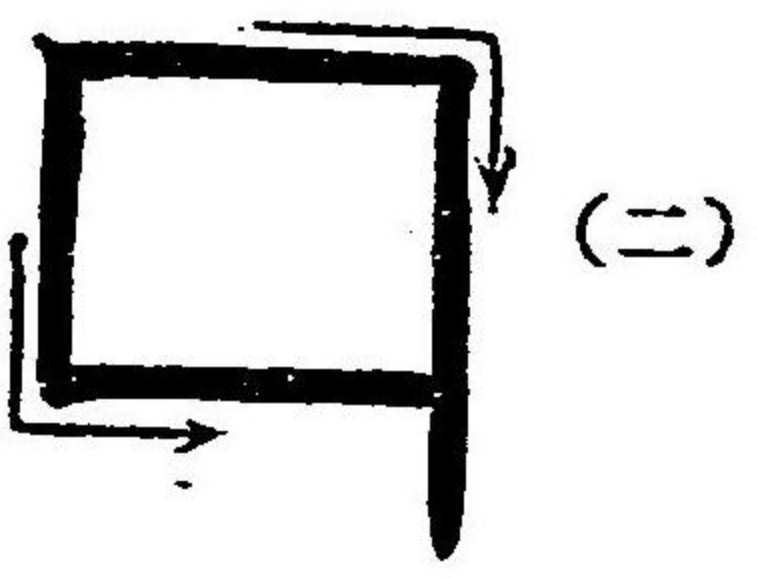
運筆

1、一畫と三畫とは、門の筆遣の應用故略す。

2、二畫は、次の圖の如く、「トン」と筆を當て、「ズー」と横に引き、「ウ」と止め、少しく筆先を立て直す心して、「ズー」、「ウ」と縦線を引く、指の力、運筆の工合は、全く縦横線を連ねたるものと見てよろしい。



右の筆遣ひの旗を畫かせる前に、其豫備として、二畫を全く一つの畫に分けて書かしむるもよからう。



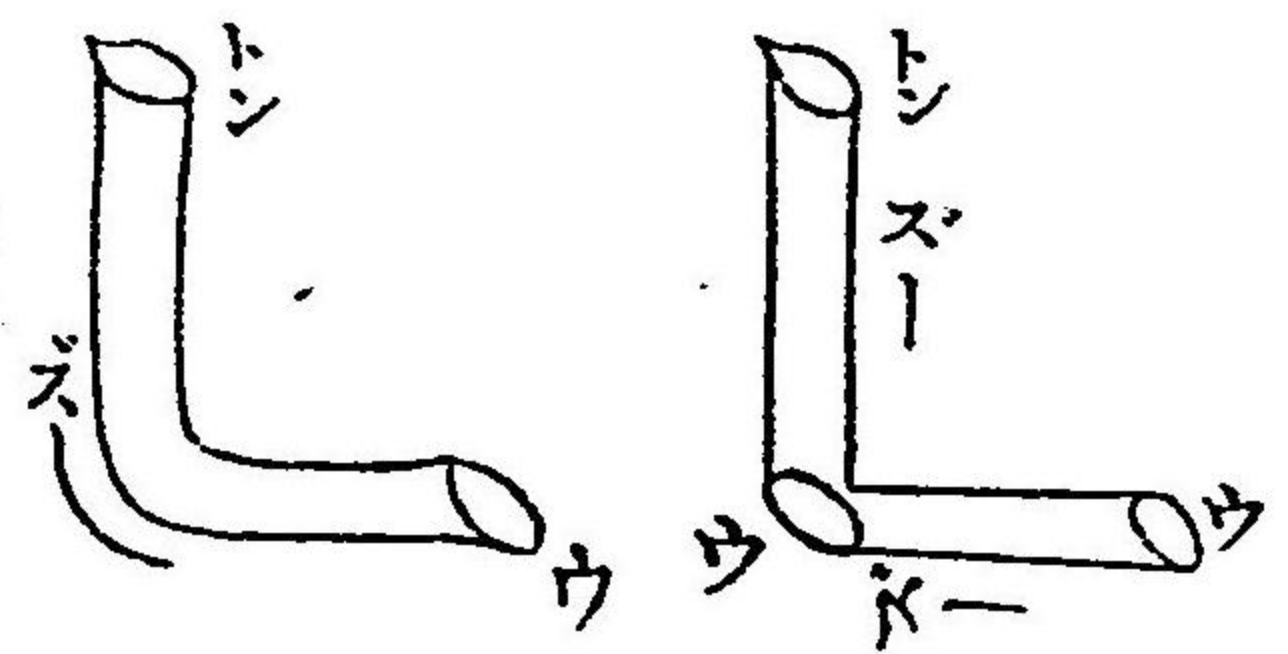
要點

セヒモ

運筆



線の書き方。



2、二畫は(一)の二畫に同じ。

(三)の繪は(一)、(二)の應用。

要點

ニコヨ

運筆



線の書き方に就き筆の當り。

1、一畫は(二)の一畫に等し。

2、二畫は(一)の二畫に類すれど、筆頭の當りをやゝ軽くするのである。即ち上の圖の如く、「ナ」と軽く當り、稍上向きにたるまぬ短き線を引き、「ウ」と止め、更に縦線を引く、これは(一)の二畫に等し。



(五)

要點

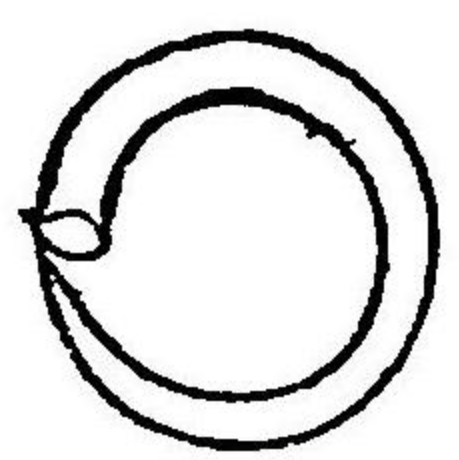
パポ

運筆

○の書き方。

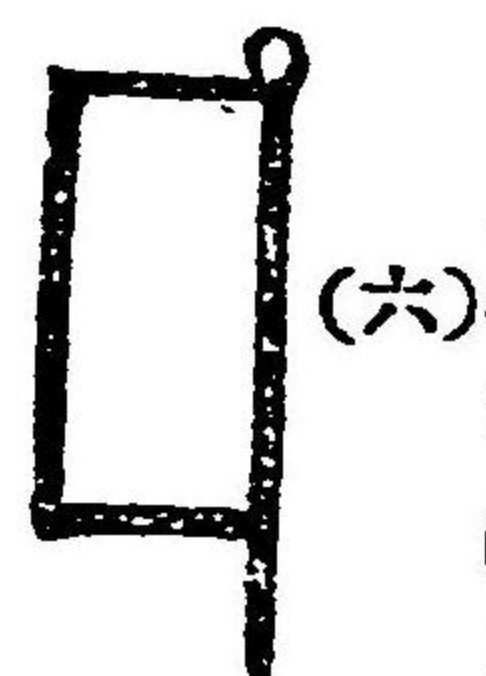
1、一畫、二畫は(二)に等しい。

2、三畫の○は、上の如く先づ「トン」と筆頭を當て、穂先きを立て直し、



主として拇指と無名指の力にて筆を「クルリ」と上に回はし、更に次第に中指に力を移し、漸々力をぬきて、一氣合に圓形を書くのである。而して、其圓はよし多少歪むとも、筆末は必ず筆頭に向ふやうにするを要する。

此の○は、或は大に、或は小に、種々に書かしむるがよい。

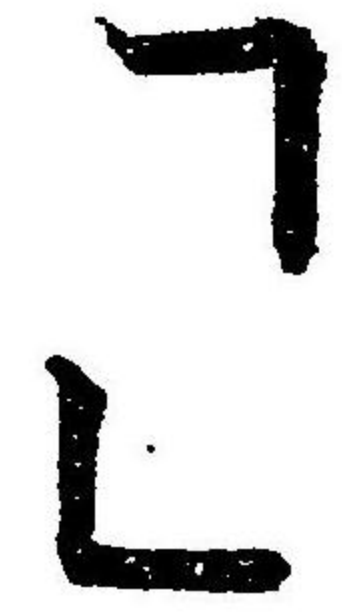


(六) 前の應用として課す。

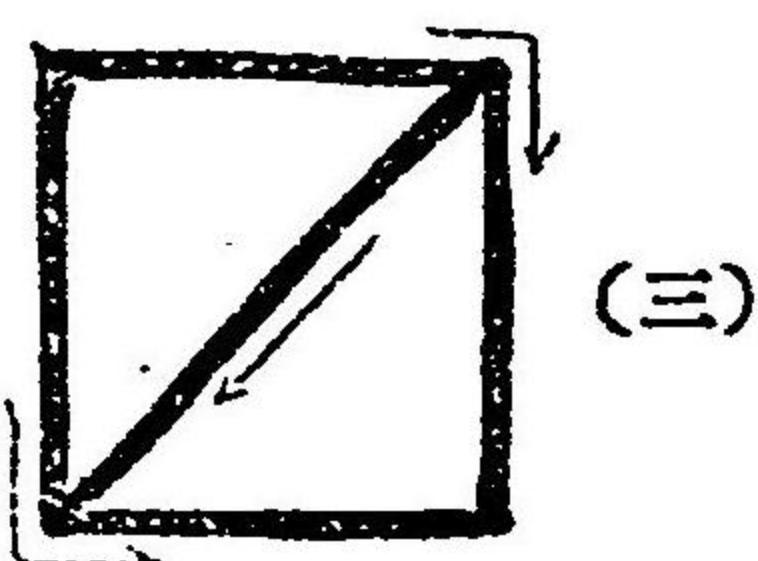
マス(一)



縦横線の應用として課す。



線の應用として課す。



要點



線の書き方。

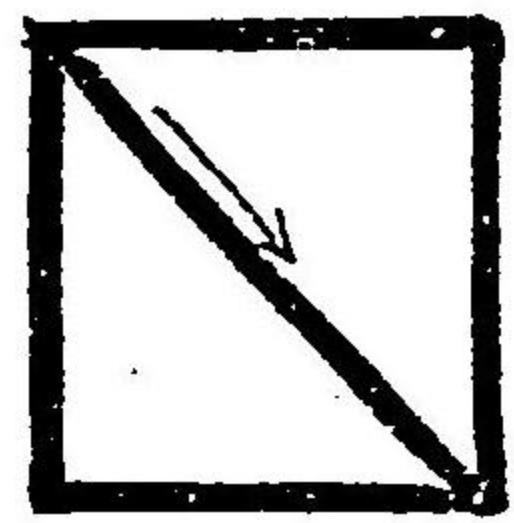
運筆

1、一畫、二畫は前の應用。

2、三畫は上の如く「トン」と當り、筆を立て直し、主として中指の力にて、次第に和かに筆を左下に押し下ぐる心にて「ステリ」とはらふ。

ノ イ メ ナ チ ク タ テ ヲ 等

國語書方教法及教授案



(四)

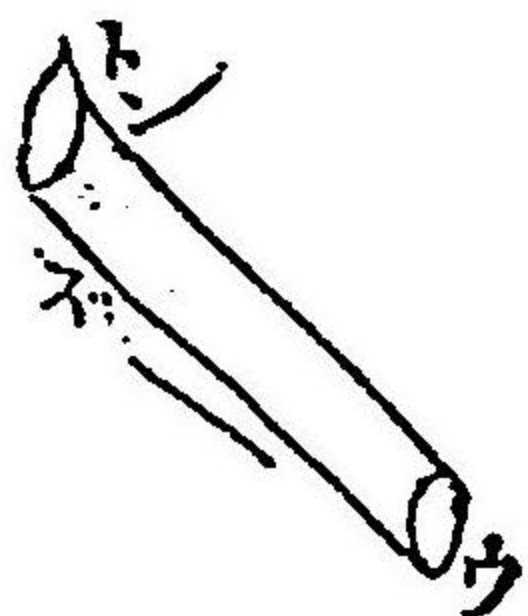
キ

運筆



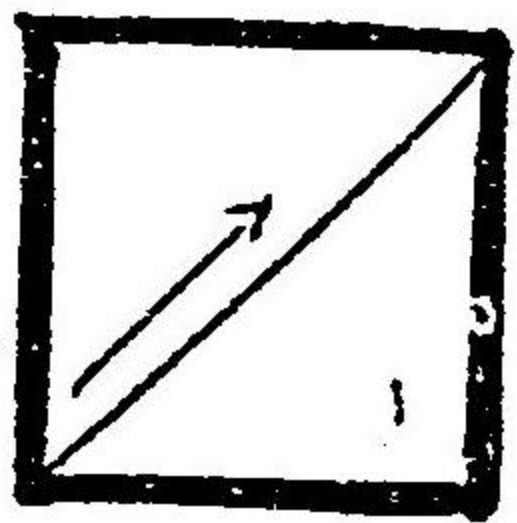
線即上方より右下方に引く線の書き方。

1、一畫、二畫は前の應用。



引く心に書く。

2、三畫は次の圖の如く、「トン」、「ズン」、「ウ」と、縦線を右斜に



(五)

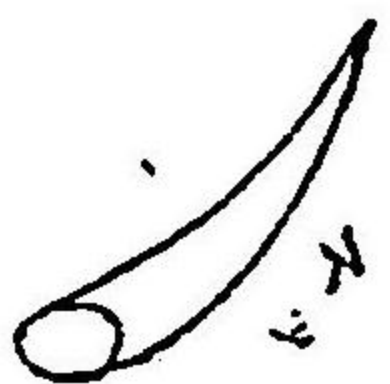
シ

運筆



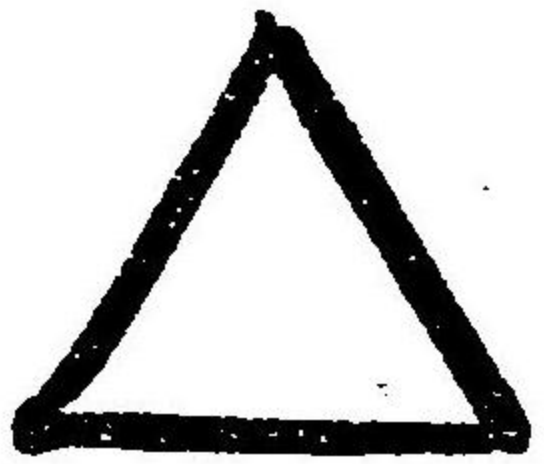
線即左下方より右上方に向ひ撥ぬる線の書き方。

1、一畫、二畫は前の應用。



「ン」と、筆を右上斜に押しやり、穂先を撥ねぬく。

2、三畫は上の如く「トン」と當て、主として拇指の力にて「ズ



三角

ム

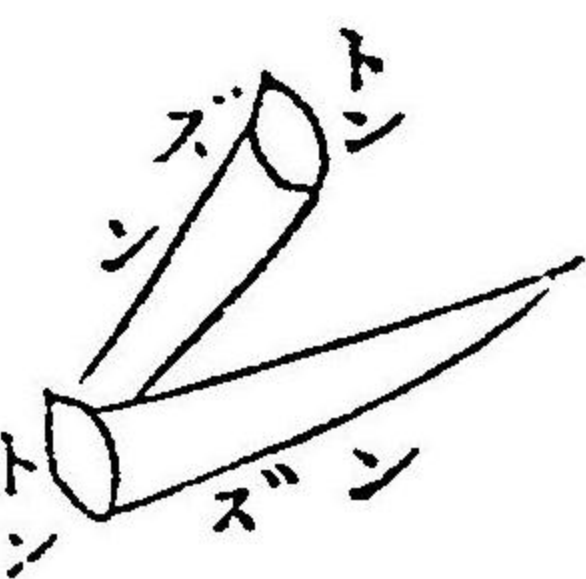
運筆



線の書き方。

要點

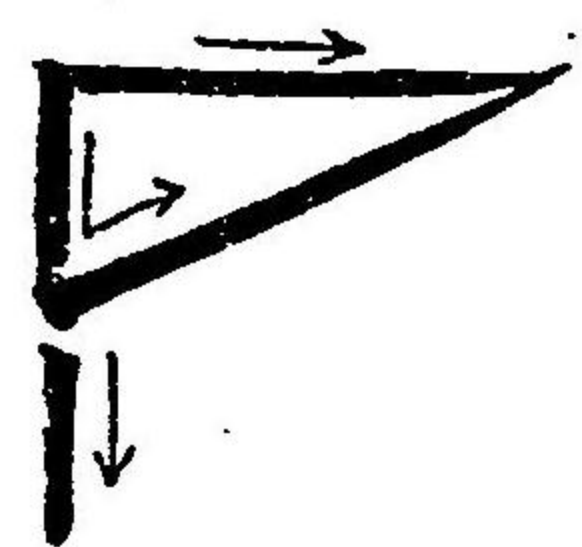
1、一畫は「トン」と筆を當て、「ズン」と左下斜に筆をぬき、二畫は一畫の筆の止りへ更に「トン」と當り、「ズン」と右に撥ねぬくこと、**柁(五)**の三畫に等しい。最初は此の如く全く二畫として書かしめ、其熟するを待ちて、これを一畫とし、次の如く書かせるがよい。



即「トン」、「ズン」と左にぬきし、其筆末を止め、直ちに又筆先きを立て直して、「トン」と當り、「ズン」と右に撥ねるのである。

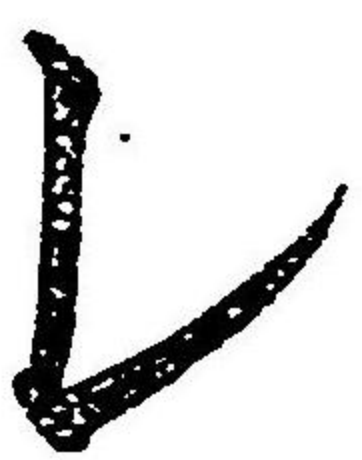
2、三畫は柵の(四)の三畫の應用。

三角ハタ



要點

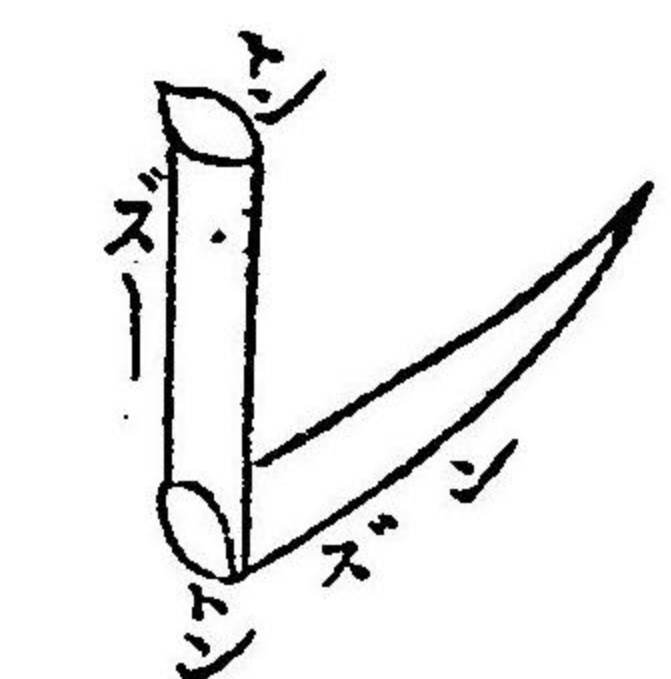
ル



線の書き方。

運筆

1、一畫は前の應用。



3、三畫は前の應用。



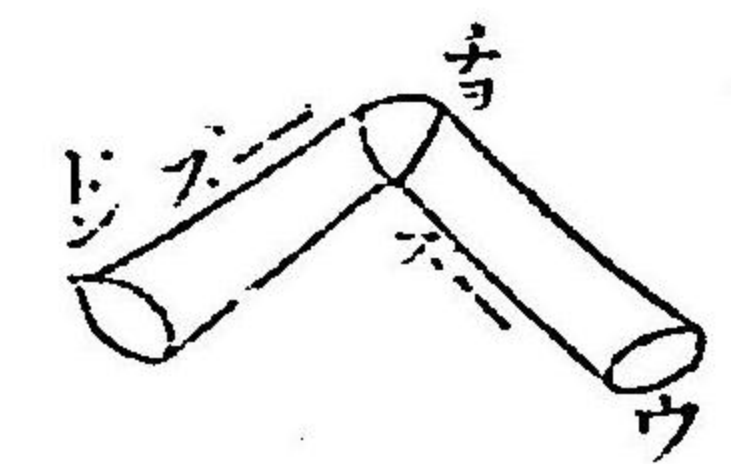
要點

2、二畫は三角の一、二畫を連ねて書くものに似たれど、筆遣は多少異なる、即上の如く先づ「ト」に當り「ズ」と普通の縦線を引き其筆末より又「ト」に「ズ」と、はねぬくのである。

形の書き方。



運筆



1、次の如く「ト」に當り、主として拇指の力にて、「ズ」と左上方へ斜に引き、こゝにて氣合をかへ、穂先を立て直して軽く「チ」と當り、右下方へ斜に「ズ」、「ウ」と、柵の(四)の三畫の心にて線を引く。

初めは便宜、二つの畫に分解して書かすもよい。

富士山



要點

シ



点及線の書き方及筆の當り。

ソ

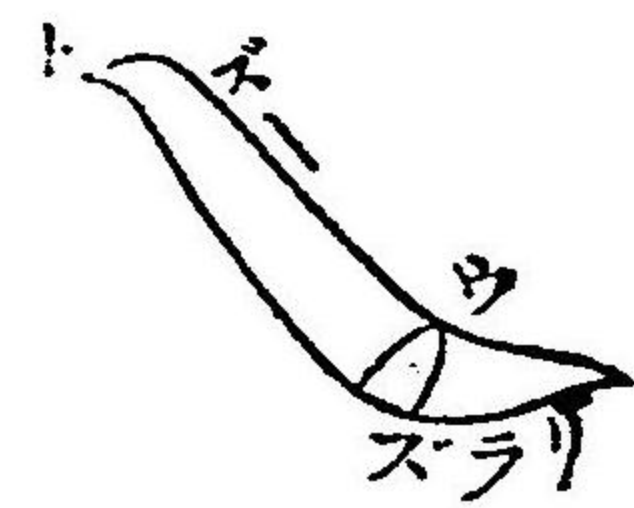
運筆

ハツ等

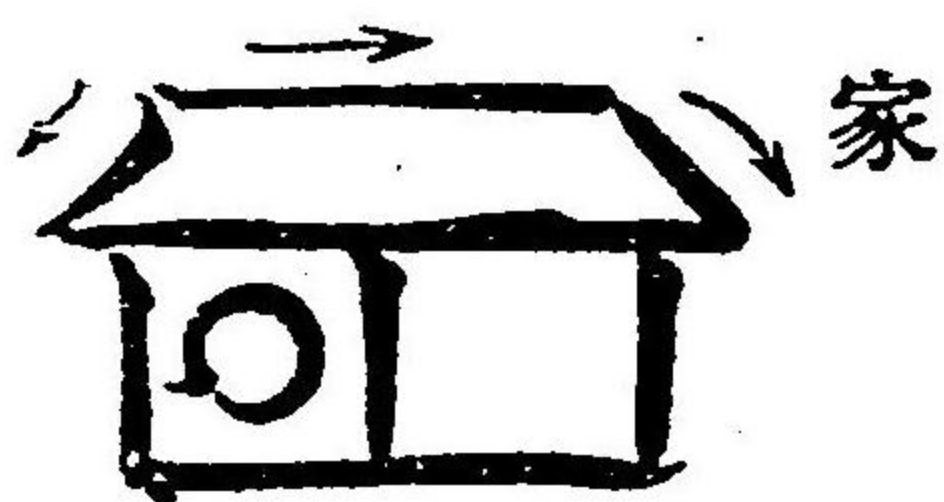


1、一畫は前の應用。
2、二畫、三畫は、上圖の如く「トン」と當り、少し穂先きを起し重もに拇指の力にて、「チン」と速に撥ね出す。

出す。



3、四畫は上圖の如く、「ト」と穂先きを下方より上に向ひ軽く當り、「ブーウ」と次第に力を入れて右下へ斜に引き、こゝにて少し方向を右にかへ、「ズラリ」と靜に筆をぬく。



ハマスチ

要點
運筆
ノ、ハの書き方。

1、一、四、五、六、七、八の各畫は、前の應用。
2、二畫は次の圖の如く、「トン」と當り、「ズン」と、主に中

メトケネ等



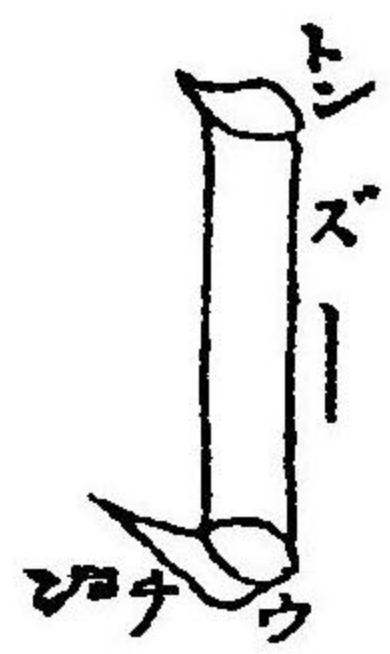
の力にて一氣に撥ねぬく。
3、三畫は次圖の如く、「ス」の主は中指と拇指の力にて、一氣に筆を右下斜に引く心地にて、下筆し直ちに止め穂先きを立て筆頭に向ひ筆をぬく。



オホ

要點
運筆
↓
の如きはねの書き方。

1、一畫は前の應用。



2、二畫は上圖の如く、「トン」、「ズ」と縦線を引き「ウ」と少し筆を左に回はず如き心地にて止め、「チン」と速に撥ね出す。

す。

3、三畫の右撥ねは富士山の二畫に等し。

ツリバリ

し

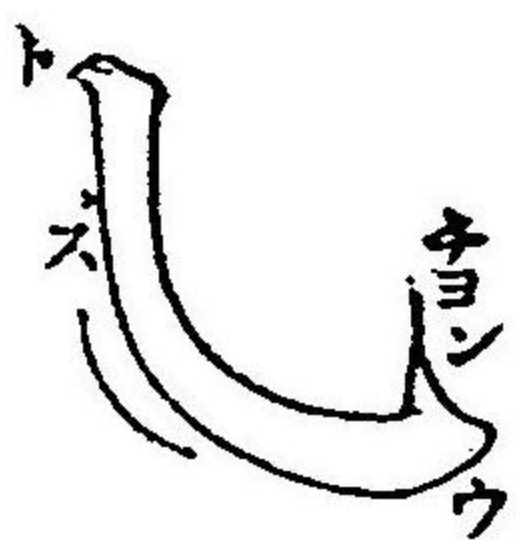
九

要點

し

の如き縦腕及撥ねの書き方。

運筆



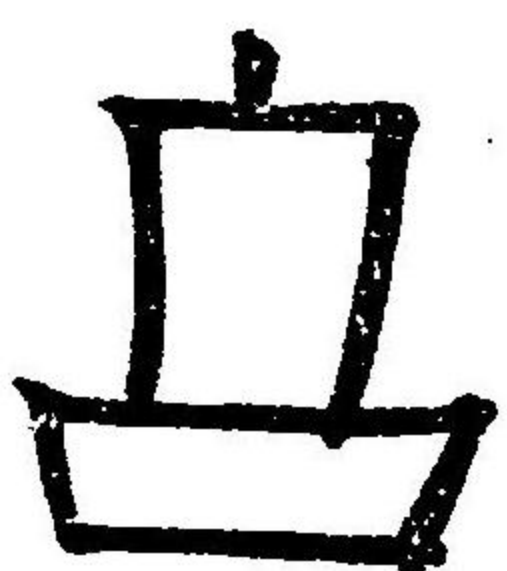
1、圖の如く、穂先きを下より上に向ふ、軽く「ト」と軽く當り、主に中指の力にて「ズー」と筆を引き、次第に力を拵指に譲り、穂先きを回はしつゝ、右方に引き伸し「ウ」と止め、直ちに「チョン」と直上にはねる。

し

し

此の應用として、上圖の如き各形の釣針を畫かしむるがよし。

フネ (一)



アマウワカ

要點

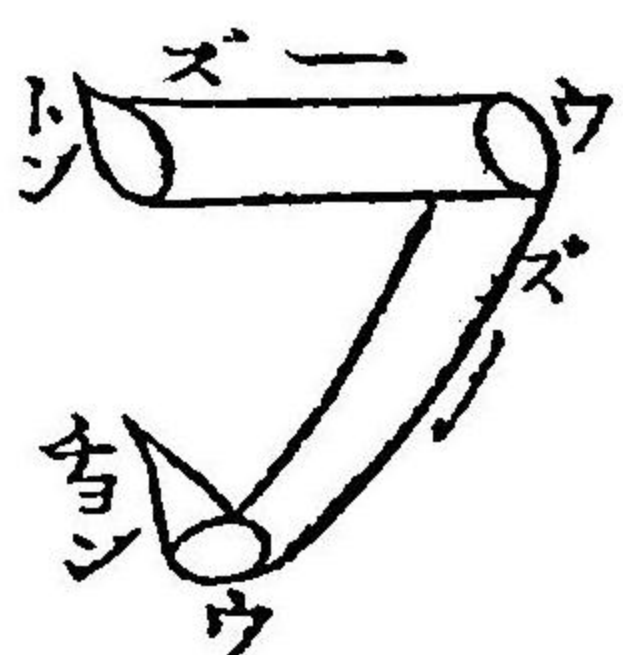
、フ、フの如き各種の點、線及はねの書き方。

運筆

1、一畫は、「トン」と當り、一氣に「ズン」と下に引き、穂先きを軽く止む。

2、二畫は次の如く「トン」と當り、「ズー」と右に引き、「ウ」と押へ、直に中指の力にて「ズー」と左下方へ稍彎形を作るやうに引き、こゝに「ウ」と止め、「チョン」とはね出す。

3、三畫は「トン」、「スラリ」と筆をはらふこと楯の(三)の三畫

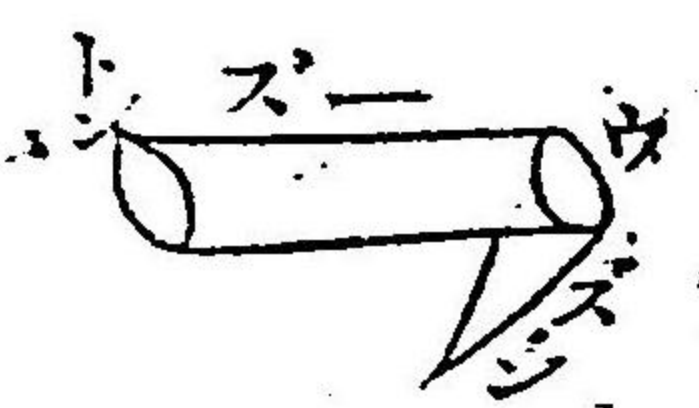


に等しい。

4、四畫は「トン」「ズー」「ウ」と、短く右下へ斜に引く。

5、五畫は次の如く「トン」と當り、「ズー」と引き、「ウ」と押さへ、主に中指の力にて直ちに「ズン」と、下左斜にはねる。

6、六畫は前の應用。



(二)

山

ラ

フ

要點

運筆

1、二畫は横線とはらひとを連ねたる心。

2、其他の畫は皆(一)の應用に屬する。

前に擧げたる繪畫は、主として片假名書き方の豫備となすべきつもりな

れど、其何れの部分が、片假名の何れの部分の豫備となるかと云ふことは、一見直ちに判知し得らるべきにより、此には省くこととした。

四 第一學年用手本の教授法

配當に就き 手本を教授する前に於て、豫め定め置くべきことは、教材の配當である。然しながら、此配當は國語讀本の進度に應じ、工夫すべきものであるから、實際には各學校、それぞれ多少の差異を生ずるは止むを得ざることであらう。ゆゑに本書は、各校如何なる配當に定むるも、都合より教授を爲し得る様に、教授の方法を説明することとしたのである。

説明の方法に就き

イ、手本中同一の文字が數回出づる時は、新に出てたる場合にのみこれが説明をなすこととした。

口、既に習ひたる文字にても、最初に教授せしは何時なりしか、又習はしめしこと幾回に及びしかを、明らかにせぬ時は、適切の教授は到底出来るものでない。故に本書にはこれを明示する爲め、教材として示したる各文字の側へ、既に習ひたる文字には、其既に幾回習ひたるかを記入し、これに添へて、其習ひたる場所をも記して置いた。例へば、次の教材として記したる各文字の側に、「既ノ四」とあるは、既習文字にて、今回は第四回目の教授となることを表はし、「一ノ五」、「一ノ八」、「一ノ二二」等記したるは、手本の一の五頁にて、最初の教授をなし、其後一の八頁と、一の十三頁にて習はしたことを示すのである。

ハ、新に出てたる文字にても、既に教授したる文字中に、其字形、運筆の一部或は全部が、類似したるものある時は、是等既習文字に於ける觀念を喚起し、是れに結合して教授すれば、一方には教授の力を省略し、然

もこれが爲めに明瞭ならしむると共に、他方には前の文字の書き方を、一層確實にすることとなる故、是等を示す爲、關係ある既習の文字、或は繪畫なる欄を設け、直接に必要なものを此中に記入し、これに添へて、其文字の第一回に出てたる所と、最も近き過去に於て習はせた所とを、記入することとした。欄内に擧げたる各文字の側に、「一ノ八」、「一ノ二六」等あるは、一年の手本の八頁にて新教授をなし、一ノ二十六頁にて最も近き過去習ったことを意味するのである。

ニ、字形の教授には、便宜文字を三角形或は四角形内に入れて説明することとした。尤各文字の形は、千差萬別であるから、種々の形を用ひて説明するが至當なものもあらんが、習ひ初めの兒童に、是等各種の説明法を用ふるは、反て困難の基となるべきを慮り、特に比較的簡明なる三角四角等を用ひたのである。

ホ、豫備として書かしむる繪畫の外、手本の文字を教授する間に於て、適宜其の字句の表はす物體等を畫かしむる爲に、教授注意の次へ附加して繪畫を挿入した。是は文字練習の變化として、時々畫かしめ、以て一方には其の習ひつゝある字句の内容を知らしむると共に、他方には知らず知らずの間に曲線の運筆に熟せしめ、以て平假名教授の豫備とするのである。

へ、書き方教授には、各文字の教授の外、一行の文字の關係、即字行を教授することも必要である。然し此字行は、毎教材につき、一々本書に示す程にせざるも、最初一例を示し置かば、他は推して知らるべきにより、最初の分に就き説くことゝし他は略した。

ト、教授上正面より、然かるべき點を詳細に教示するの要は云ふ迄もなければ、又反面より誤り易き點を指摘し、ころばぬ先きの杖ともなすこ

とは、頗る必要である。本書は是等の注意を示す爲め、各文字に就き、書き方上兒童の通弊とも云ふべき諸點を指摘し、教授上の注意中に記し置いた。

チ、運筆の説明及用語は繪畫を教授せる場合と同一の工合にした。其他新用語として用ひたるは、文字の中央を縦斷する線を中線と名づけ、横斷する線を分線と名づけ、三分以上に分ちたる時は、上より第一分線、第二分線と呼ぶことにした。

リ、教材の下方に數字を記入したるは、手本の頁數を表はしたのである。
ヌ、文字の全形を圖示したるものゝ畫線の寸法割合は、常に教科書の字形に一致したのであるから、教授者は之を擴大すればよい。

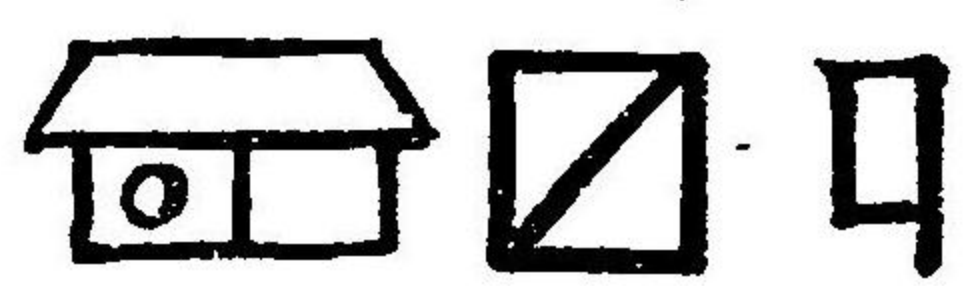
タロ一。

新に教關係あ
授すべ
る既習

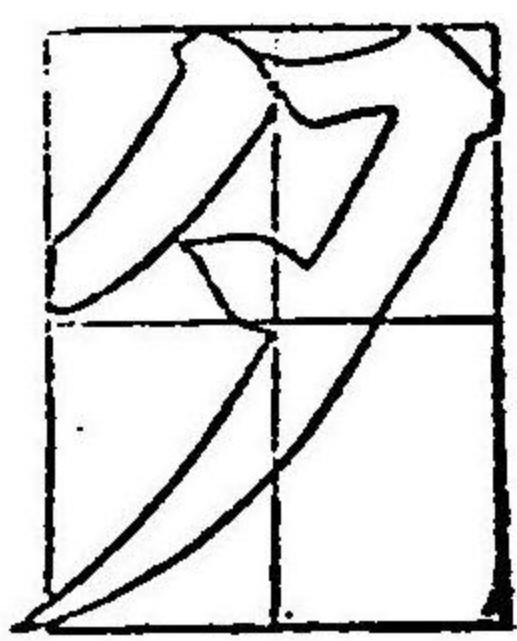
教授法要領

一ノ二、

タ
文字或は繪畫
字形



1、全形



縦に長く左に傾く。

2、四角形の中に入れて見る時は一畫と二畫の接合點は中の上端に中る。

3、三畫は殆ど文字の中心に當る。

4、一畫と二畫の二部とは殆ど平行し、其各筆末は等しく四角の左邊に沿ふ。

5、二畫の一部の長さは一畫の約半分、二部の長さは一畫の約二倍にあたる。

運筆

1、一畫「トン」「スラ」即楯にて教授したる「スラリ」の書き方の筆末を僅

に止め、上方に向って穂先きをぬく。これは「スラリ」と區別あるより、特に注意を要する。

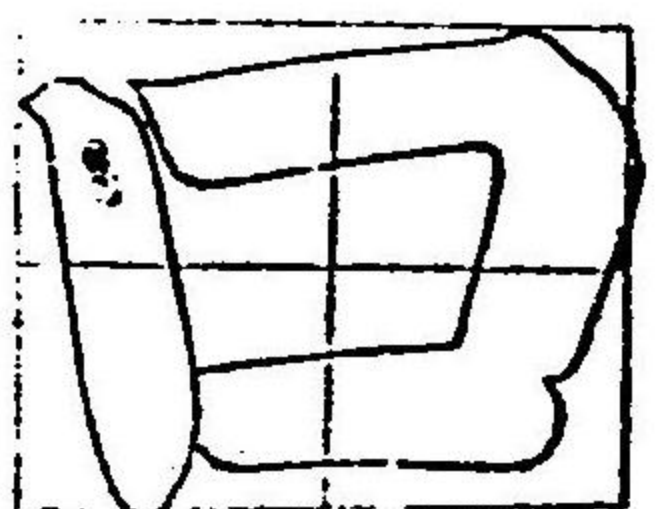
2、二畫は「チ」と軽く當り、「ズ」と引き、「ウ」と止め、「スラリ」と一畫の筆末の直下に向ってはらふこと、舟の(二)の二畫に等し。

3、三畫は「ス」と止めること、家の三畫の心。

口



1、全形



稍平たき四角形。

2、肩開き下つぼむ。

運筆

1、一畫「トン」「ズ」「ウ」と稍右に傾け引く。

2、二畫「トン」「ズ」「ウ」「ズ」と引く。二部の「ズ」は稍内方に

傾け引き、軽く筆をぬく。

3、三畫「チ」と軽く當り、「ズー」と二畫の筆末を目當に引き、二畫末を上に收むるよゝに「ウ」と止め穂先きを立てぬく。

1
卍

字形

1、全形 一真直なる縦棒。

運筆

1、「トン」、「ズー」、「ウ」。「ズー」の初めにて少し胸を出す心にする。

字行、**タロ**

字行を教授するには、先づ一行の文字に對し、中央を縦斷すべき一線を引き、これによりて各字の中央部の上下重なる工合を見、次に最、幅廣の文字を標準とし、中央に平行なる、左右等距離の二線を引き、これにて各字が、此二線間に挿まりて、如何なる擴がりをもつか、又

中線より、左右何れに多く擴がれるか等を見るがよい。次に第二字目以下の各文字の一畫の筆頭の位置が、其前の文字に對し、如何なる所より起れるか、其他、それぞれの、文字の、特別の出入ある點畫は、上の文字の、どの點或は線の直下或は左右幾何の距離の下方に當るか等を見るを、通常の方法として可ならん。今此方法により、「タロ」に就き、説明すれば左の如くである。

1、タロの行の中央に引きたる直線は、此二字の中線に中り、これを更に引き延ばしたるものは、一の中線となる。

2、タの一畫、二畫の筆末部の標準として、中央に平行したる一線を引き、見れば、此の線は、ロの一畫の筆頭に中る故、ロの一畫は、タの二畫の筆末の直下より下筆すれば可なり、といふことがわかる。

3、中央線と左に引きたる線との間隔に等しき平行線を右に引けば、此

の線は、タとロとの右肩を通過す、故に、タ、ロは同じ廣がりを保ちたる文字なることを知る。一は中央線に中る故、ロの二畫の中央を目當に、其下方に下筆すればよい。

教授上の注意

タ 字形をあまりに傾け過ぎること、其二畫の二部を彎曲せしめ、其筆末一畫の筆末に接近するよーになること。

ロ 各畫の結び合せ工合正しからず、二畫の二部が三畫の下に出づるよーになること、又一畫を垂直に書き、二畫の二部これに平行し、全形下つほまず方形となること等であるから、豫め特に是等の注意を與へ置くが必要である。

其他一般に通ずる教授の注意。

書き方の説明をなす前、先づ手本の字句の読み方を確むるは勿論なれど、其読み方は、單にタローと讀ませ、これは人名なりなどと、殆ど無意味に近くすて置くにあらで、必ず讀本中に於て教授したるタローを復現せしめ、其タローの名を、これより書かんと考にて、兒童がはずんで書かんとする心情を鼓舞するがよい。

又教授の中間に於て、便宜太郎の行爲に就き、簡單に問答などし、以て一には教授の變化たらしめ、或はこれに結びつけて訓誡を與ふる等、方法上の特別手段を講ずるは、教師の注意すべきことである。

運筆の教授に際し、新に教授せんとする文字の運筆法が、豫備繪畫として練習せしめしものと類似する點あらば、これ等を比較問答し、或は運筆に結合せる音聲、「トン」「ズー」等を工夫せしめ、以て筆遣ひの舊觀念を復現せしむるがよい。

字形運筆の説明を、或る程度迄なしたらば、先づ食指にて、手本の文字をなどらしめ、以て筆遣の豫習となすもよからう。

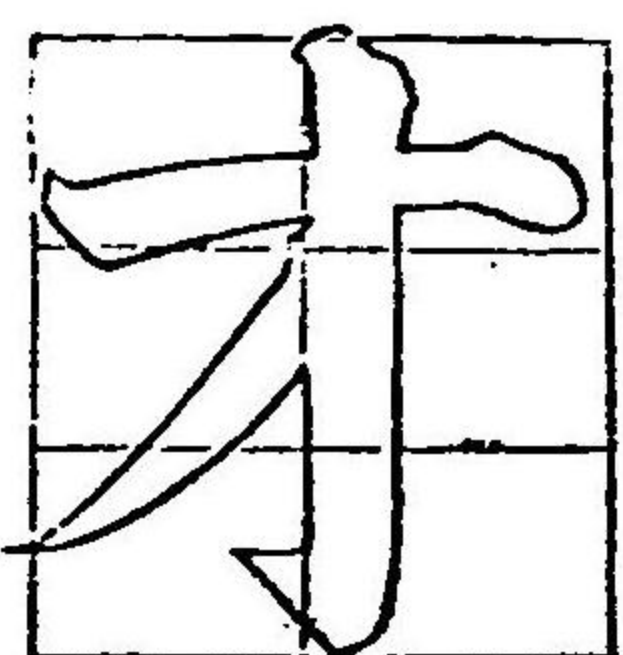
筆の持ち方、姿勢等、一般の注意は、常に必要なることである。以上各種の事柄は、毎時教授に際して必要なることなれど、毎教毎に述ぶるは頗る繁雜に渉る故、次の教材よりは省くこととする。

オ
チ
ヨ

オ

字形

1、全形



縦に長し。

- 2、縦は横より二畫の頭丈け長い。
- 3、全體を縦に二分すれば、二畫は右に屬し、其左側が中線に沿ふ。
- 4、一畫の位置は、二畫の第一分線の所に當る。
- 5、三畫は一畫と二畫とにて作れる、左下方の長方形の對角線に當る。

運筆

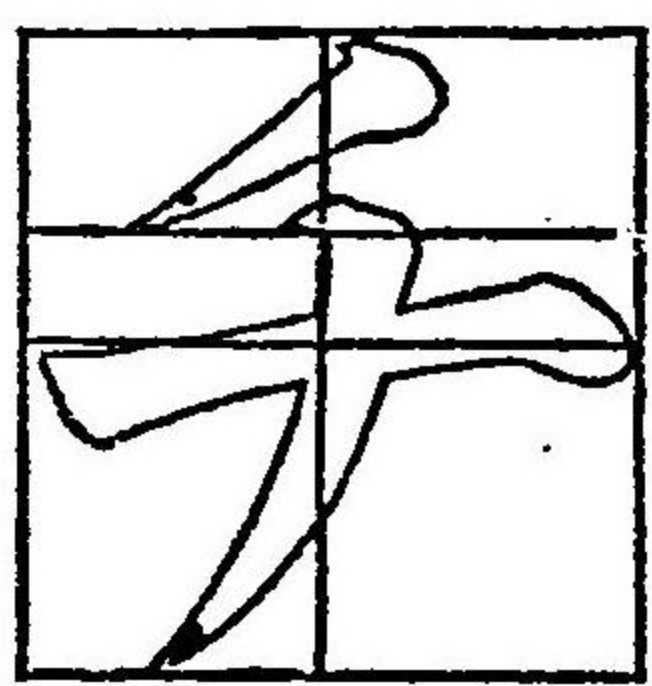
- 1、一畫「トン」「ズー」「ウ」、上に稍彎形をなす。
- 2、二畫「トン」「ズー」「ウ」「チオン」「ズー」は、初めは少し胸を出し、終りは稍、右へ傾く心にし、更に左に向ふ心にて「ウ」と止め、極めて軽く、短かく、一氣に「チオン」と一畫の筆頭に向つてはねる、大略、いかりの二畫に等し。

- 3、三畫「トン」「スラー」と一畫、二畫の接合點の、少し下、二畫中に起り、對角線を引く心にて筆を引き靜にぬく。

チ

字形

1、全形



の縦長にて左に傾く。

- 2、上下二段に分てば、主部は上段に在りて、二畫は分線の上部に屬し、

- 一畫は上段の更に二分されたる上に屬す。
- 3、二畫は分線の上縁より起る。
- 4、三畫は上段の分線より起り、中線の右に沿ひて下り、中程より左へぬける。

運筆

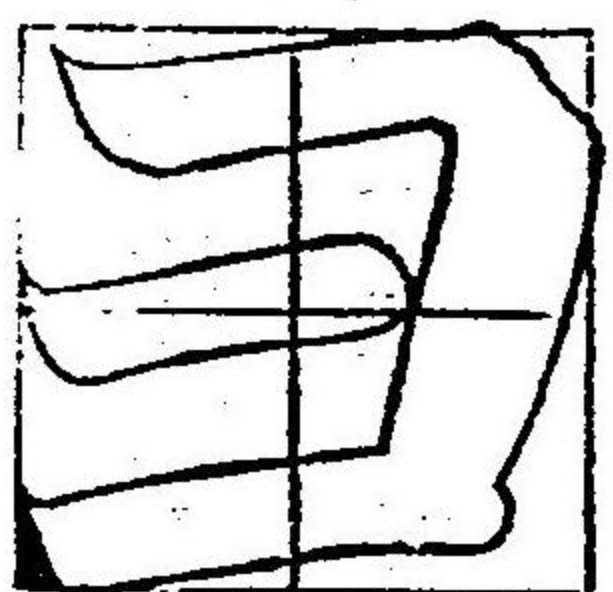
- 1、一畫「トン」「ズン」と横に近くぬくこと、家の二畫に等し。
- 2、二畫「トン」「ズー」「ウ」。
- 3、三畫「トン」「スラー」と、オの三畫の筆を縦に近く書く心にて、一畫の筆末の直下に向ひぬく。

ヨ

ロ

字形

1、全形



四角にて左に歪む。

- 2、二畫は分線にあたる。
- 3、一、二、三畫の各筆頭は、一畫の二部の傾斜に平行して揃ふ。

運筆

- 1、一畫「トン」「ズー」「ウ」「ズー」はロの二畫に等し。
- 2、二畫は「チ」と軽く當り、「ズー」「ウ」と稍上に仰ぐ心にて引き止め、一畫の二部に密接させぬよーにする。
- 3、三畫「トン」「ズー」「ウ」と稍覆ふ心にて引き、一畫の末を支へるよーに筆を止める。

教授上の注意

オの三畫あまりに彎曲し、二畫の撥ねわざとらしくなる。

チの一畫縦に近くなり、三畫の彎曲甚だしくなるか或は横になり過ぎる。

ヨの一畫の二部縦になり、全形正方形となり易き等は兒童の通弊である。

ニハ ヤマ ハシ

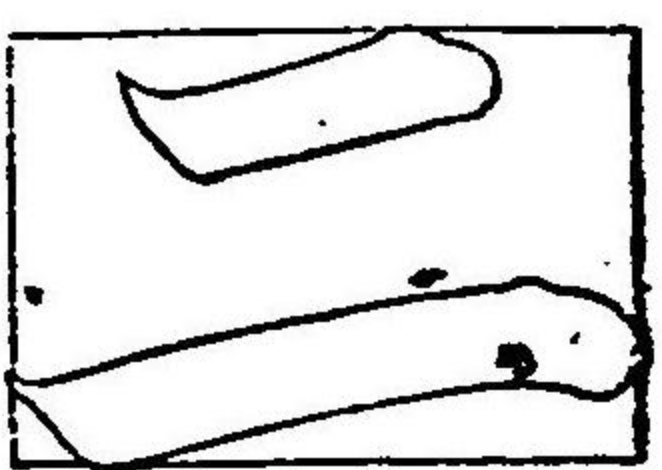
一画
二画
四画

ニ

一画
二画
三画

字形

1、全形



平たき四角形。

- 2、二畫は一畫の倍より稍、短かい。
- 3、一畫と二畫との隔りは、約一畫の長さに等しい。

運筆

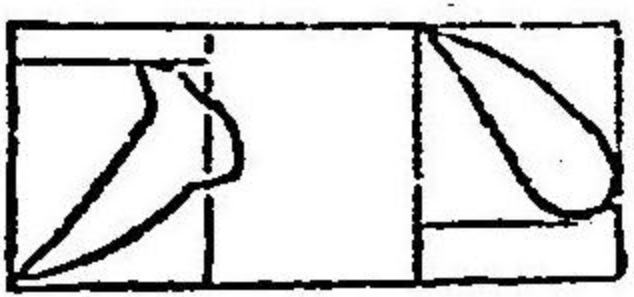
- 1、一畫「ナ」、「ズ」、「ウ」、ヨの二畫に等しい。
- 2、二畫「トン」、「ズ」、「ウ」、ヨの三畫に等しい。

ハ

一画
二画
三画

字形

1、全形



平たい。

- 2、正方形を三つ横にならべた四角形の中に入れて見れば、一畫は左の正方形の略對角線に當り、二畫は右の正方形の略對角線に當る。而して一畫は筆頭が上の輪廓より少し下に離れ、二畫の筆末は上の輪廓より起り、下少しく離る。其輪廓を離るゝ間、及兩畫の長、略等しい。

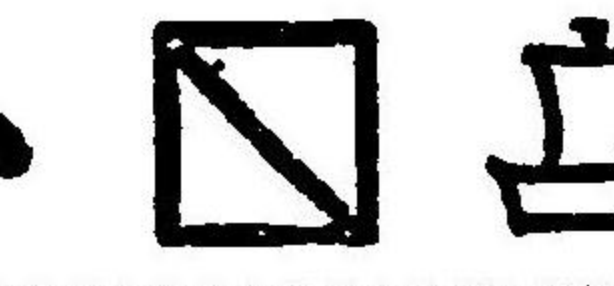
- 3、中に位する正方形は空位を占め、兩畫の鈞合を保つ。

運筆

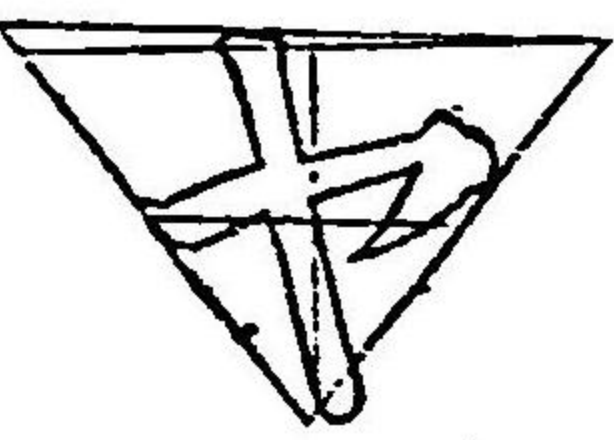
- 1、一畫「トン」、「ズ」と、主に中指の力にて一氣に撥ね出すこと、チの一畫の筆遣ひと等しく稍、縦に近く書く。

2、二畫 は「ス」とタの二畫の稍、長さもの、力は中指を主とし、無名指にて少ししめるやうにする。

ヤ
字形



1、全形



等邊三角形を倒にしたる形。



2、一畫の筆頭は、三角形を上下に二分したる分線に當る。

3、二畫の筆末は、略三角形の角頂に止まる。

運筆

1、一畫 「トン」、「ズー」と中指の力を主として、稍、右上に向ひ引き、「ウ」と止め、「ズン」と穂先きを二畫の筆頭に向はせる心にてはねる。
はねはハの一畫の心にてよい。

2、二畫 は「トン」、「ズー」、「ウ」と、三角形の底の中央の稍、左より筆を

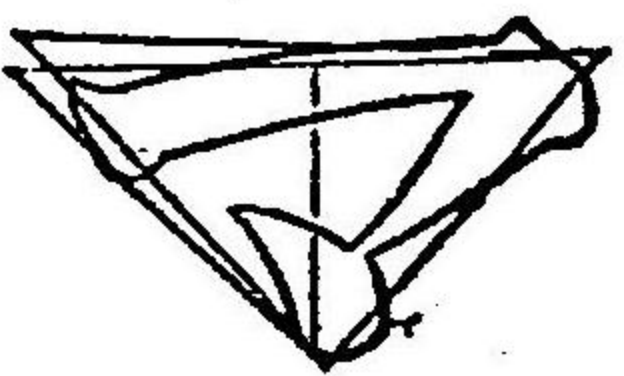
下し、次第に右に傾け、殆ど角頂に至りて止まるよゝに引く。

マ



字形

1、全形



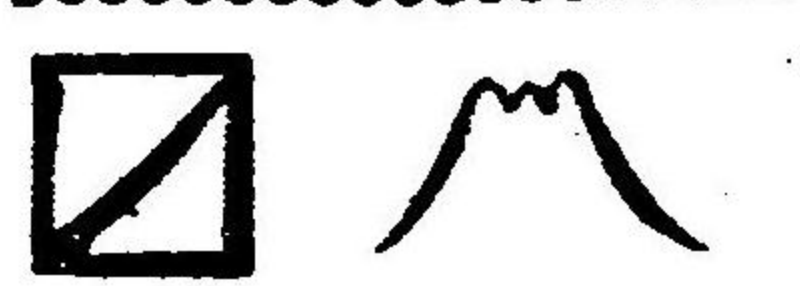
平たき三角形を倒しまにしたる形。

2、二畫は三角形の角頂に止まる。

運筆

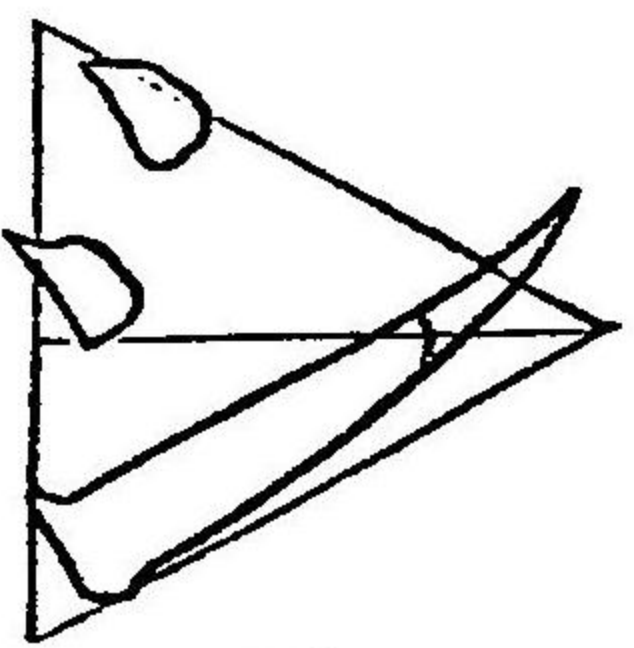
1、一畫 はヤの一畫と等しく、筆末は二畫の筆頭に向ふ心にてぬく。
2、二畫 はハの二畫の稍、短かく、タの二畫の稍、長さもの、心にて運筆し、一畫の筆末を中に包む心にてうつ。

シ



字形

1、全形



稍、高さ二等邊三角形を横にした形。

2、一畫 は底の内側にあたり、二畫は中線に當り底邊に着く。三畫の筆頭は殆ど底の角點に中り、これより邊に添ひ、角頂に近づきて上にぬける。

運筆

- 1、一畫 「トン」稍、縦に近く短く書く。
- 2、二畫 「トシ」稍、横に近く短し、一、二畫共に筆末、次の畫の筆頭に向ふ心にて穂先きをぬく。富士山の二、三畫のはねを下に向けた心でよす。
- 3、三畫 は「トシ」と二畫の筆末を受けて筆を下し、「ブーン」と、主に拇指の力にて斜に上に筆をやり、ぬくこと楨の(五)の三畫と等しい。三畫の筆頭と二畫との距離は、一、二畫の距離より、少し大ならしむる心で下筆するがよい。

教授上の注意 ハの畫の間十分の空所を保たぬこと。二畫の筆頭、

一畫の筆頭より上にあらぬこと。二畫の筆頭「トシ」の如く強く當り、筆末に至り反て力ぬけ、或は筆末上に反りハの字のやうになること。

ヤマ字の各の一畫の一部と二部との接合點、丸く曲がること。

シの一二畫が殆ど横に近くならび、三畫の筆頭あまりに右に偏し、ツにまぎらはしき文字となること。三畫のはねを、強て上方に彎曲せしめ、或は反對に、下に彎をなす如く書くこと。是等は初步に於て兒童の通弊として屢々認むる所なれば、特に注意して教授するを要す。

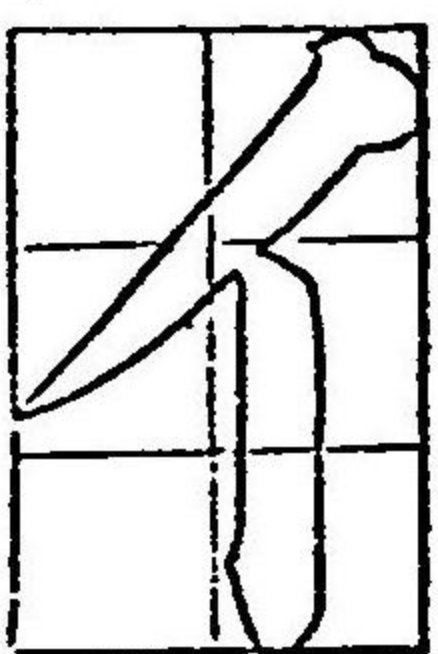
イネ コメ ムギ

一ノ七六

イオ 字形

一ノ三

一、全形



縦三横二の割の四角形の中に入る。

2、平たき四角形を三つ重ねたるものと見れば、一畫は上二つの對角線に當り、二畫の長さは、下の二つの高さに等しく、其位置は中線の右に沿ふ。

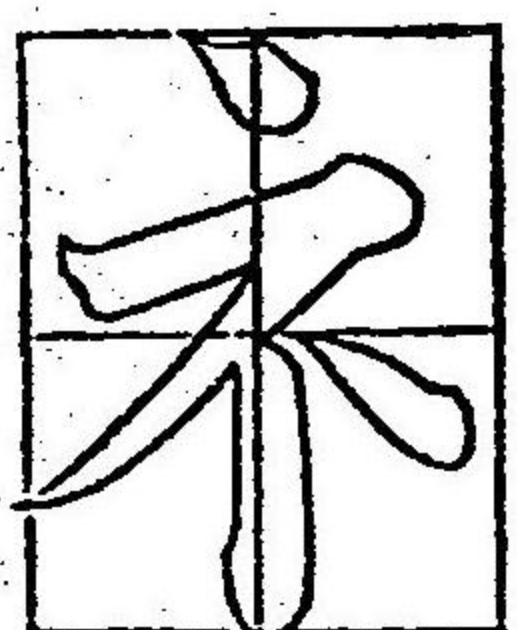
運筆

1、一畫 「トン」、「スラー」、オの三畫の稍、彎曲を去りたる心にて書く。
2、二畫 は一畫の中頃を筆頭として、「トン」、「ズー」、「ウ」と縦線を引く。

ネ

イ ^{一五} _{二五} 字形

1、全形



縦長の四角形の中に入る。

ハ ^{二五} _{三四}

運筆

2、長方形の中に入れ見れば、一畫、三畫は中線に中り、二、三、四畫の交叉點は全體の中心に當る。

1、一畫 「トン」、シの一畫に等しい。

2、二畫 「トン」、「ズー」、「ウ」、「スラー」と其一部は主として拇指の力により、二部に移れば、主として中指の力に譲りてはらふ。其「スラー」はイの一畫と略等しけれど、「ウ」と止り「スラー」と出すとき、胸を張りはらふ心持あるがよい。一部より二部に移る際は筆を戻して一部の末に重ねるよゝにするが肝要である。此心持ちは無名指の力で加減するのである。

3、三畫 「トン」、「ズー」、「ウ」、イの二畫と等しい。

4、四畫 は「ス」とハの二畫の如くにて、二畫の二部に相對するやう

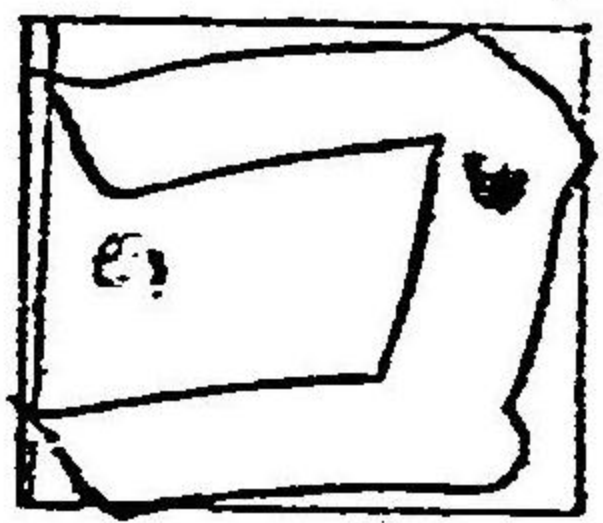
に書く。

コ

ヨ

字形

1、全形



ヨより少し平たい。

2、各畫の關係ヨに準ず。

運筆

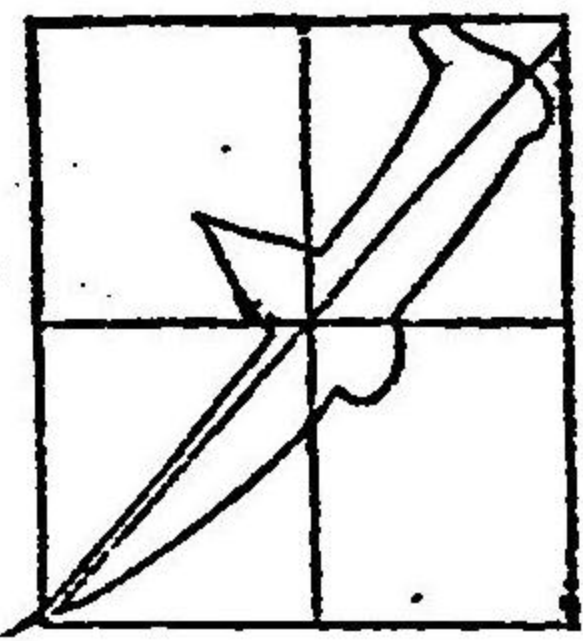
1、全くヨに準ず。

メ

タ

字形

1、全形



正方形の對角線と見られる。

2、二畫は一畫の長さの半より稍上にあたる。

運筆

1、一畫「トン」、「スラリ」、イの一畫より、稍彎形をなさしめたものに、
て、タの二畫の二部に近い。

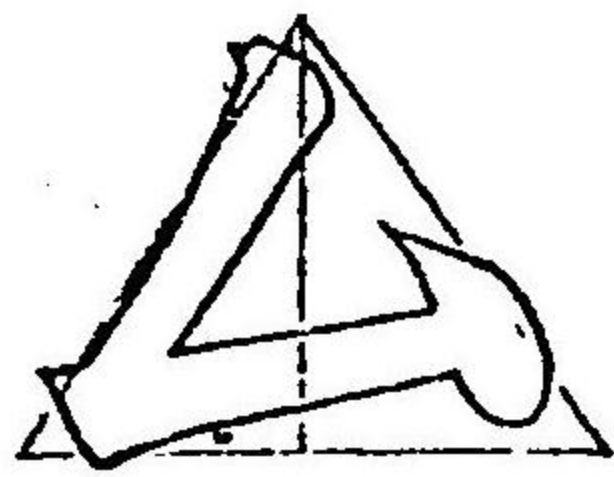
2、二畫「ス」タの三畫に等しい。

ム

メ

字形

1、全形



少し平たき三角形。

運筆

1、一畫の一部、「トン」、「ズン」と引き、筆末をはなさず直にそこへ又
「トン」と當り、「ズン」と稍上に傾けて引きぬくこと、三角の繪の心。
2、二畫は「ス」と一畫の一部に應ずるやうに打つ。

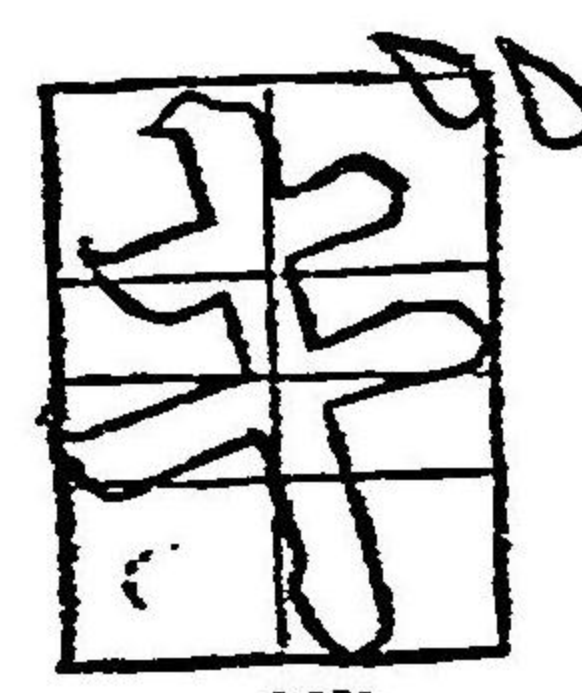
ギ

ニ

字形

一ノ四 ヤ 1、全形

一ノ六 ネ 2、一畫 と二畫との交叉點は中心に當る。



縦長にて左に傾く。

3、全形左に傾く故、一二の字を右肩を上げ書き、これに直角に三畫を交叉したものと見られる。

4、點にごりは、全形につかず、離れず、右肩に並べ打つ。

運筆

- 1、一畫 「チ」、「ズー」、「ウ」。
- 2、二畫 「トン」、「ズー」、「ウ」、一二の字を右上りに書く心。
- 3、三畫 「トン」、「ズー」、「ウ」、ヤの二畫に等しい。
- 4、點にごりは、「トン」、「トン」と、ネの一畫を二つ書く如くする。

教授上の注意 イの一畫、彎形をなし、二畫眞直ならぬ弊を避くること。

ネの一畫と二畫の離し工合を加減し、又二畫の一部、二部の接ぎ目開かぬこと、中央なる二つの畫の交はる所統一するよー注意すべきこと。

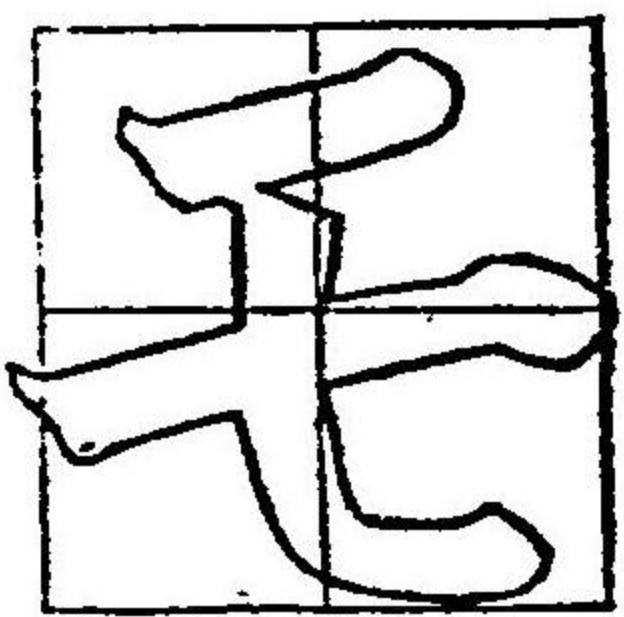
コはヨの注意に等しい。
 キは一、二畫の右肩上らず、三畫のみ傾くの弊が多い。
 點にごりは散漫になり易い、特ににごりは、是れが最初であるから、其文字との離れ工合、點の大きさに、注意を要する。

モとヂノエダ 一ノ八

モニ 字形 一ノ四

ク

1、二全形



略正方形の中に入る。

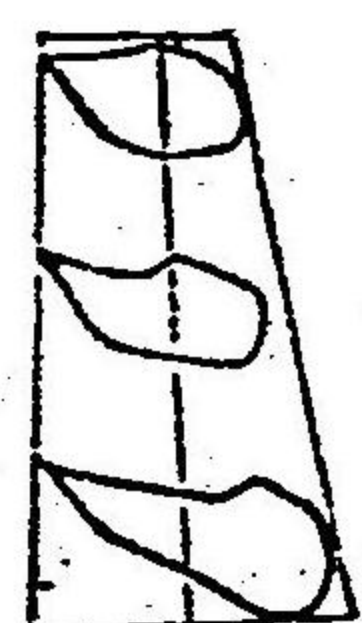
- 2、二畫 は分線に中り、三畫の一部は中線に中る。
 - 3、一畫 は輪廓の上邊にあたり、三畫の二部は下邊に添ふ。
- 運筆

- 1、一、二畫は二に等しき筆遣ひにて、右肩を上げて書く。
- 2、三畫は「トン」「ズー」「ウ」と旗の(二)の一畫の如く、一部の下より次第に、筆の穂先きを回はして右に引き、直ちに「ウ」と止む。

ネ

一ノ六

1、全形



細く高さ三角形内に入る。

- 2、各畫間の距離相等しく、次第に畫の大きさを増す。

運筆

- 1、一畫 「トン」ネの一畫に等し。
- 2、二畫 「ズー」一畫の筆末を受けて筆を起す故、筆頭稍々上に向ふ。
- 3、三畫 「スー」二畫稍々長きもの、即ちネの四畫に等し。

チ

一ノ三

字形畧す。

運筆

ギ

一ノ七

- 1、點にごりの書き方はギに等しけれど、其打つ位置は、本字

の右肩の空所を補ふ心にてうつがよい。

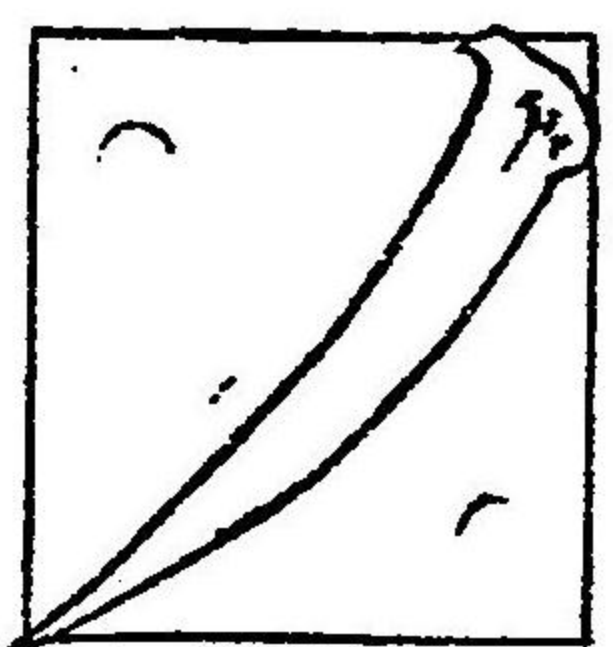
メ

一ノ七

字形

共にメに準ず。

筆運

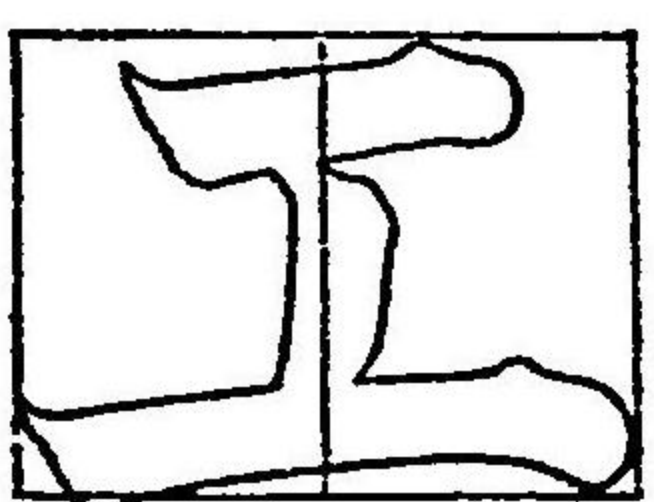


エ

一ノ四

字形

1、全形



平たき四角形と見らる。

2、二畫は中線に中り、高さは一畫の長と等し。

運筆

1、一畫と二畫、は二に等し。

2、二畫は「トン」、「ズー」と僅に彎をなす心にし、筆末二畫の筆頭に向

ふ心にてぬく。

ダ

一ノ三

字形

略す。

一ノ八

運筆

教授上の注意

モの三畫の一部と二部との接続點、あまりに角ばり、

或は其二部の筆末、次第に下方に向くこと。

この各畫の傾きなく、或は二つの畫を平行せんと勉むる爲め、反て

文字右に倒れんとする形となること。

エの二畫のあまりに眞直になること等は兒童の通弊故注意すべきで

ある。

ツ

一ノ七

ソ

一ノ三

ヨ

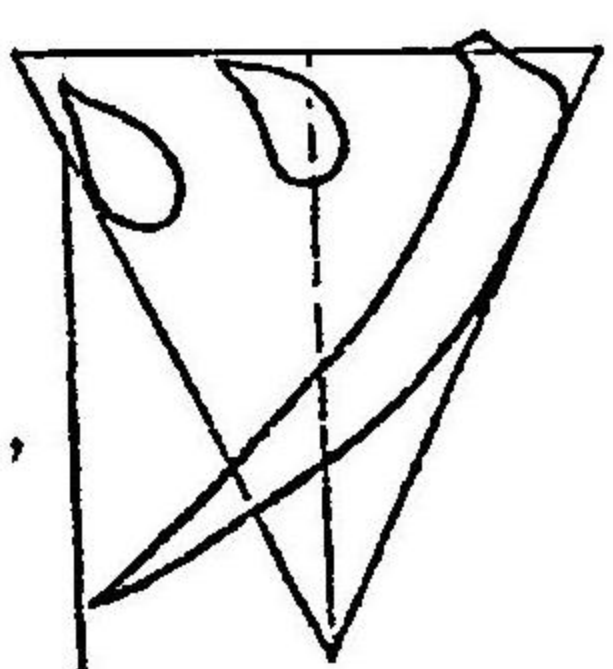
一ノ一〇

ツ

一ノ九

字形

1、全形



略二等邊三角形を倒にした形。

2、一畫は左の邊に沿ひ、二畫は底の中央につき、三畫は右の

邊に沿ひて進み、次第に内に彎曲して一畫の下に至る。

運筆

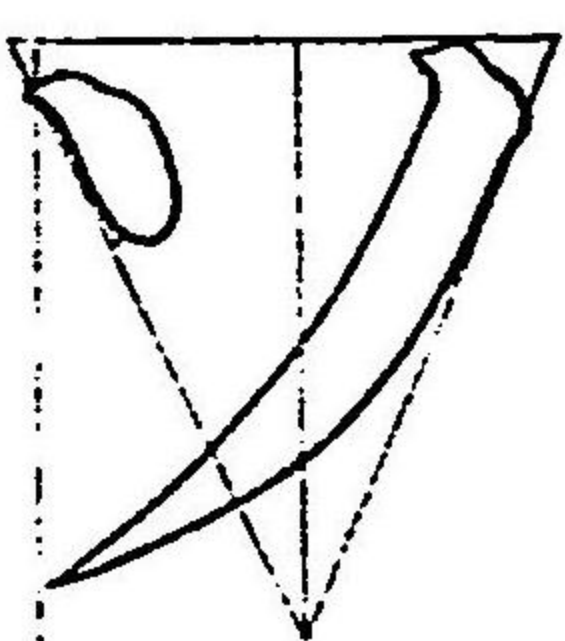
1、一畫、二畫共に「トン」、シの一、二、三畫の如く打ち、其筆末、次の畫に向ひてぬく。

2、三畫、「トン」、「ズラリ」、ノの筆遣ひの心なれど、一畫に向ひ稍、彎曲する心持ちにはらぶ。

ソ

字形

1、全形



底稍、狭き二等邊三角形を倒にしたる形。

運筆

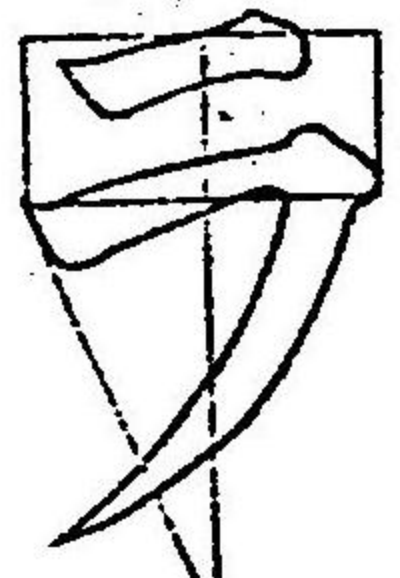
1、ッに準ず。

ラ

字形

タ

1、全形



二の字を入る、平たき方形の下へ、高さ其二倍なる二等邊三角形を倒に連ねたる形と見らる。

2、一畫と二畫の一部との間は其下部の半。

3、二畫の一部は三角の底邊に中り、二部は右邊に沿ひ、次第に彎をなして角頂の左にぬける。

運筆

1、一畫「トン」、「ズー」、「ウ」。

2、二畫「トン」、「ズー」、「ウ」、「スラリ」。「スラリ」はソの二畫と等しい。

ル

字形

1、全形



二個の正方形を横に連ねたる形の中に入る。

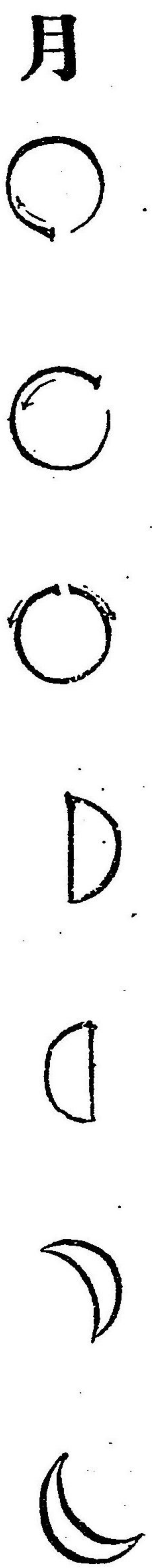
2、一畫は右の正方形の中線の上部より起りて左の角點に向ひ、二畫の一部は二正方形の界線に中り、其二部は右正方形の對角線に當る。

運筆

- 1、一畫 「トン」、「スラーリ」、ソの二畫を縦に近く短く書く。
- 2、二畫 「トン」、「ズー」、「ウ」、「ズーン」。「ズーン」は拇指の力にて大事に筆を押しぬく。これは少し上に彎曲せしむる心あるを要する。

教授上の注意 ツの筆順を二畫より初め、或は一、二畫を縦長に書き、又は縦に近く重なるよゝに書くこと。二畫の「スラーリ」とはらふ所を筆先きを止め、結局シに類する字形となること等は此字を書く通弊である。

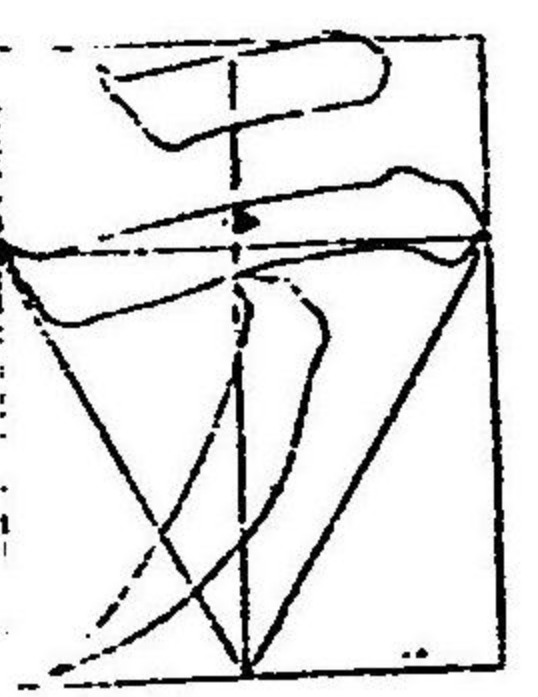
ソは兩畫の間を近づけ過ぎ、リに類するの字となる。
 ラは一、二畫の間廣過ぎ、又ははらひが縦に近くなる。ルは二畫のはねの短かきに過ぎ、或は其二部が縦に近くなり、若くは彎をなし過ぎることあり。



テ ^{一ノ二}ツ ^{一ノ二}ポ ^{一ノ二}ー ^{一ノ二}ユ ^{一ノ二}ミ ^{一ノ二}ヤ ^{一ノ三}

テ ^{一ノ四}ニ ^{一ノ九}ノ ^{一ノ二}ラ

字形

1、全形  ラに準ず。

2、二畫は三角の底に當り中線より稍々下に起り角頂の左にはらふ。

運筆

- 1、一、二畫ニに等しい。
- 2、三畫「トン」、「スラリ」、ノを縦に近く書く。

ツ

字行

字形、運筆共にツに出づ。

1、テの中線より稍々右にて其三畫の筆末と略同じ高さより一畫を書き初む、即ち全體が主字の方より僅に右に出づるよゝにする。

2、大さは主字の約四分の一に書くがよい。

3、總て捉音拗音を表はす副字は主字につかはずはなれず、其右下に付き大さは普通主字の四分の一でよい。

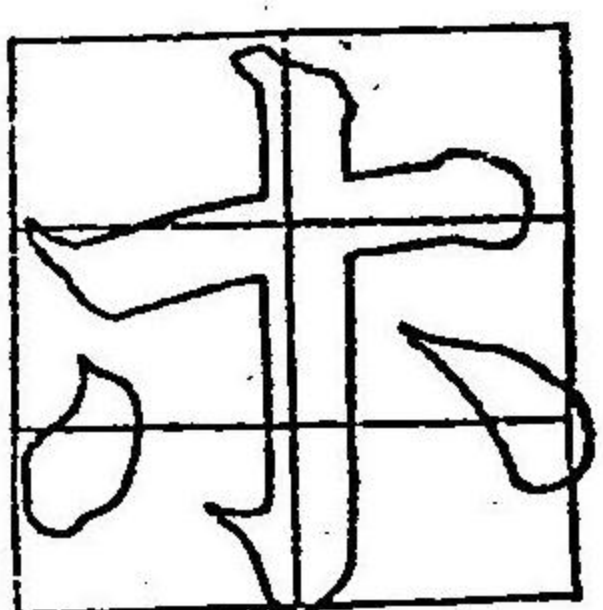
ポ

字行

字形

ハ
三四五

1、全形



略正方形。

1、二畫は中線に中り、一畫は横の第一分線に中り、三、四畫は第二分線に中りて其筆末共に輪廓につく。

2、○にごりは右肩につかはずはなれず打つ。

運筆

1、一畫「トン」、「ズー」、「ウ」、二畫「トン」、「ズー」、「ウ」、「チン」、共にオの一、二畫の書き方に等しい。但「チン」の撥ねの方向は、略四十五度に出し三畫の筆頭に向ふ。

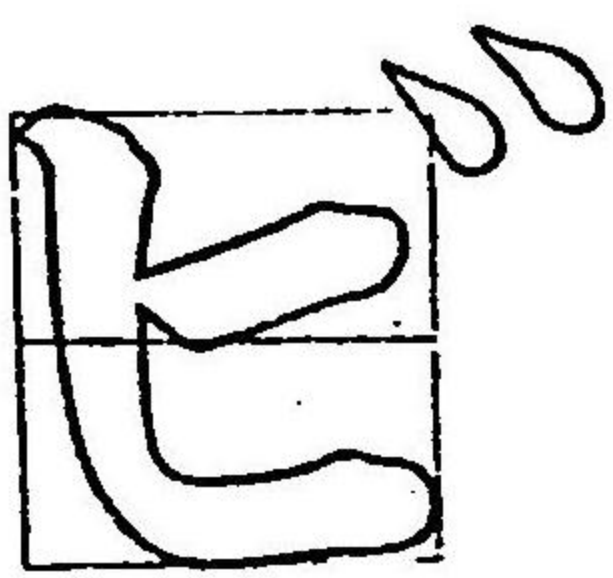
2、三畫は左の「ス」と名づくべく即「チ」の筆當りの如く筆を下し同時に左方へ回はして止め靜に筆頭に向ひてぬく。

ビ
モ

一ノ八

字形

1、全形



略正方形。

2、一畫は中央より稍々上。

運筆

1、一畫「チ」、「ズ」、「ウ」。

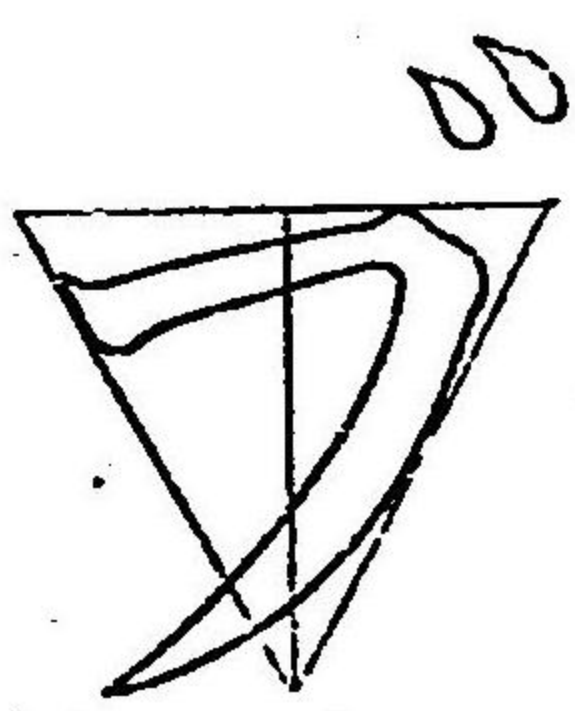
2、二畫、モの三畫に等しく、其一部は一畫より稍々長く、一部よりは稍々短かい。

ブラ

一ノ二

字形

1、全形

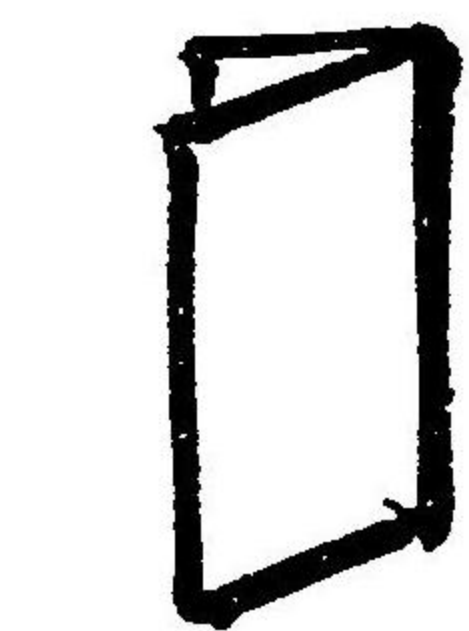
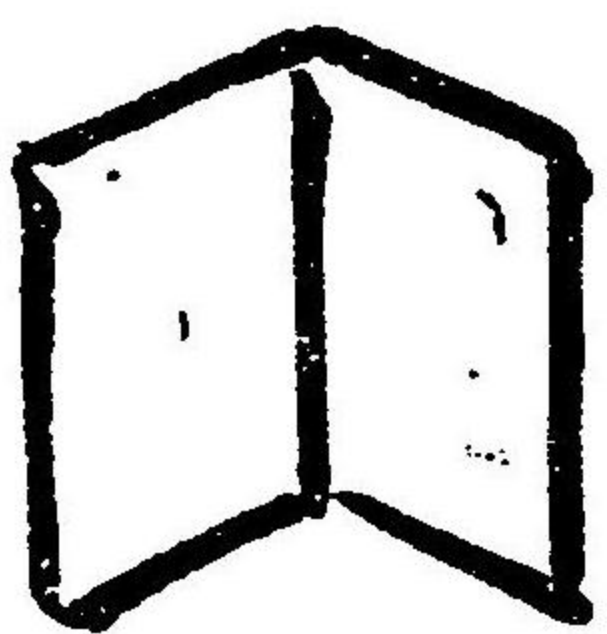


二等邊三角形の倒立。

運筆

1、ラの二畫に準ず。

教授上の注意　ロの二畫は、モの三畫の注意と同じく、フはラの二畫と同一の注意を要する。



キ

一ノ七

ユ

一ノ二

ー

一ノ三

ス

一ノ五

チ

一ノ三

ヤ

一ノ四

ワ

一ノ三

ン

一ノ七六

ス

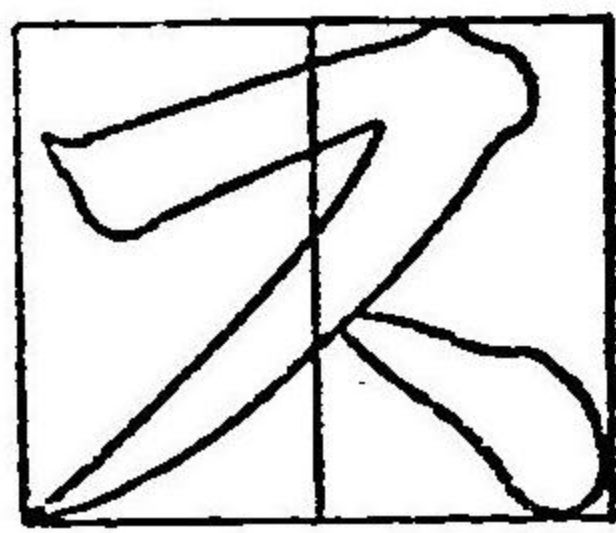
フ

一ノ五

字形

ネ

1、全形



稍々平たき四角形。

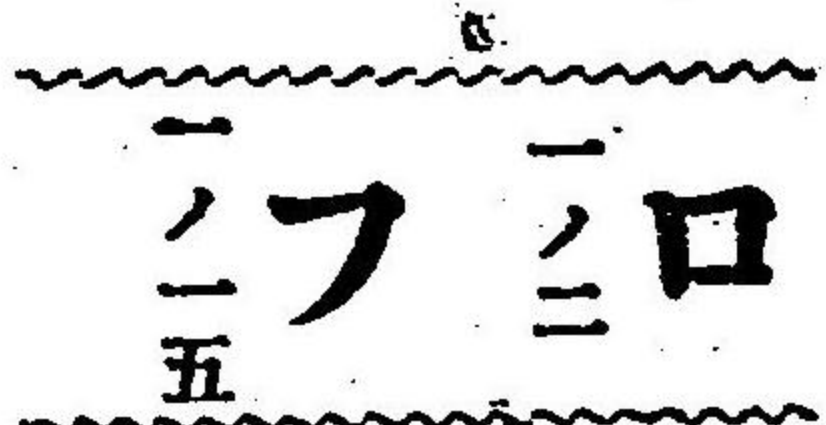
- 2、一畫の二部は略對角線に當る。
- 3、二畫は他の對角線に中る。

運筆

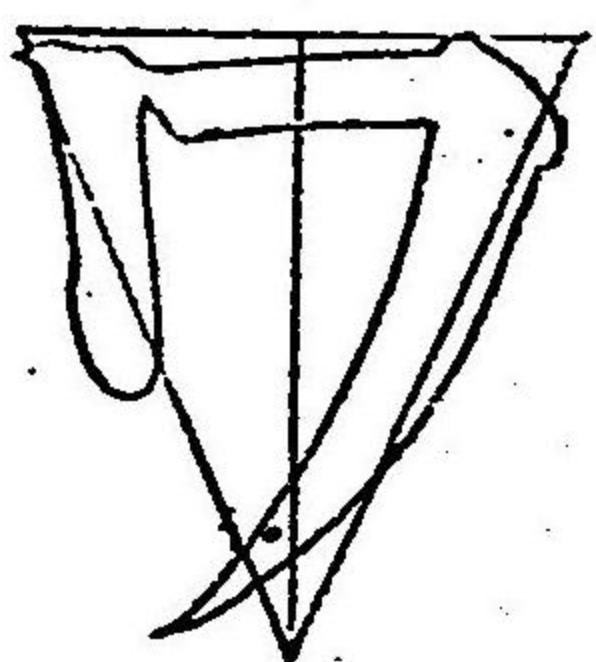
- 1、一畫「ト」ン、「ズ」ー、「ウ」、「ス」ラリ。「ズ」ーと成るべく斜に右上に押遣り、「ス」ラリ」とはらふ。此角はネの二畫と、フのはらひとの中間の心。
- 2、二畫「ス」ッ、ネの四畫と等しく、一畫の筆末と殆ど一直線になるまで引き据え、一畫の筆末と相對して文字をすはらせる。

字形

ワ



1、全形



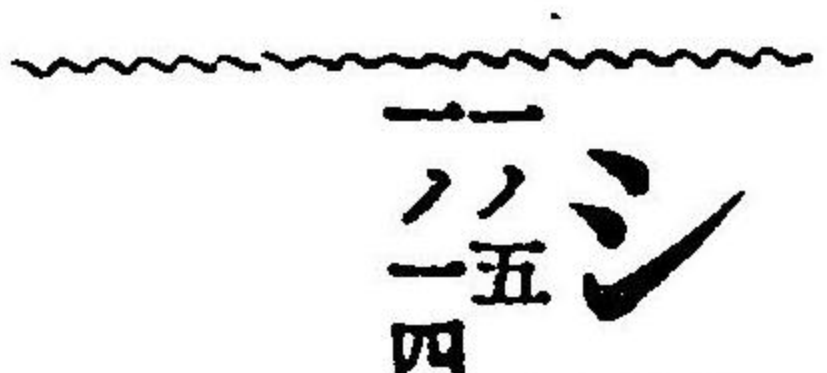
二等邊三角形の倒立。

- 2、一畫は左の一邊に沿ひ稍々縦に近く、二畫の一部は底に沿ひ、二部は右邊に沿ひ、稍々彎曲し、角頂より左に出で、一畫の筆末直下に至る。

運筆

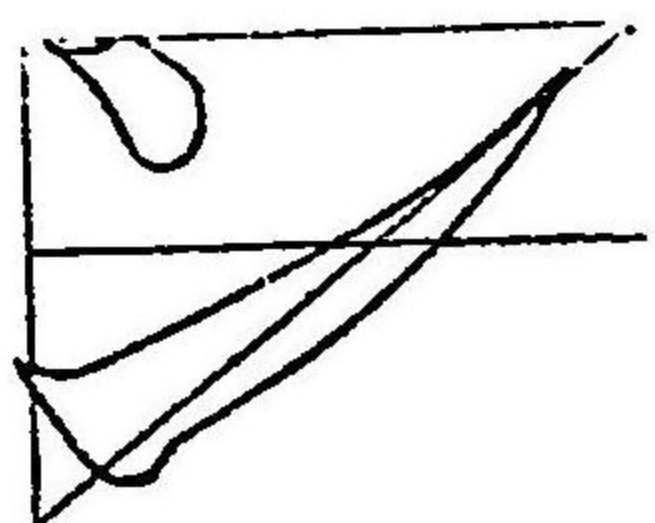
- 1、一畫「ト」ン、「ズ」ー、「ウ」、「ス」ラ、ロの一畫に等しい。
- 2、二畫、フに等しき筆遣ひなれど、筆頭は「チ」□と軽く當る方がよい。

ン



字形

1、字形



直角三角形を横にした形。

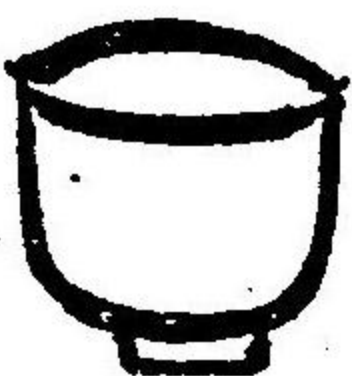
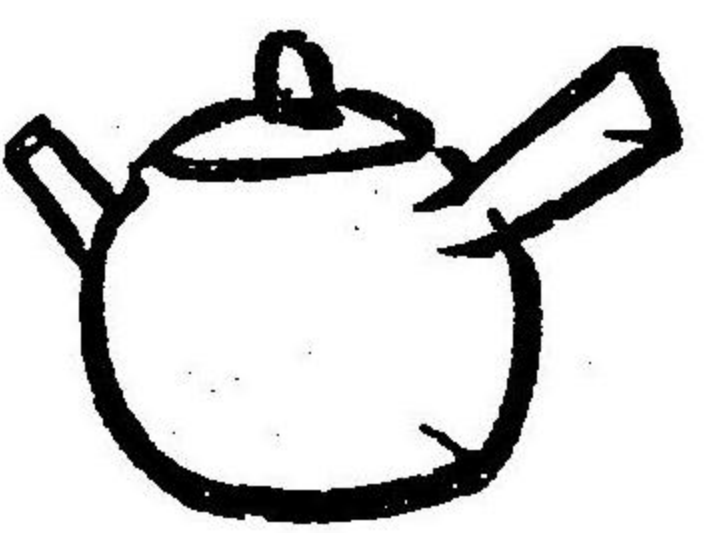
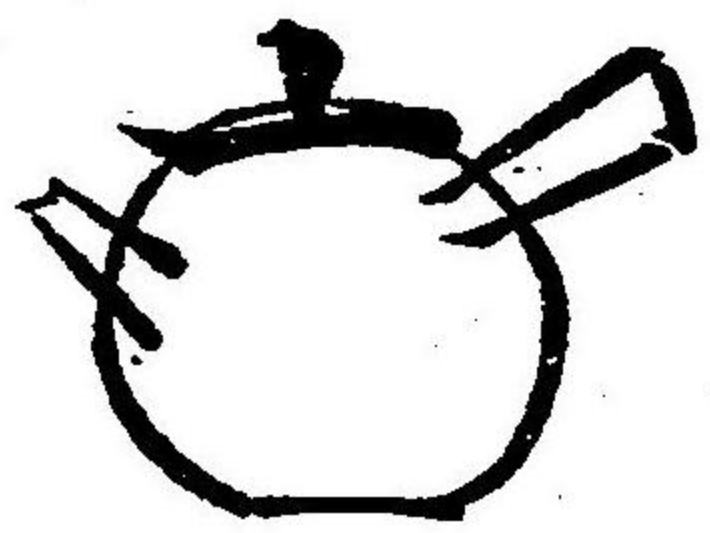
運筆

1、大體シに等し、只二畫の筆頭を、一畫の直下の少し左に出す心にて書けばよい。

教授上の注意

スの一畫の一、二部連接の所丸くなり、「スラー」の工合彎に過ぎ、或は縦に近くなり、二畫が一畫に對して据はらぬは、最も多き弊である。

ワには二畫の筆頭が一畫の上のり、或は中途に當る弊あり。ンは二畫が一畫より左に出過ぎ、又は右に引込み過ぎ、其はね方彎曲する弊が多い。



アガレエダゴ。

既ノ三ノ九
既ノ六ノ二

一ノ一八

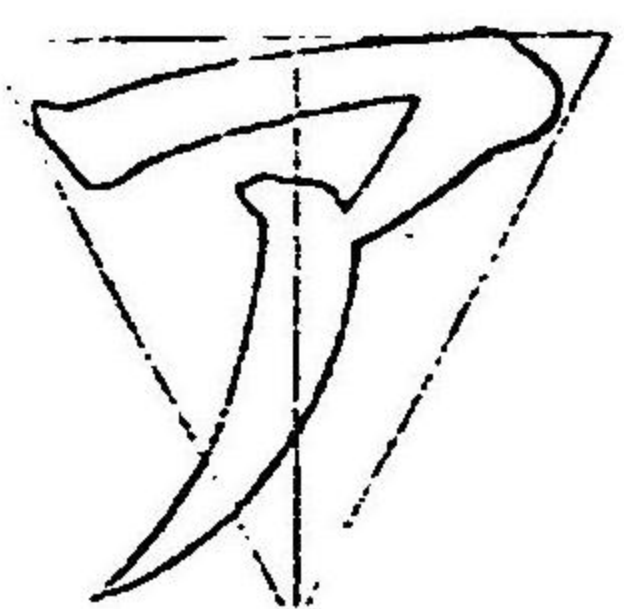
ア

マ

字形

チ

1、全形



二等邊三角形の倒立。

- 2、一畫の一部は殆ど底邊に沿ひ、其二部のはねは中心に向ふ。
- 3、二畫は中線に沿ひ、漸く彎曲して一畫の筆頭の下に至る。

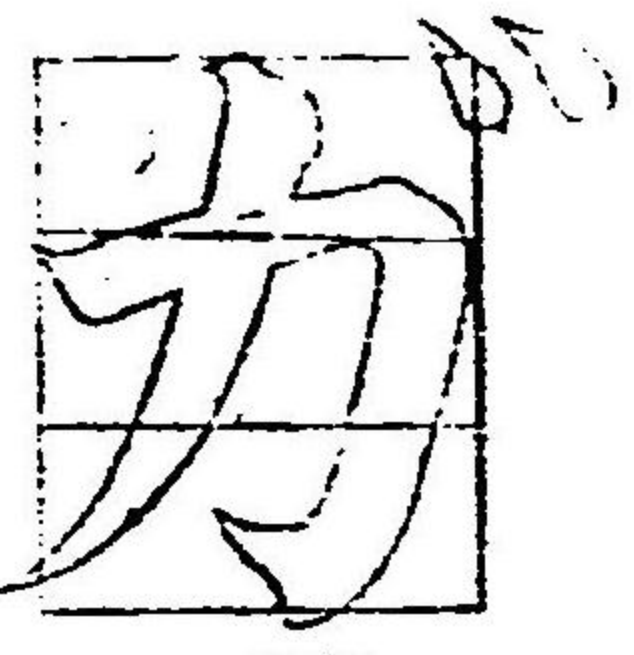
運筆

- 1、一畫、マの一畫に等し。
- 2、二畫、チの三畫に等し。

ガ
字形

一ノ九
二ノ二五
フ

1、全形



縦長にて左に傾く。

- 2、縦長の四角形の中に入れ見れば、一畫の一部は横の第一分線に中り、二部は中線に向ひて傾き、三部のはねは殆ど六十度の傾をもつ。
- 3、一畫の一部と、其二部との長さは、殆ど等しい。
- 4、三畫は中線の上端より起り、二畫の二部に平行し、一部の筆頭の下に至る。

運筆

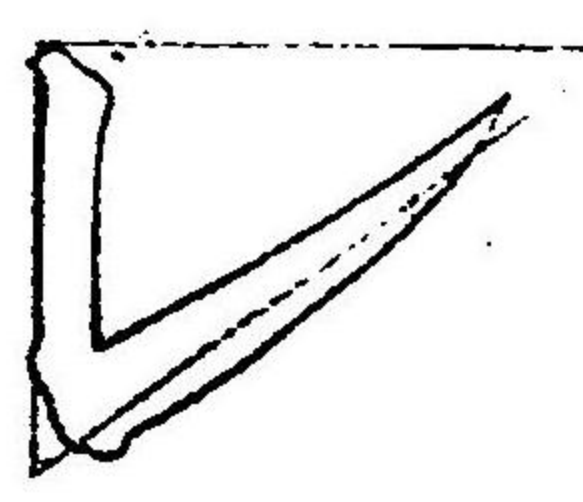
1、一畫、「トン」、「ズー」、「ウ」、「ズー」、「ウ」、「チ・ン」、二部は「ズー」と縦線を引く心にて力を入れたるまゝ、大事に筆を稍左に引き、少し彎を作る。「チ・ン」のはねは、ホの二畫のはねの心なれど、其はね出しの向きは

稍横に近く、而して、其筆末空に半圓を畫きて二畫の筆頭に向ふ。
2、二畫、はノの心。

レ
一ノ二九
二ノ二七
ン

字形

1、全形



ンに近い。

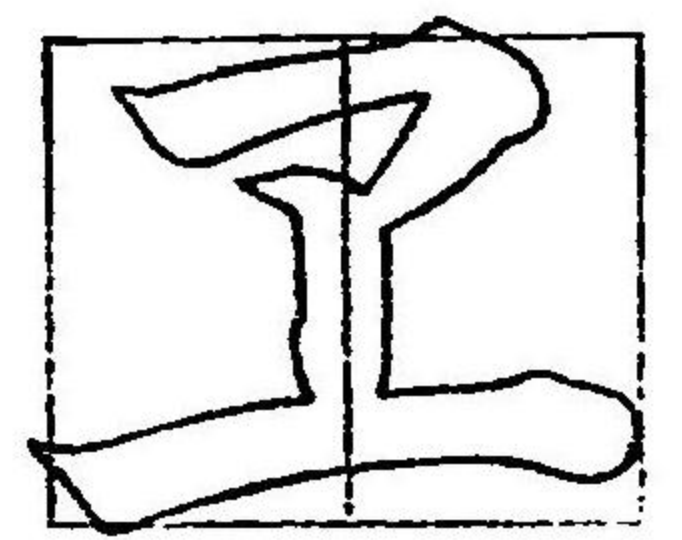
運筆

1、大體ルの二畫に等しい。

エ
一ノ二八
二ノ二九
ア

字形

1、全形



平たき四角形と見うる。

2、二畫は中線に中り其長さは一畫の長さと略等しい。

運筆

- 1、一畫、は大體アの一畫と等しいが、其筆頭は「チ」^{一ノ二}と軽く當る。
- 2、二、三、畫、はエの二、三、畫に等しい。

教授上の注意 アの一畫のはね下に向き、二畫のはらひ縦になり、又は彎に過ぐるこゝ、カの一畫の二部が彎をなさず、若くは傾き過ぎ、又其二畫があまりに長くなること、レの二部彎をなす心なく、或は一部の末よりあまり鋭角に上にはねること、エの一畫のはねの向き下に傾き、これが爲め二畫とのつり合ひ、適當ならぬこと。右等は兒童の陥り易き缺點である。

ヲンドリヘイ

一ノ二七

一ノ六

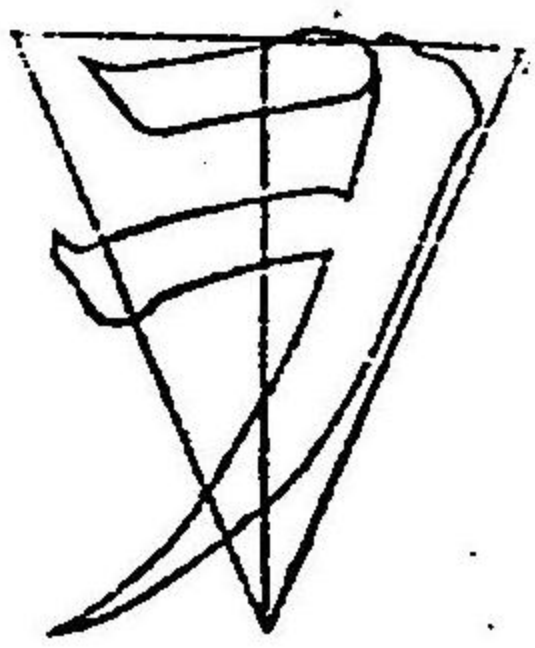
字形

一ノ二〇

ヲ

ラ

1、全形



二等邊三角倒立、ラに準ず。

運筆

- 1、一畫、は「チ」^{一ノ二}、「ズ」^{一ノ三}、「ウ」^{一ノ四}。
- 2、二畫、は「ト」^{一ノ五}、「ス」^{一ノ六}、「ラ」^{一ノ七}。
- 3、三畫「ト」^{一ノ五}、「ス」^{一ノ六}、「ラ」^{一ノ七}、皆ラに準ず。

ド

ネ

字形



1、全形 一に準ず。

- 2、二畫は横第一分線に中る。

運筆

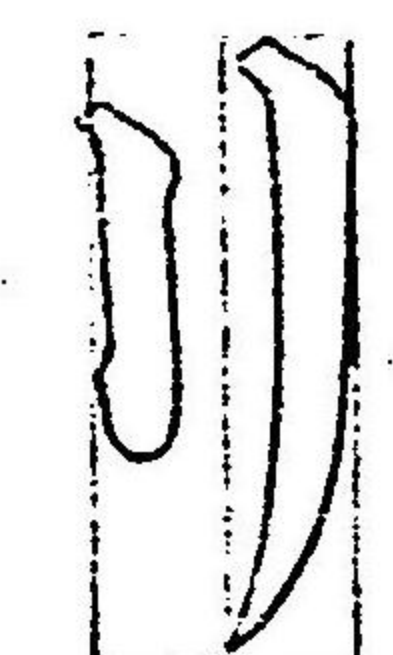
- 1、一畫、は縦線に等しい。
- 2、二畫、はネの一畫に等しい。

リ

字形

リ
二ノ九

1、全形



縦は横の二倍より少し長く、細長い四角形の中に入る。

- 2、二畫は一畫の二倍より少し短かく、略右邊に沿ひて下り、半ばより少し彎をなし、邊をはなれ、筆末中線に至る。

運筆

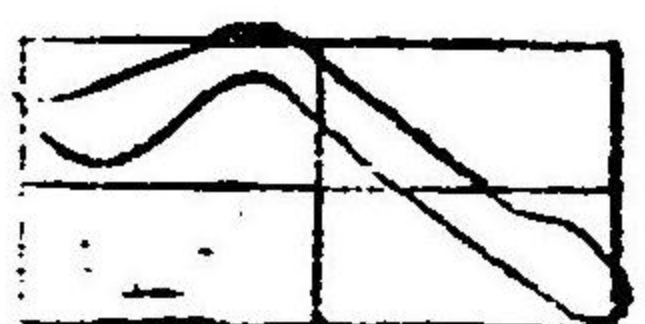
- 1、一畫「トン」、「ズー」、「ウ」。
- 2、二畫「トン」、「スラーリ」、とノの筆遣ひの如く、其形は初め縦に近く引く心にて書き、半ばより中指にて、筆を左に押し遣る心して彎を

作りつつ、中線に向って筆をぬく。

へ

字形

1、全形



平たき山形。

- 2、一部は分線より起り、上邊に接し、上部はここより一部の長さの、二倍の長さを保ち、下邊角に達す、而して兩部の間の角は鈍角である。

運筆

- 1、「トン」、「ズー」と拇指の力にて斜に筆を押し上げ、「ウ」と極めて軽く止め、更に右下へ、斜に「ズー」、「ウ」と引き止む。此の時穂先きを立て稍戻す心持にて筆をぬく。

教授上の注意 ヲの二畫が一畫より長からず、其三畫が一、二、畫の

筆末に附かず、「スラリ」のはらひ短かき等はナの書き方の通弊、トの二畫の下り過ぎ、其點の長くなり。リの兩畫の筆末つぼまり、ソとまぎらはしきに至り、への角大なる鈍角ならざること等も、兒童の筆寫上屢々認むる病である。

イヌノセナカ

既ノ三
一ノ六
二ノ一

既ノ二
一ノ九

既ノ二
一ノ八

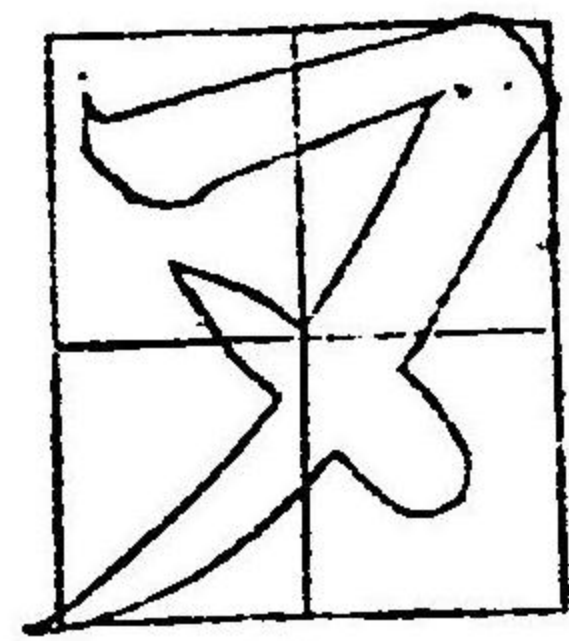
一ノ二三

ヌ

ス

字形

1、全形



縦長の四角形内に入る。

2、一畫の二部と、二畫とは、略方形の對角線上にある。

運筆

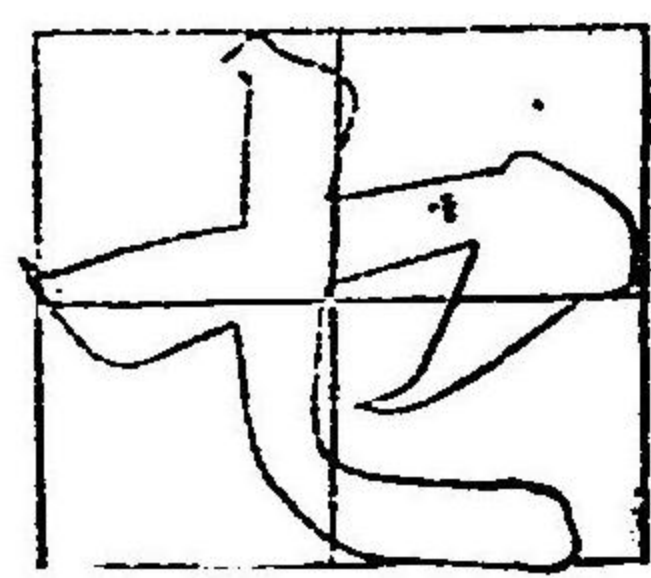
1、一畫、は略スの一畫と等しく、其二部を稍縦に近くはらふ。
2、二畫、はスの二畫の筆遣ひと等しく、一畫の二部の中部にて交叉するやうに下筆する。

セ

ヤ

字形

1、全形



略正方形の中に入る。

2、一畫は分線より起り右上に進み、其二部の筆末は中線に近くはねる。

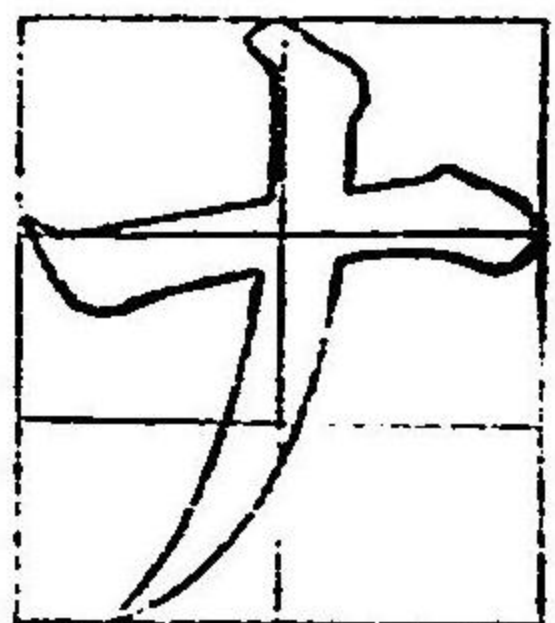
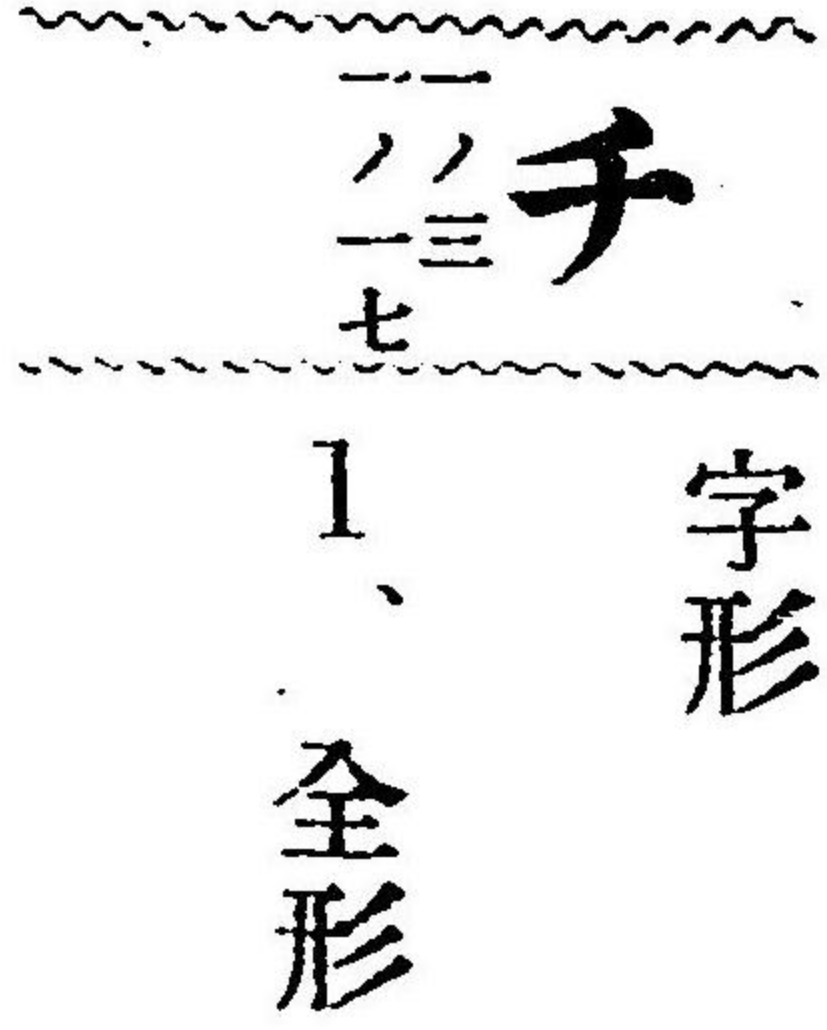
3、二畫の一部は中線の左に沿ひ、其二部は下の邊に沿ひ筆末は一畫の一部の終より稍右に止まる。

運筆

- 1、一畫、はヤの一畫に等しい。
- 2、二畫、はモの三畫の心にて書けばよい。

ナ

字形



稍縦長の四角形。

- 2、一畫は略第一分線に中る。

運筆

- 1、一、二畫、はチノ二、三、畫に等しい。

教授上の注意

又はスと略同一の注意を要する。

セはやとモの注意とを合せて見るべく。ナは二畫があまり傾かぬやう注意を要する。

サ

カ ナ ノ カ ゲ。

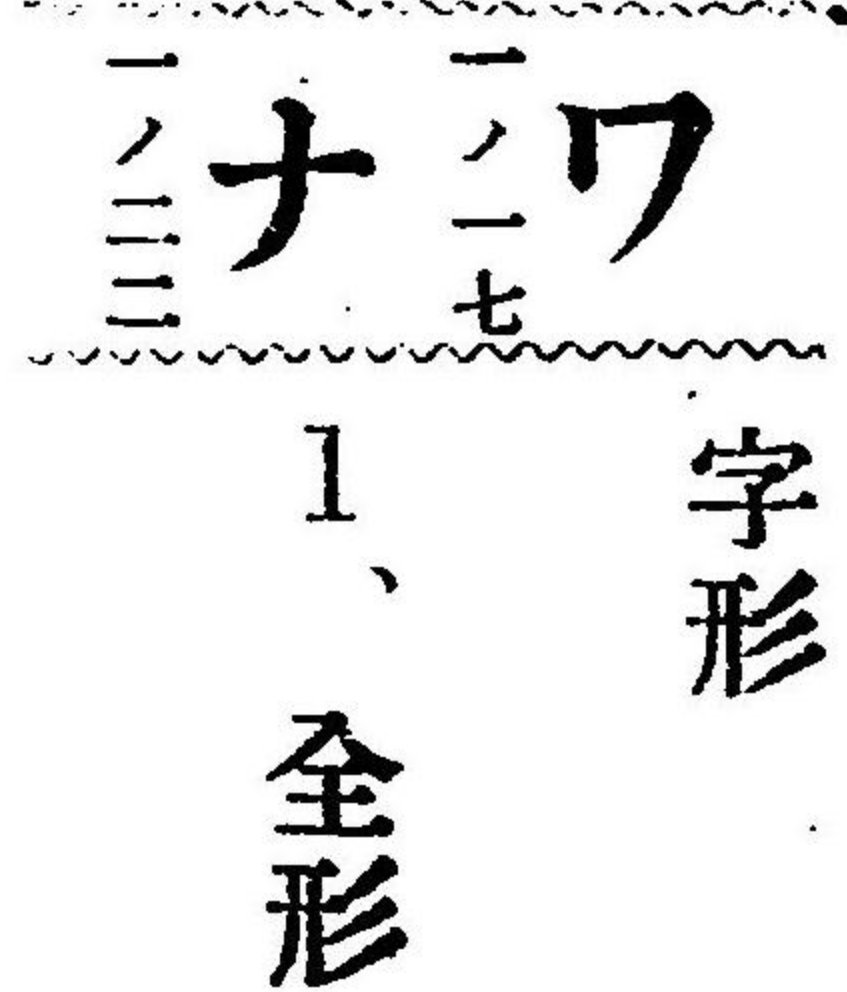


一ノ二四五

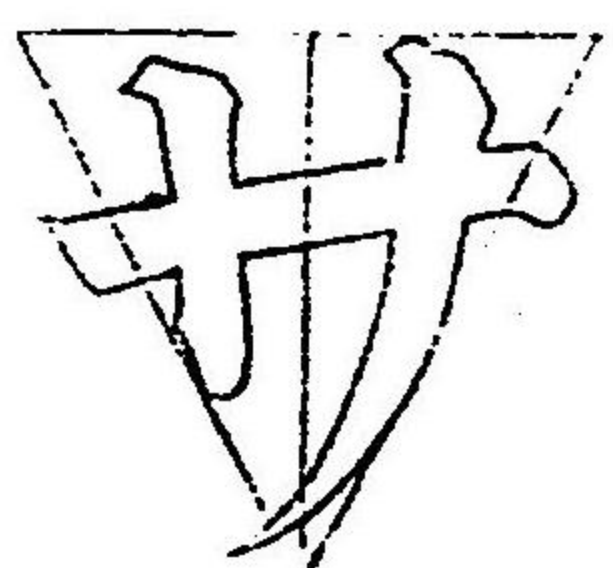
サ

ワ

字形



1、全形



略正三角形内に納まる。

- 2、一畫は高さの第一分線に中る。
- 3、二畫、三畫は一畫の長さを略三分したる點にて一畫と交叉し次第に下につほむ。

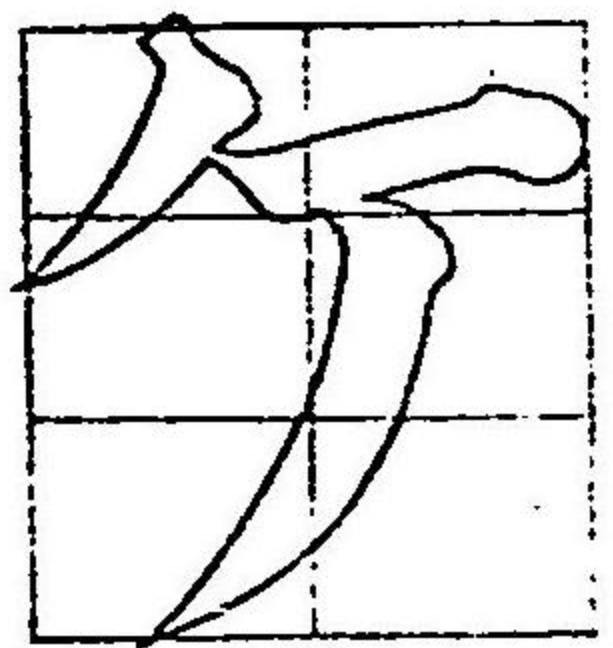
運筆

- 1、一畫、はナの一畫に準ず。
- 2、二畫、はワの一畫に準ず。

3、三畫、はナの二畫に準ず。

ゲ

ハ
テ
1、全形



縦長にして左に傾く。

2、一、二、畫は三分せる上部を占め、三畫は中線の右に起り、漸く彎をなして左にぬける。

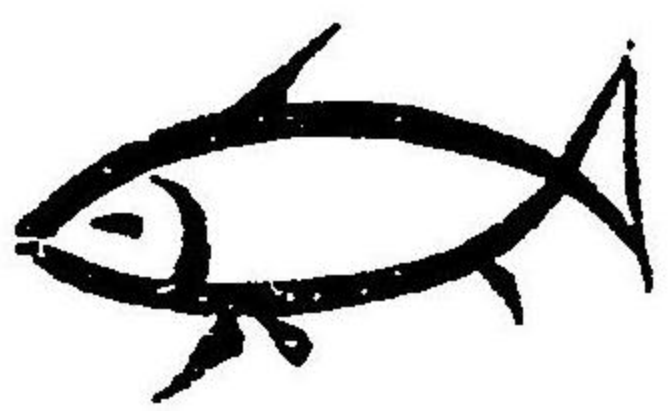
運筆

1、一畫、はハの一畫に準ず。

2、二、三、畫、はテの二、三畫に等しい。

教授上の注意。サは二畫と三畫との傾き僅少にて、殆どりに近くなり、若しくは強て傾げんとして、彎曲頗る大に失することが多い、ケは一

畫長大に過ぎ、二畫の右肩下ることが多い、特に氣を付くべきである。

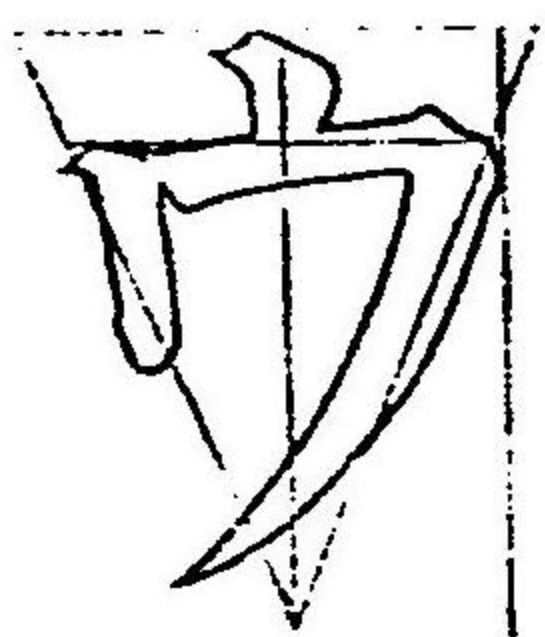


ウ
マ
ヤ
マ
グ
サ

一ノ二七六

ウ

ワ
1、全形



ワの上に一畫の點を載せた形。

運筆

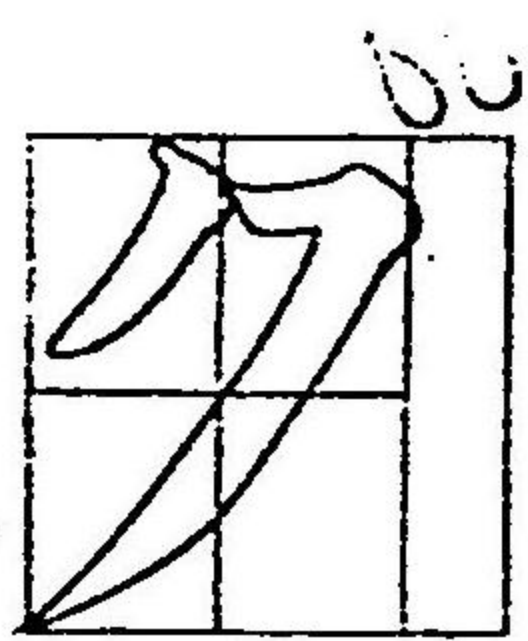
1、一畫は「ト」に當り、僅に筆を立てんとして直ちに「ズ」に向ひぬく。

2、二、三畫は「ワ」に等しい。

グ

ダ

字形



ダに準ずる。

運筆

教授上の注意

ウは一畫と三畫の一部との密接せざることが、兒童の誤り易き點である。こは畢竟一畫の筆末と同一水平線上より二畫の筆を起すことが出来れば、此病はなくなる故、其點に注意すべきである。其他は「ワ」の注意と等しい。

グは「タ」と同じく、一畫と二畫の二部と平行せず、筆末に至るに従ひ接近する弊が多い。

トリ

ガ

キマス。

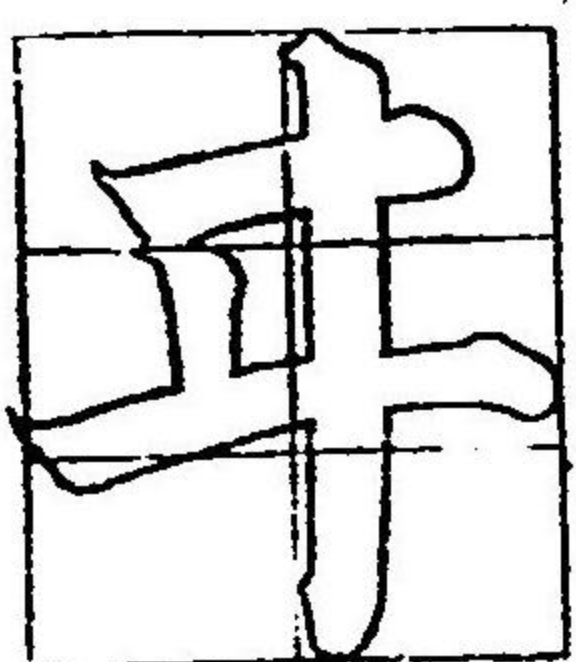
一ノ二八

キ

エ

字形

1、全形



稍縦長の四角形。

ト

2、一畫は第一分線の上部にある。

3、二畫は一畫の筆頭の稍内側に起筆し、一畫の約二分一の長さを保つ。

4、三畫は第二分線に起り次第に上に出づ長は一畫の約二倍。

5、四畫は中線の右に沿ひ二畫と平行す、長さは三畫より稍長い。

運筆

國語書方教法及教授案

- 1、一畫、三畫、はエの一畫、三畫に等し。
- 2、二畫、は「ト」に當り、直ちに下に「ズ」にぬくこと、エの二畫に類し、而してこれより短かい、故にウの一畫の稍長きものを書く心にてよ。
- 3、四畫、はトの一畫に等し。

教授上の注意

キの一畫、三畫の右肩下りて水平となり又二畫が短か過ぎて點になることが兒童には多い。

一 二 三 四 五

一ノ三三〇
三三三

六 七 八 九 十

ナ 字形

1、全形



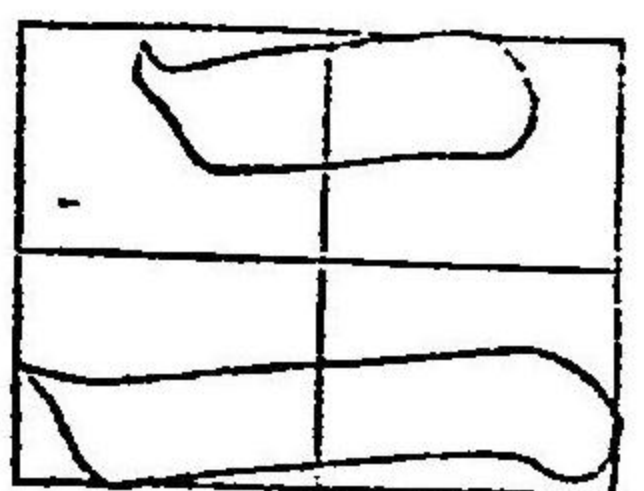
一文字

運筆

1、「ト」に、「ズ」、「ウ」。「ウ」にて穂先を立て、稍戻す心地にて直ちに筆をぬくこと、ナの一畫に等しく、筆頭と筆末と相向ひ全體にて下を覆ふ心持に書く。

字形

1、全形



平たき平行の二線

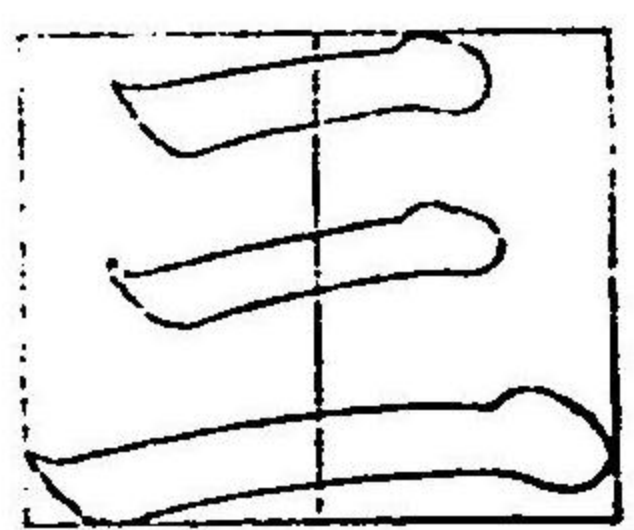
運筆

- 1、一畫 「チ」、「ゾー」、「ウ」、片假名のニの一畫の稍長さ心。
- 2、二畫 「トン」、「ゾー」、「ウ」、一に等しい。

三ニ

字形

1、全形



稍平たき平行の三線。

- 2、一、二畫の長さは略等しく、三畫は左右に長い。
- 3、各畫の間相等しきを本體とすれど、二畫は筆寧ろ上に向ひ、三畫は筆末下を覆ふ心なる故、筆末部に於ては、一、二畫の隔りは二、三畫の隔りより稍小である。

運筆

- 1、一畫は「チ」、「ゾー」、「ウ」と稍仰ぐ心に書く。

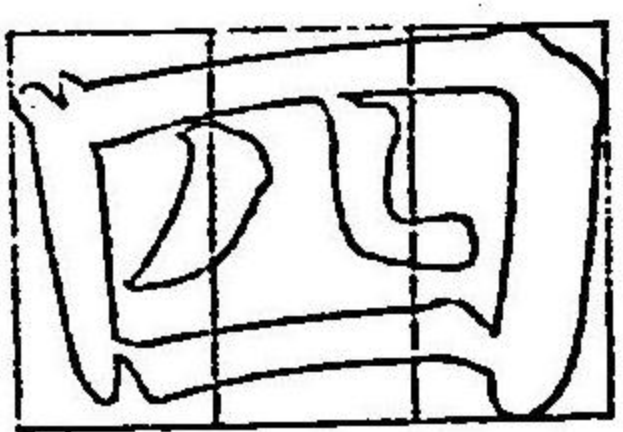
- 2、二畫は一畫に等しい。

- 3、三畫は「トン」、「ゾー」、「ウ」と上を受けて下を覆ふ心で書く。

四

字形

1、全體



平たき四角形。

- 2、兩肩開き兩裾つぼむ。

- 3、三畫は略縦の三等分線に當り、四畫は同じく右の三等分線の右に沿ひて下り、長さの半にて右に曲がる。

- 4、五畫は二畫の一部に平行し、一畫と二畫の二部の間に納まる。

運筆

- 1、「一畫 トン」、「ゾー」、「ウ」、ローの畫に等しい。

2、二畫は「トン」、「ズー」と引き、「ウ」と筆を少し右下斜に押へ、直ちに下に向ひ、稍内方に彎をなす心にて「ズー」と引くことカの一畫の二部の短かきものゝ如く、「ウ」と止め筆を起して筆頭に向つてぬく。二畫の二部の長さは一畫より心持長く、而して一畫と相對する様に書く。

3、三畫は「トン」、「ズン」と書くことハの一畫の如し。

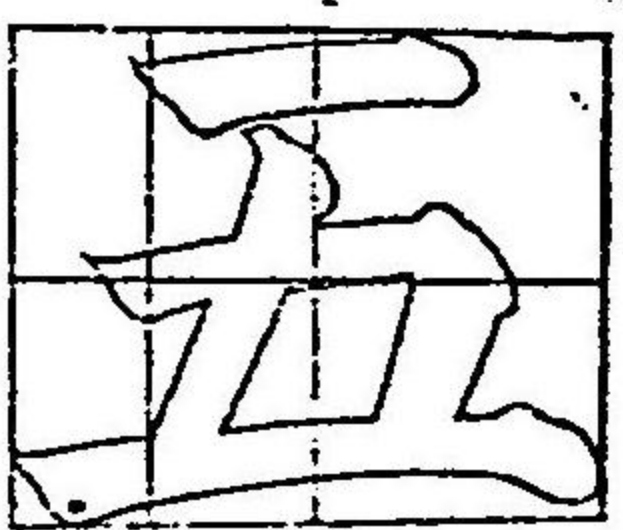
4、四畫は「トン」、「ズー」、「ウ」とヒの二畫を小さく書く心にする。

5、五畫は敢て彎形をなすを避け其筆頭と筆末は一、二畫の筆の間に納まるよゝに書く。

五三 字形

ユ
ク

1、全形



大體三の如くである。

2、一畫は三の一畫より稍短かく仰ぐ。

3、二畫は一畫の中央より斜に左に引き、一畫の筆頭の直下に至る。

4、一畫と二畫との長さは略等しい。

5、三畫の一部は一畫より稍長く、其二部は二畫より稍短くしてそれに平行す。

6、四畫は二、三畫の筆末を包み一畫の約二倍の長さを保つ。

運筆

1、一畫「チ」、「ズー」、「ウ」。

2、二畫「トン」、「ズー」、「ウ」、クの一畫を少し縦に書く心。

3、三畫は「チ」、「ズ」、「ウ」、「ズ」と書くことユの一畫に略等しい。
 即其一部の末は確と押さへ二部は幾分か「ズン」とはねぬく心を交ふる
 位に書くがよい。

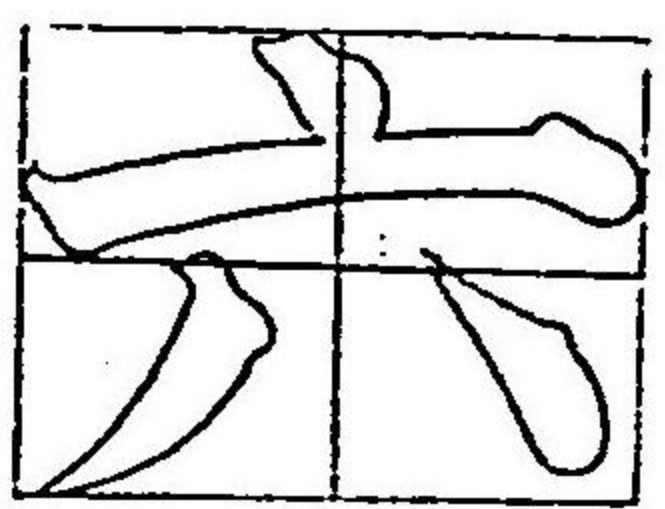
4、四畫は三の二畫に等しい。

六

ハ一
一ノ六
二ノ五

字形

1、全形



平たき四角形と見らる。

2、一畫、二畫は分線の上部に屬し、三畫、四畫は下部に屬す。
 3、二畫と三、四畫との間は、略二畫の筆の肉の太さに相當する隔りを保つ。
 4、三畫、四畫は共に二畫によりて覆はれ、其下を出てず、而してよく

上を捧ぐる大きさを保つ。

運筆

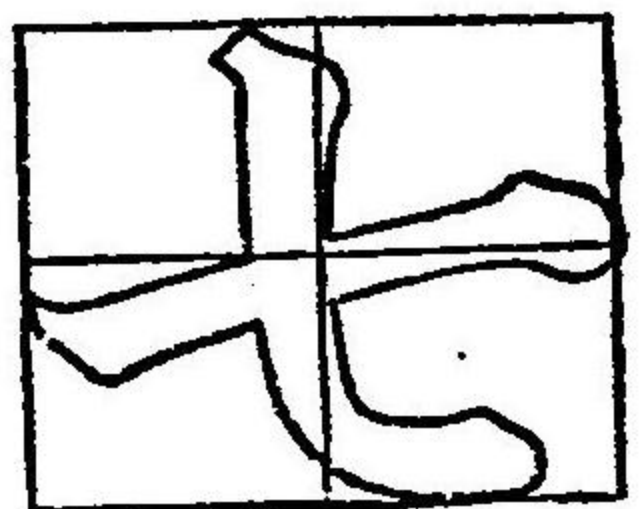
- 1、一畫「ト」、ネの一畫に等しい。
- 2、二畫は一に等しい。
- 3、三畫、四畫はハの筆遣ひに等しい。

七

モ
一ノ八

字形

1、全形



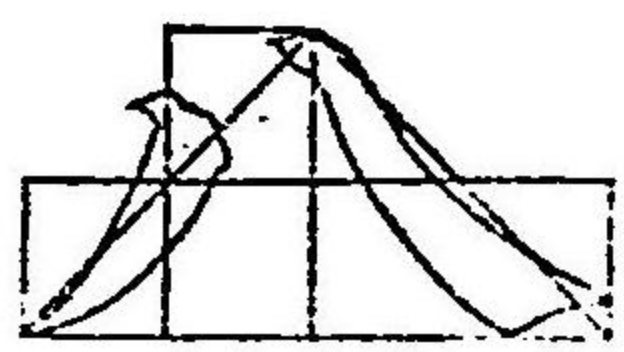
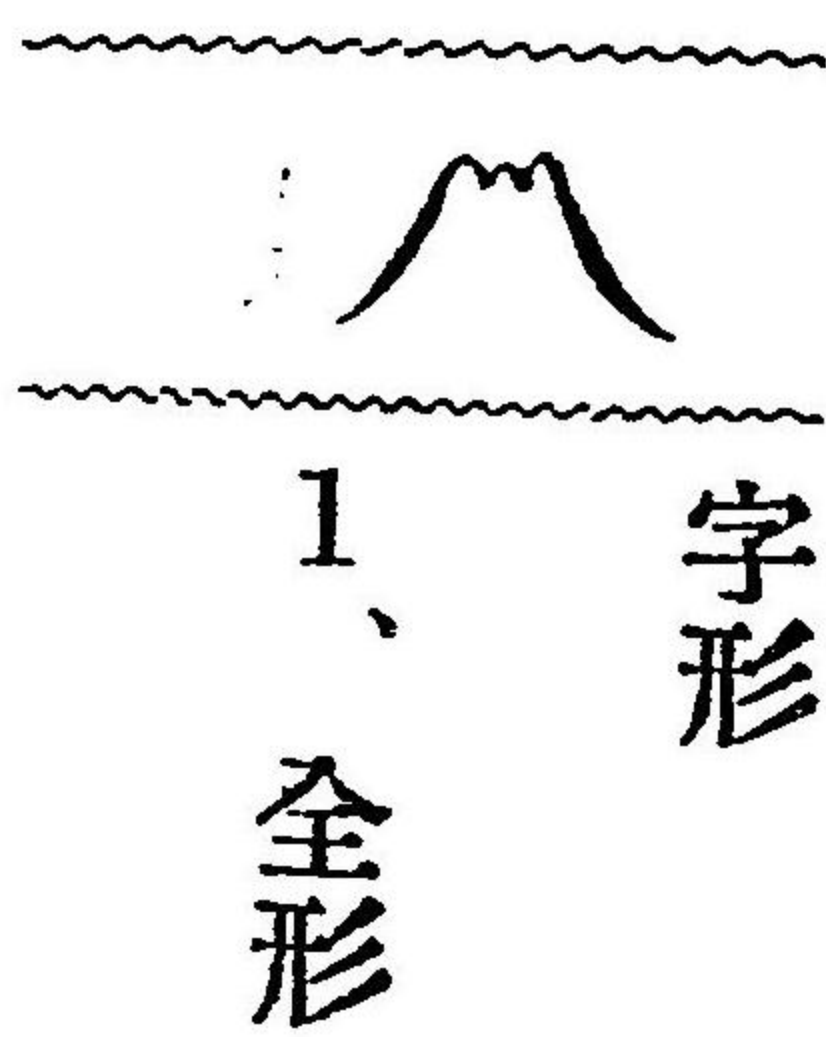
平たき四角形に入る。

2、一畫は殆ど分線上に中り、二畫の一部は中線の左に沿ひて下り、次第に右に彎曲して二部となる。二部の長さは一部が一畫と交りたる點の下部の長さに略等しい。

運筆

- 1、一畫、は一に等しく、右肩をやゝ上げる。
- 2、二畫、はモの三畫に等しく、「ト」ン、「ズ」ー、「ウ」と書く。

八



稍平たき三角形。

- 2、一、二畫は互に背く様をなす。
- 3、一畫は三角形の左邊に沿ひ、其邊の半より稍長く、二畫は右邊に沿ひ、殆ど全長を占む、大體波の縦に立ちたる姿。

運筆

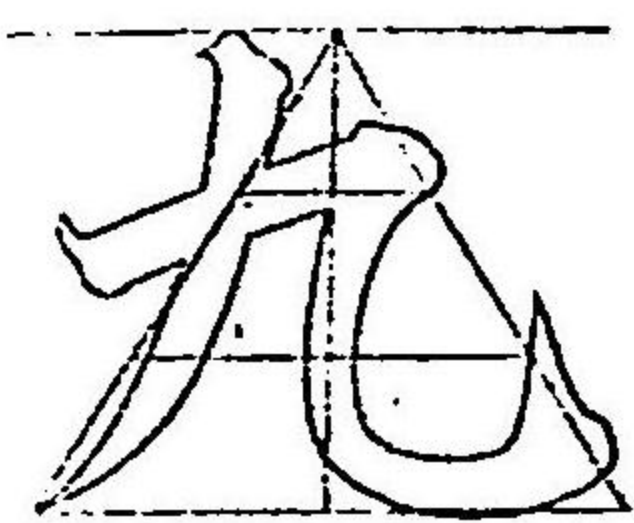
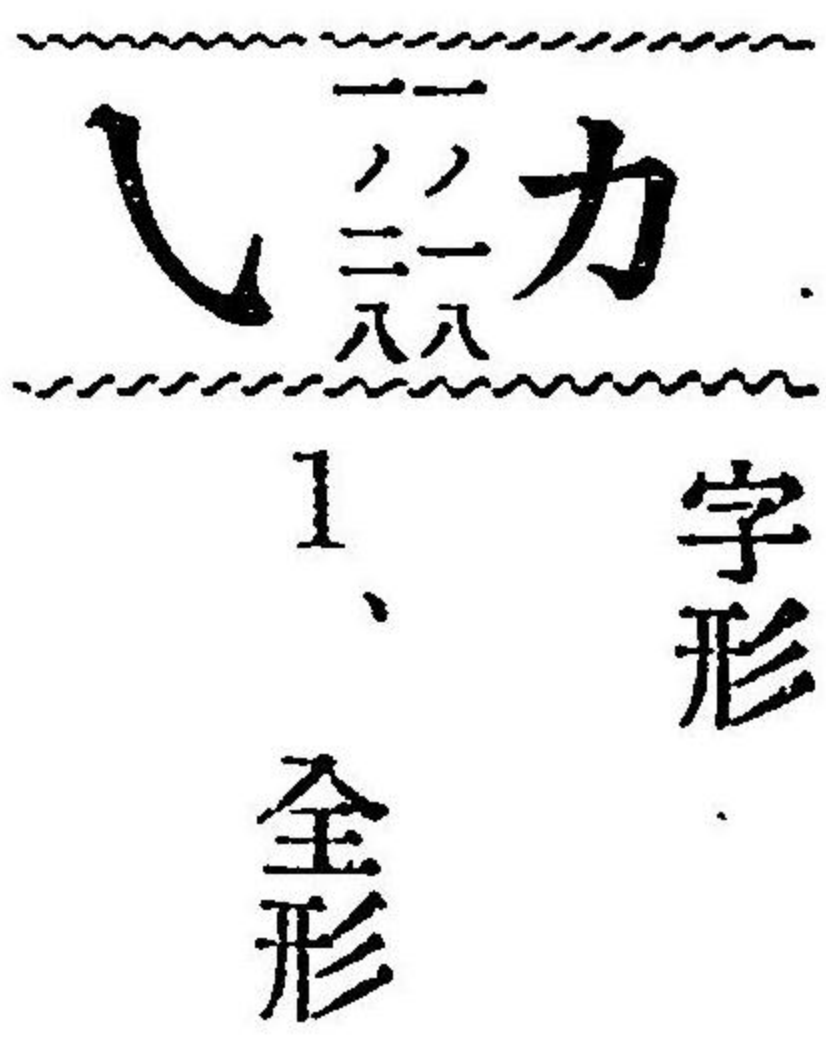
- 1、一畫は略ルの一畫に等しい。

- 2、二畫「ト」、「ズー」、「ウ」、「ズラリ」と上の圖の如く書く。即ち「ト」と下方より斜に上方に向ひ軽く當り、「ズー」と次第に

力を入れて大事に引き「ウ」と止まりたらば徐々筆を右平

にぬく。

九



下開きて相背き、殆ど正三角形の内におさまる。

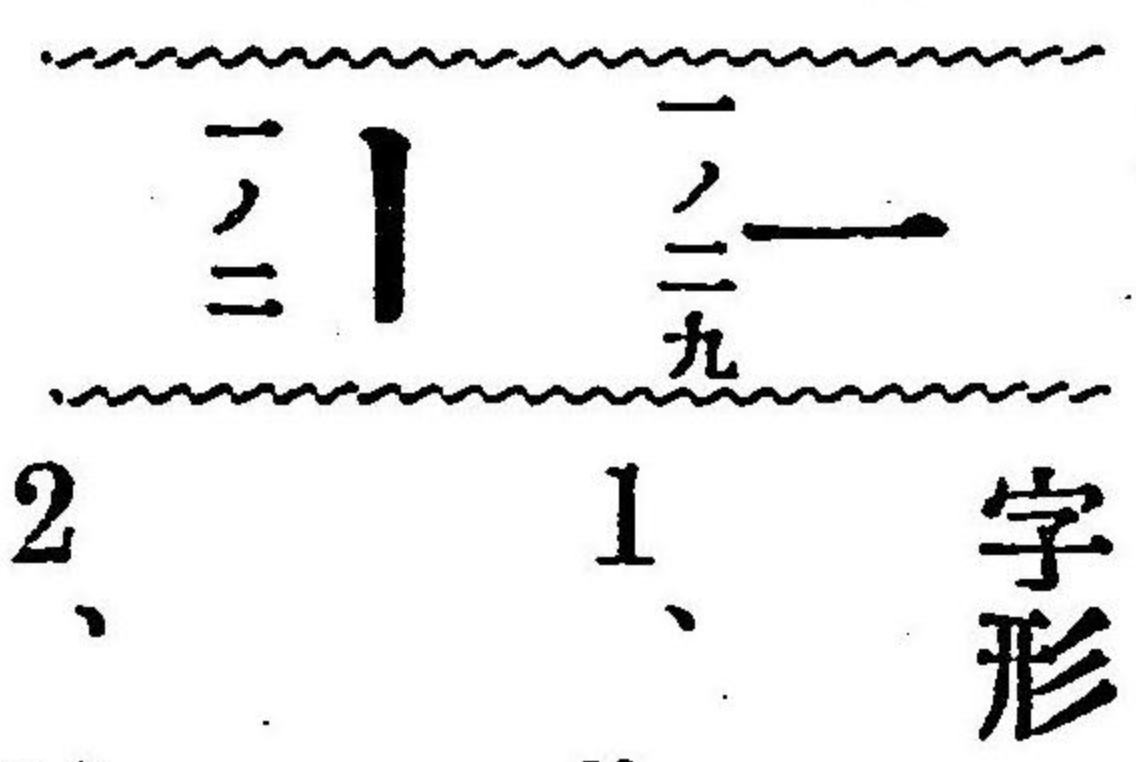
- 2、一畫は略左の邊に沿ひて縦に近い。
- 3、二畫の一部は高さの第一分線に中り二部は腕を曲げたる様にて一畫に背き彎をなし、其背中線に觸れ、腕の下臂に當る所即三部は一畫の筆末より稍下方迄出で、右の底角に至り、中線に平行して上にはね

る。

運筆

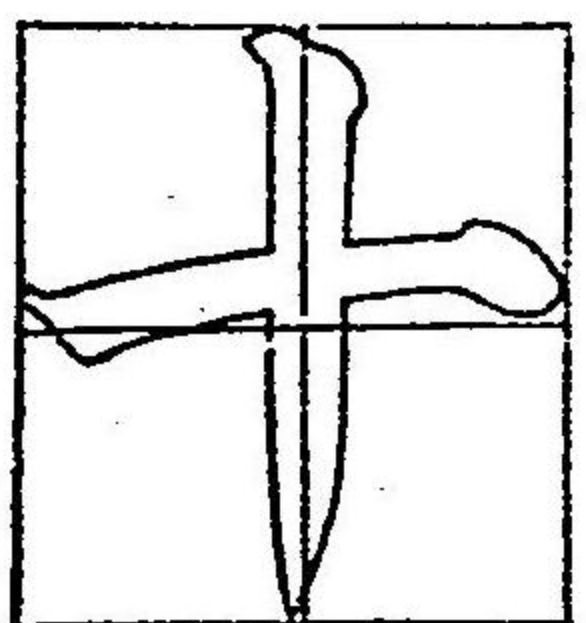
- 1、一畫 はカの一畫に等しい。
- 2、二畫 は「トン」、「ズー」、「ウ」、「ブー」、「ウ」、「チン」、主として拇指にて右上へ斜に引き「ウ」と止め、直ちに穂先きを左に戻すやうにし、中指にて「ブー」と引き回はし、一氣に横腕を作り、こゝに「ウ」と止まり、少しく筆を立てながら眞直に上に向ひはね出す。

十



字形

1、全形



十文字。

- 2、二畫は懸けたる針の如き形にて、其尖り丈が一畫より長い。

運筆

- 1、一畫、一に等しい。
- 2、二畫 は「トン」、「ズー」と一の如き縦線を書く心にて引き筆末を止めず、ウの一畫の長さものゝ如く、眞直に下に引きぬく。

教授上の注意

一より以下は漢字の第一歩として教授をなすもの故特に詳密に注意して、一層確かに書かしむるが必要である。

- 一、二、三 の如き疎畫の文字は、寛かに書く心持が大切である。
- 四は下部つぼまらず、丈け長くなり、三、四畫が上につきて、下方に大なる空所を生じ、或は五畫が一畫の線と二畫の二部の筆末の間に納まらぬことが兒童には多い。

五は二畫と三畫の二部との傾斜工合を誤り、或は二畫の二部の長きに失し、爲めに四畫が此筆末を上を上に收めんとして自然に右下りの形とな

ることが多い。

六は三、四畫即八の字の如きもの、工合及其の兩畫の筆頭が、二畫の横線に密接して字形全體を損することが多い。

七の二畫はモの畫の弊と等しい。

八は二畫の筆頭當りなく、又波形の所、單に下に彎をなすのみにて、止りもなく、のべつに筆を抜くか、若くは止まりて斜に撥ね出すか、其一の弊に陥り易い。

九は二畫の二部の曲り一氣に行かずして七の曲りの如くなり、又はあまりに角張りて曲り、筆末の下りて「ウ」と止まり、又撥ね出しが上向に眞直にならぬなど、兒童の通弊である。

第一學年用手本中の新出文字一覽表

タ	ロ	ー	オ	チ	ヨ	ニ	ハ	ヤ	マ	シ
イ	ネ	コ	メ	ム	ギ	モ	ミ	ノ	エ	ツ
ソ	ラ	ル	テ	ポ	ユ	ビ	ブ	ス	ワ	ン
ア	ガ	レ	エ	ヲ	ド	リ	ヘ	ヌ	セ	ナ
サ	ケ	ウ	グ	ク						
一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	

國語書方教法及教授案尋常小學第一學年用終

明治三十七年五月十三日印刷
明治三十七年五月十六日發行

國語書方教法及教授案
尋常小學第一學年

定價金貳拾五錢

著作兼
發行者

東京市日本橋區新右衛門町十六番地

日本書籍株式會社

右代表者 大橋 新太郎

印刷者

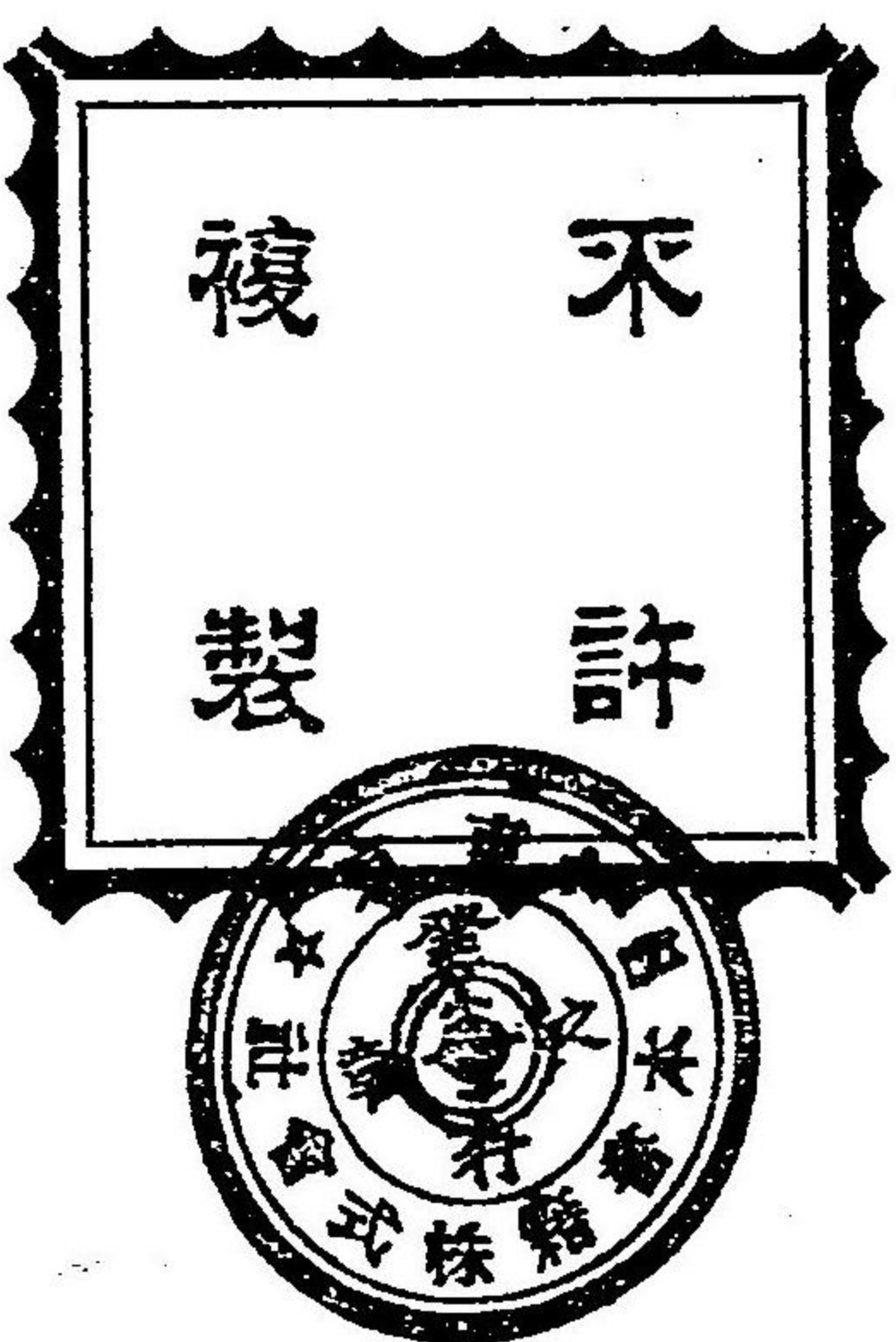
東京市京橋區四紺屋町二十六七番地

石川 金太郎

印刷所

東京市京橋區四紺屋町二十六七番地

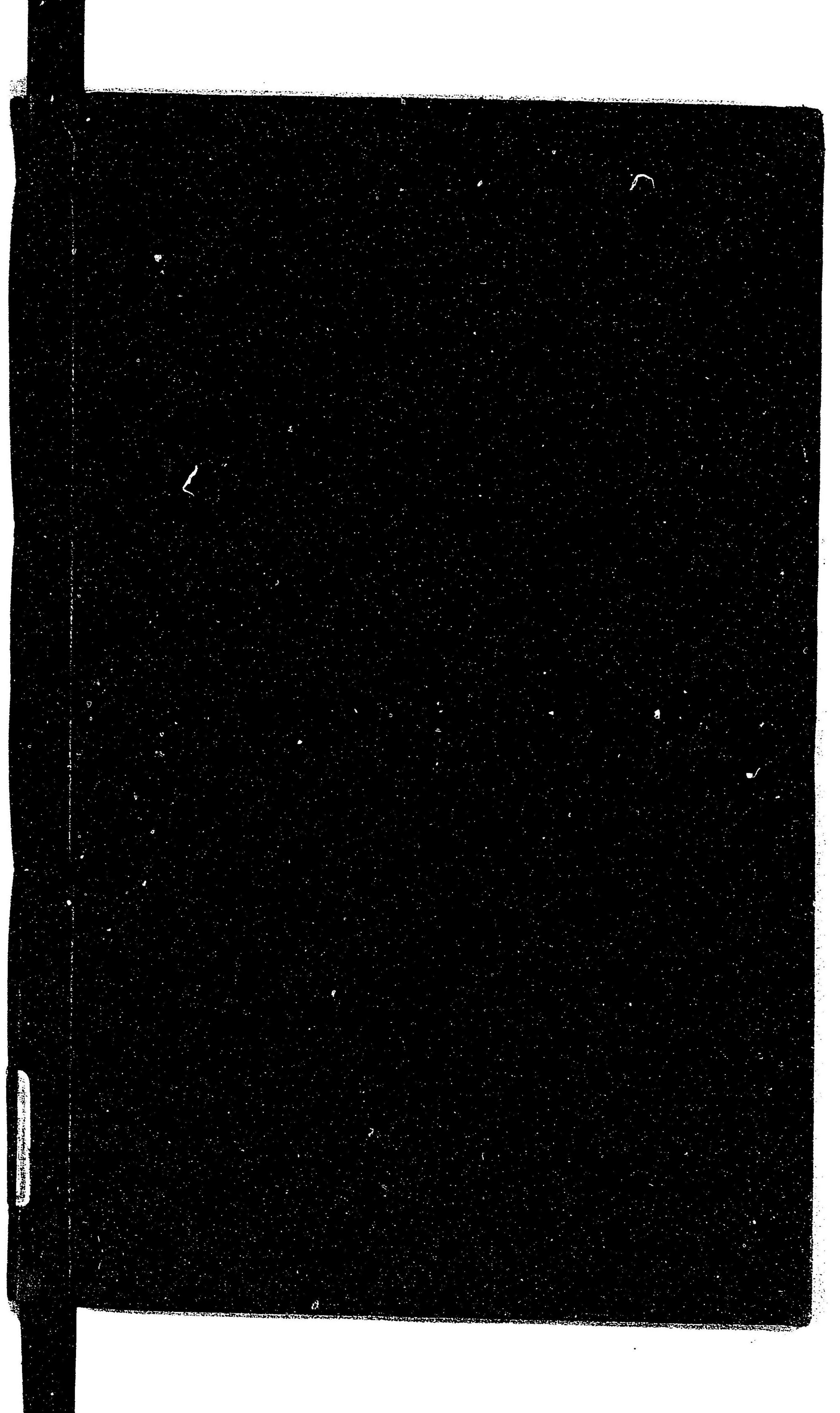
株式會社 秀英 舍



發行所

東京市日本橋區新右衛門町十六番地

日本書籍株式會社



國語書方教法及教授案
尋常小學第一、四學年

小學教科書
478

048188-001-1

特26-383

國語書方教法及教授案

尋常小學第1, 4學年

日本書籍

M37

BEF-2157

